

春日井市における世代間交流による 地域活性化・学生共育事業

平成 29 年度 成果報告書



中部大学

はじめに

中部大学は、建学の精神「不言実行、あてになる人間」に基づき、地域社会に貢献できる人材の育成を進めるため、平成 25 年度～平成 29 年度まで、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC 事業）に採択された「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」において、様々な事業を展開してきました。

このCOC事業の目的は、中部大学が地域の知の拠点として、地域と連携した知の創造及びその継承を通じて、地域に目を向け問題解決に取り組むことができる「あてになる」人材（地域創成メディエーター）を育てることと、大学の持つ人材や技術、知の資産を使って地域再生、地域活性化に貢献する各種事業を展開して地域の活性化を図ることです。この目的を達成するために、学内で地域関連の正課教育（「地域共生実践」（2 単位）の開講と既存の地域関連科目の活用を行うとともに、本学と地域（春日井市、高蔵寺ニュータウン等）が連携して、報酬型インターンシップ、高齢者・学生交流（Learning Homestay）、シニア大学(中部大学アクティブアゲインカレッジ)、キャンパスタウン化、生活・住環境を考えるまちづくり、コミュニティ情報ネットワークの6事業を展開してきました。

平成 29 年度のCOC事業では、創造・協働・自立の精神を身に付けた地域創成メディエーターの育成に、明確な目標設定と評価をおこなうためのルーブリック評価を導入し、「学ぶ」と「動く」の各種活動を行ってきました。その結果、所要の要件を満たした 132 名の学生を地域創成メディエーターに認定することができました。また、29 年度が、文部科学省のCOC事業としては最終年度となることから、これまでの活動成果を当初掲げた達成目標と照らし合わせて検証しつつ、活動を展開しました。

本成果報告書は、29 年度のCOC事業において、本学で実施した各種活動とその成果をまとめたものであります。本報告書の内容を学内外に広く発信して、本学のCOC事業に関するご理解を深めていただくとともに、次年度以降の地域連携教育・研究活動に活かしていきたいと考えています。

次年度の 30 年度以降においては、過去 5 年間のCOC事業の経験と成果を踏まえて、大学独自の地（知）の拠点事業（地域連携共育事業）を継続し、その人材育成目標及び地域貢献目標を確実に達成すべく努力を重ねたいと存じています。学内外の多くの方々には引き続きご支援・ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月

中部大学 COC 地域連携教育研究センター長

松 尾 直 規

-目次-

はじめに	1
1. 概要	
(1) 目的・目標・概要図	5
(2) 実施体制・メンバー表	11
2. 活動報告	
(1) 全体の活動成果	17
(2) ワーキンググループ報告	
① 正課教育WG	45
② 報酬型インターンシップWG	47
③ コミュニティ情報ネットワーク事業WG	49
④ 生活・住環境を考えるまちづくりWG	52
⑤ 高齢者・学生交流・LHS WG	55
⑥ シニア大学WG	58
⑦ 高蔵寺NTキャンパスタウン化WG	61
(3) 地域志向教育研究経費の成果報告	63

1. 概 要

(1) 目的・目標・概要図

1. 概要

(1) -1 目的

中部大学（以下本学）「地（知）の拠点整備事業」：『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業（以下本事業）』は平成30年3月に5年計画の最終年度を迎える。事業目的は5年間を通して設定されているため、ここでは5年間の事業目的の概要をあらためて記しておく。

本事業は初年度の報告書にも述べられているように本学が「地域課題の解決」および「地域に役立つ人材養成」を目的とする地域再生・発展のための地（知）の拠点となるための大学改革事業である。またその改革の成果を地域社会に還元し、地域社会に貢献していくことを目的としている。

本学はその基本理念として、『不言実行、あてになる人間』を信条とし、豊かな教養、自立心と公益心、国際的な視野、専門的能力と実行力を備えた、信頼される人間を育成するとともに、優れた研究成果をあげ、保有する知的・物的資源を広く提供することにより、「社会の発展に貢献する」こととしており、その社会貢献上の使命として、「さまざまな社会活動に参画し、大学が保有する知的・物的資源を活用することによって、地域を中心とする社会の福利向上と発展に貢献する」ことを学内外に明確にしており、地域貢献・地域連携は本来、本学の使命でもある。

すなわち本学は建学の精神「あてになる人間」育成プログラムの重要な柱として本事業を遂行しており、社会・産業界の中で地域にも目を向けて「行動できる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「頑張れる人間」「信頼できる人間」としての学生育成を図り目指している。本学はこの事業を通してさらに一層地方大学の社会的使命を探究し、持続可能な未来社会の創造とその教育のあり方をさらに力強く追求する。

I. 全体としての目的

本事業全体の目的をさらに具体的に述べれば、地域にも目を向けて地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指し、現代社会の主役である高齢者にとって安心・安全で豊かな社会づくり、まちづくりを春日井市に展開する。その成果を春日井地域に還元し、都市づくりを進める。さらに、その成果と知識を広く日本社会全体に拡大することで日本の発展に貢献していく。こうした実践活動を学生自身が担っていくことで、学生自身が実践的知識を深め、支援技術を学び、前述の地域であてになる人材に育っていく。

II. 教育上の目的

地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指す。

① 「地域連携教育改革・教育システムの構築」

現在まで進めてきた教育改革をさらに発展させ、地域社会に役立つ人間となるための行動計画を持てるよう、全学共通教育の科目として新たに『地域共生実践』を設置し、学部・学科にも地域志向関連科目を設置する。こうして基礎教育と専門教育を交互に

発展的に教育し、地域社会再構築のために必要な実践的人材を育成するための教育改革を目的とする。さらに最終的に中部大学が認定する“あてになる人間＝『地域創成メディエーター』”の育成を目的とする。

②「報酬型インターンシップ（就業体験）」

春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に学生を教育する**報酬型インターンシップ型の就労システム**を構築する。

さらに③「コミュニティ情報ネットワーク」事業、④「生活・住環境を考えるまちづくり」事業でも学生を研究活動に参加させることで、地域の課題を解決していく能力の育成にも資することが目的ともなっている。⑤「高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay (L H S)」、⑥「シニア大学 (Chubu University Active Again College : C A A C)」、⑦「高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化」といった地域貢献活動においても学生を社会貢献の実践に参加させ、高齢者と交流させることで、高齢化社会の地域課題を理解し、積極的に課題解決策を考える能力を涵養することも目的としている。

Ⅲ. 研究上の目的

地域活性化の課題研究として以下の研究の推進を目的とする。

③「コミュニティ情報ネットワーク事業」

地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がIT化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発研究を進める。

④「生活・住環境を考えるまちづくり」

春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域の住民が安心して快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する開発研究を行う。

その他社会貢献活動関連研究

「高齢者-学生交流・L H S」事業や「シニア大学」の開設などの社会貢献に関連しながら、地域の課題をさまざまな観点から調査研究し、地域活性化と高齢者の支援の手段を見いだしていくことを目的とした研究活動も並行して行う。

Ⅳ. 社会貢献上の目的

改革の成果を春日井を中心とした地域に還元し、地域の再生・活性化を支援するため、以下の地域社会貢献を目的とする。

①「地域連携教育改革・教育システムの構築」

地域に役立つ人材を教育機関として養成し地域に送り出すことで社会に貢献する。地域の課題を現実的に理解し、解決のために行動を起こすことができる“あてになる人材”を養成する。そして地域のコミュニティ活動の中心人物であり、リーダーとなることのできる知識と問題解決能力を持ち、良好な対人関係を維持できる人材を地域に送り出す。これは教育機関として重要な社会貢献活動である。さらに本事業では、春日井市の課題克服のための解決策を中部大学が軸となって展開し、現代社会の最重要課題である高齢化社会の以下の課題解決に挑戦する。

- ⑤「高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home stay(LHS)」
高齢世帯や独居高齢者の見守りや生活支援を目的に若者による高齢者との交流や同居活動を進める。
- ⑥「シニア大学 (Chubu University Active Again College : CAAC)」
高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的に実践教育を行う。
- ⑦「高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化」
高齢化で衰退した高蔵寺ニュータウンを活性化する目的で中部大学のキャンパス機能を高蔵寺ニュータウン内に拡大し、地域と大学が融合した若者も生活する場にしていく。
その他、③「コミュニティ情報ネットワーク」事業、④「生活・住環境を考えるまちづくり」事業でも研究活動を通して地域社会を安全・安心で便利なものとしていくことで地域社会に貢献していく。

(1) -2 目標

前項の目的を達成するため、今年度の目標を以下のように設定した。

I. 全体

- ① COC推進委員会委員とワーキンググループの拡充
各事業活動リーダー・副リーダーおよび各学部代表委員からなるCOC推進委員会の機能を拡大し、活動内容に応じてワーキンググループを随時拡充し（実施体制・メンバー表参照）、本事業全体の推進にあたる。
- ②「地（知）の拠点整備事業」の学内と春日井市住民への広報活動
 - 1)「地（知）の拠点整備事業」の学内周知・広報活動のために28年度の活動報告会を6月に学内で実施する。
 - 2)春日井市を中心とする地域住民への広報活動のために昨年度に引き続き地域連携市民フォーラムを10月に学外の春日井市内で実施する。
- ③春日井市との定期的協議の場の設定
昨年度に引き続き、春日井市との定期協議の場を設定し、自治体との連携を図る。
- ④NPO団体との定期的協議の場の設定
昨年度に引き続き、NPOとの連携協議の場を設定し、交流を図る。
- ⑤地域志向教育研究経費による教育研究の推進
昨年度に引き続き、地域志向教育研究経費を設定し、教育研究の推進を図る。
- ⑥地域創成メディアーターの育成
平成27年度までの立ち上げ期間から、昨年度は本格実施年度として具体的アクションプランを実施し、今年度も引き続き地域創成メディアーターの増加を図る。
- ⑦内部評価委員会の開催
学長を委員長とする学部長・研究科長会のメンバーに春日井市をオブザーバーに加え

て内部評価委員会を開催し、事業活動の報告とそれに基づいて評価を受ける。

⑧外部評価委員会の開催

大学・研究機関、行政、商工会議所の有識者からなる外部評価委員会を開催し、本事業の第三者評価を得ることで、事業の修正・改善に役立てる。

II. 教育

教育活動としては地域連携教育の推進と報酬型インターンシップの確立を目指す。

①地域連携教育改革を実施し、教育システムを構築する。

- 1) 地域共生実践を春学期5講義・秋学期5講義、並列開講の運営。担当教員・協力者の勧誘と増員。
- 2) 地域創成メディエーターへの導き、A L / T B L の勉強会の実施。
- 3) 地域創成メディエーター学生発表会（+エクスプレッション）を開催し、地域創成メディエーターをルーブリック評価に基づき認定する。

②報酬型インターンシップ制度を確立する。

- 1) 春日井商工会議所との連携強化。
- 2) 特命教授の会を開催。
- 3) 学生への説明会を開催。

III. 研究

研究活動としてコミュニティ情報ネットワークの構築と高蔵寺ニュータウンを中心としたまちづくり活動を展開する。

③地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がIT化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発を進める。

- 1) 医療情報システムのプログラム仕様の検討と改良・検証。
- 2) シニア大学の講義映像配信システムの開発。
- 3) N P O 活動情報受発信システムの機能強化。

④春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域住民が安心快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する地域開発を行う。

- 1) 高蔵寺ニュータウンの課題と問題解決法について住民との意見交換会を実施する。
- 2) まちづくり講演会を開催し、全学部の学生に「まちづくり」の意義と参加方法について学ぶ機会をつくる。
- 3) まちづくり勉強会（学内）、タウンウォッチング（学外）を実施する。
- 4) 正課並びに自主活動を強化する。

IV. 社会貢献

高齢者・学生の交流活動を実施し、社会貢献活動として高齢者-学生交流・Learning Home stay（L H S）事業、シニア大学、高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化の各活動を軌道に乗せる。

- ⑤高齢世帯および独居高齢者の見守りや生活支援を目的に、若者による高齢者との交流や同居を実践する。
- 1) 世代間交流会・LHSへのシニアの参加呼びかけ（広報活動）。
 - 2) KCGサークル（地域発の健康教室）の運営サポート。
 - 3) 地域連携教育セミナー、LHV体験報告会・ホストファミリー懇談会の実施。
 - 4) LHVの実施。
- ⑥高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的としたシニア大学を運営する。
- 1) 2・3期生の後期授業（春学期）を行い、2期生の修了式を行う。
 - 2) 4期生の入学式を行い、3・4期生の授業（秋学期）を行う。
 - 3) カリキュラムの充実を図る。
 - 4) 地域在住のシニアに対して体験入学の開催など、シニア大学を身近に感じさせる企画を実施する。
- ⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化を推進する。
- 1) 春日井市・URとの連携により地域連携住居を充実させる。
 - 2) コミュニティプラザ Kozoji の運用および地域住民による活用を促進する。

(1) -3 本プロジェクトの概観図

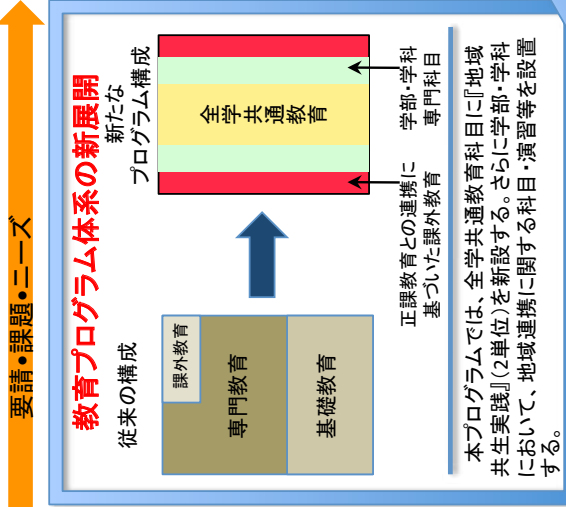
春日井市の知の拠点＝**中部大学**
 学部：7学部(29学科)、大学院：6研究科
 学生数：約10000人、教員数：約500人

地域の方々と学生、地域と大学がキャンパスの壁を越えて融合し、持続可能な新しい未来社会とその教育を春日井の地に実現する。
中部大学は平成26年に開学50周年を迎える。中部大学ならやれる！中部大学が成功させる！

あてになる人間の育成
**中部大学認定
 地域創成メディアエーター**

本プログラムで育成した、中部大学認定『地域創成メディアエーター』が、人と人との絆をつくる介在をし、活力あるコミュニティを形成する。

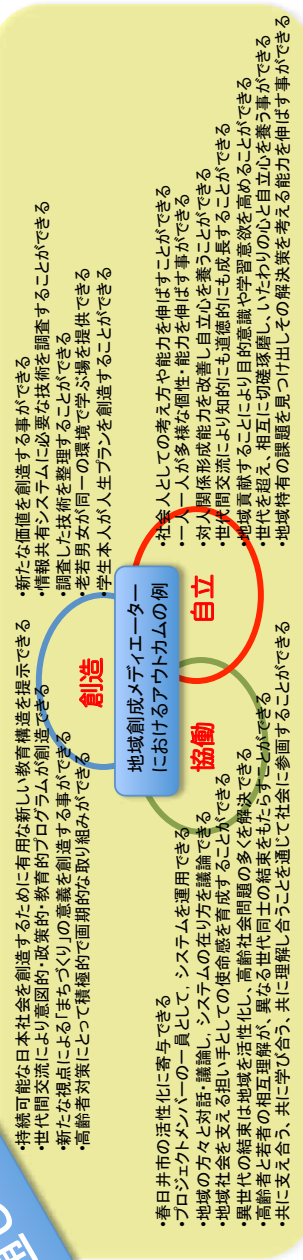
- 中部大学のCOCとしての目標**
- “地域”と言う名のシャワー(刺激)で学生を育てる。
 - 地域だけでは解決できない課題を、大学の持つシーズを活かして、地域と協働で取り組む。
 - “まちづくり”の不可欠な資源が次代を担う若者である。この意識を高め、地域と共に育てる。
 - 地域において優しい心配りができる、真のリーダー養成を目指す。
 - 地域からあてにされる大学を目指す。
 - 地域連携において、春日井モデルを明確にし、このモデルを全国に伝える。



本プログラム推定参加学生数：
 25年度：約50名、26年度：約80名
 27年度：約400名
 28年度：約600名
 29年度：約800名
 (以降、順次増加する。)

- 春日井市
- 自治体
 - 市民
 - 地域
 - 企業
 - 学校 (小・中・高)
 - その他

学内の実施体制
 学長主導の基、COC担当理事(兼)副学長を置き、本取組みを統括し、推進する。



協力・提案・シーズ

まわらうしりを通じて、共に学び、共に育つ(共学)・共に育つ(共育)!!

(2) 実施体制・メンバー表

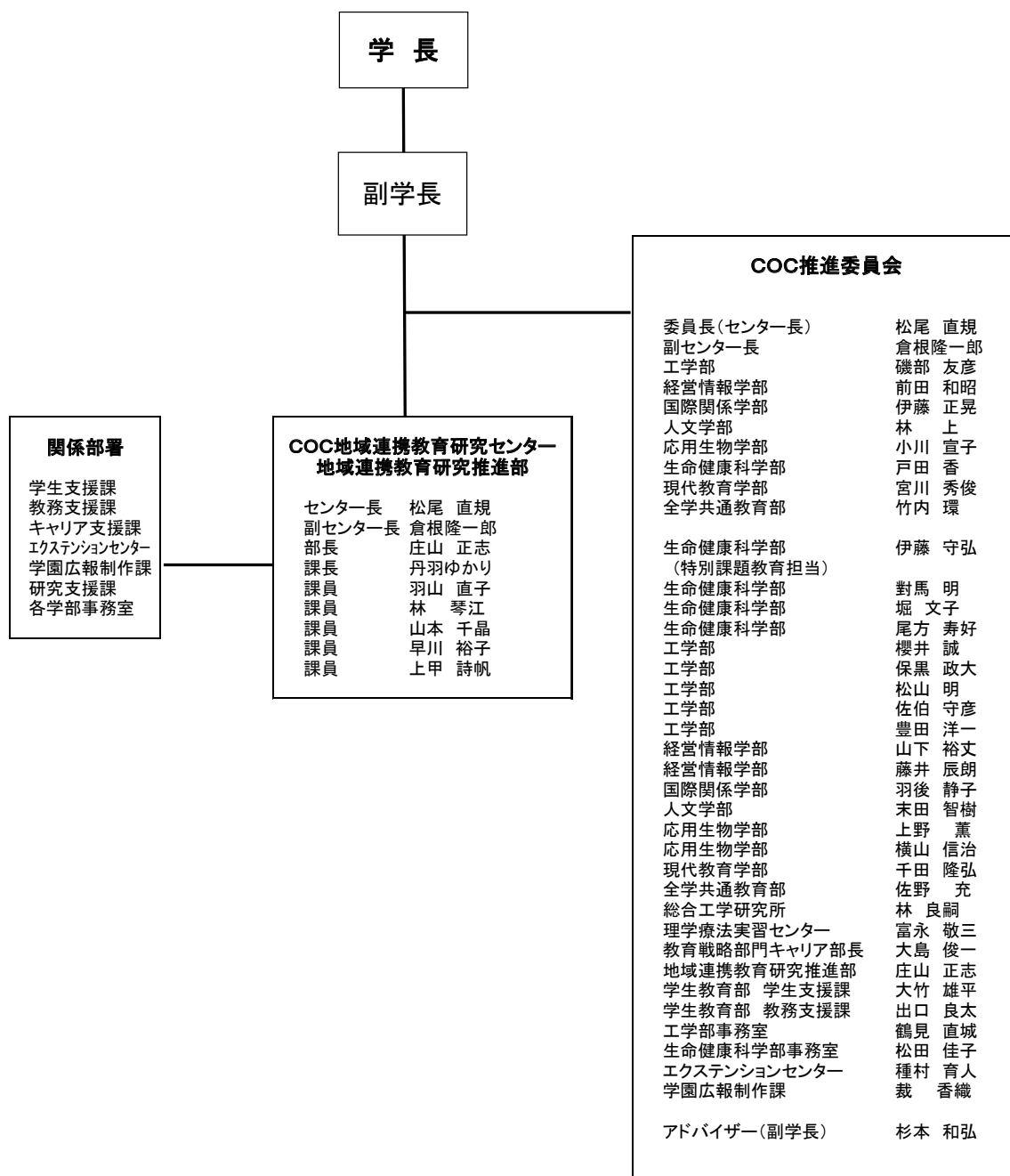
(2) 実施体制・メンバー表

本事業を全学的に推進・実施するために以下のように学長を総括責任者とし、全学体制を構築。実際の事業は、全学部からの委員を含むCOC推進委員会を設置し推進にあたっている。またCOC推進委員会内に活動毎に9のワーキンググループを設け各活動を展開し、事務部門は地域連携教育研究推進部で事業全体の事務的管理にあたっている。

(以下、中部大学COC事業体制図 および「地(知)の拠点整備事業(COC)」WGメンバー表 参照)

平成30年3月現在

中部大学 COC事業 体制図



地（知）の拠点整備事業（COC）WGメンバー （平成30年3月現在）

1. 地域志向教育研究経費WG

委員長	松尾 直規	（COC地域連携教育研究センター センター長）
副委員長	倉根隆一郎	（COC地域連携教育研究センター 副センター長）
委員	磯部 友彦	（工学部 都市建設工学科 教授）
同	伊藤 守弘	（生命健康科学部 生命医科学科 准教授）
同	櫻井 誠	（学生部長補佐／工学部 応用化学科 教授）
同	對馬 明	（生命健康科学部 理学療法学科 教授）
同	戸田 香	（生命健康科学部 理学療法学科 教授）
同	保黒 政大	（工学部 電子情報工学科 准教授）

2. 正課教育WG（活動番号①）

委員長	伊藤 守弘	（生命健康科学部 生命医科学科 准教授）
副委員長	上野 薫	（応用生物学部 環境生物科学科 准教授）
委員	倉根隆一郎	（COC地域連携教育研究センター 副センター長）
同	羽後 静子	（国際関係学部 国際学科 教授）
同	戸田 香	（生命健康科学部 理学療法学科 教授）
同	山羽 基	（工学部 建築学科 教授）
同	今枝 健一	（工学部 応用化学科 教授）
同	竹内 環	（全学共通教育部 全学総合教育科 助教）
同	吉村 和也	（応用生物学部 食品栄養科学科 准教授）
同	大日方五郎	（工学部 ロボット理工学科 教授）
同	伊藤 佳世	（経営情報学部 経営総合学科 准教授）
同	尾鼻 崇	（人文学部 コミュニケーション学科 講師）
同	堀部 貴紀	（応用生物学部 助教）
同	水野 智之	（人文学部 歴史地理学科 教授）
同	小川 宣子	（応用生物学部 食品栄養科学科 教授）
同	牧野 典子	（生命健康科学部 保健看護学科 教授）
同	西垣 景太	（生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 講師）
同	千田 隆弘	（現代教育学部 幼児教育学科 講師）
同	塚本 義則	（応用生物学部 応用生物化学科 教授）
同	出口 良太	（教務支援課長）
	（松尾 直規（センター長））	

3. 報酬型インターンシップWG（活動番号②）

委員長	櫻井 誠	(学生部長補佐／工学部 応用化学科 教授)
副委員長	佐伯 守彦	(工学部 機械工学科 准教授)
委員	栗濱 忠司	(学生部長／工学部 電子情報工学科 教授)
同	對馬 明	(生命健康科学部 理学療法学科 教授)
同	武田 明	(生命健康科学部 臨床工学科 教授)
同	宮本 順一	(キャリア部アドバイザー／全学共通教育部 教授)
同	大竹 雄平	(学生支援課長)
同	細川 貴史	(学生支援課)
オブザーバー	松尾 直規	(センター長)

4. コミュニティ情報ネットワーク事業WG（活動番号③）

委員長	保黒 政大	(工学部 電子情報工学科 准教授)
副委員長	富永 敬三	(理学療法実習センター 講師)
委員	倉根 隆一郎	(COC地域連携教育研究センター 副センター長)
同	前田 和昭	(経営情報学部 経営総合学科 教授)
同	中路 純子	(生命健康科学部 作業療法学科 教授)
同	河内 信幸	(国際関係学部 国際学科 教授)
同	宮下 浩二	(生命健康科学部 理学療法学科 教授)

5. 生活・住環境を考えるまちづくりWG（活動番号④）

委員長	磯部 友彦	(工学部 都市建設工学科 教授)
副委員長	松山 明	(工学部 建築学科 准教授)
委員	豊田 洋一	(工学部 建築学科 教授)
同	内藤 和彦	(工学部 建築学科 教授)
同	山羽 基	(工学部 建築学科 教授)
同	杉井 俊夫	(工学部 都市建設工学科 教授)
同	武田 誠	(工学部 都市建設工学科 教授)
同	伊藤 睦	(工学部 都市建設工学科 准教授)
同	岡本 肇	(中部高等学術研究所 講師)
同	行本 正雄	(工学部 機械工学科 教授)
同	甲田 道子	(応用生物学部 食品栄養科学科 准教授)
同	南 基泰	(応用生物学部 環境生物科学科 教授)
同	上野 薫	(応用生物学部 環境生物科学科 准教授)
同	尾鼻 崇	(人文学部 コミュニケーション学科 講師)
同	林 良嗣	(総合工学研究所 教授)
同	宮田 茂	(応用生物学部 食品栄養科学科 准教授)
同	千田 隆弘	(現代教育学部 幼児教育学科 講師)
同	横江 彩	(工学部 建築学科 助教)
同	吉住 隆弘	(人文学部 心理学科 准教授)

6. 高齢者・学生交流・LHS WG (活動番号⑤)

委員長	戸田 香	(生命健康科学部 理学療法学科 教授)
副委員長	堀 文子	(生命健康科学部 作業療法学科 准教授)
委員	栗濱 忠司	(学生部長／工学部 電子情報工学科 教授)
同	内藤 和彦	(工学部 建築学科 教授)
同	河内 信幸	(国際関係学部 国際学科 教授)
同	長島 万弓	(応用生物学部 食品栄養科学科 教授)
同	櫻井 誠	(学生部長補佐／工学部 応用化学科 教授)
同	城 憲秀	(生命健康科学部 保健看護学科 教授)
同	野田 明子	(臨床検査技術教育・実習センター 教授)
同	三摩 真己	(人文学部 コミュニケーション学科 教授)
同	末田 智樹	(人文学部 歴史地理学科 准教授)
同	尾方 寿好	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 准教授)
同	矢澤 浩成	(理学療法実習センター 講師)
同	谷利 美希	(生命健康科学部 作業療法学科 助教)
同	河村 守雄	(生命健康科学部 理学療法学科 教授)
同	福田 峰子	(生命健康科学部 保健看護学科 准教授)
同	松村 亜矢子	(全学共通教育部 全学総合教育科 講師)
同	大竹 雄平	(学生支援課長)
同	殿垣 博之	(学生支援課)

7. シニア大学WG (活動番号⑥)

委員長	對馬 明	(生命健康科学部 理学療法学科 教授)
副委員長	尾方 寿好	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 准教授)
委員	甲田 道子	(応用生物学部 食品栄養科学科 准教授)
同	櫻井 誠	(学生部長補佐／工学部 応用化学科 教授)
同	羽後 静子	(国際関係学部 国際学科 教授)
同	藤丸 郁代	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 准教授)
同	林 上	(人文学部 歴史地理学科 教授)
同	末田 智樹	(人文学部 歴史地理学科 准教授)
同	町田千代子	(応用生物学部 応用生物化学科 教授)
同	根岸 晴夫	(応用生物学部 食品栄養科学科 教授)
同	堀田 典生	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 准教授)
同	宮本 靖義	(理学療法実習センター 准教授)
同	宮田 茂	(応用生物学部 食品栄養科学科 准教授)
同	伊藤 正晃	(国際関係学部 国際学科 講師)
同	庄山 敦子	(学生教育部次長・キャリア支援課長)
同	種村 育人	(エクステンションセンター 次長)
同	稲ヶ部正幸	(附属三浦記念図書館事務部長)
同	大竹 雄平	(学生支援課長)
同	出口 良太	(教務支援課長)
同	松田 佳子	(生命健康科学部事務室事務長)

8. 高蔵寺NTキャンパスタウン化WG（活動番号⑦）

委員長	櫻井 誠	（学生部長補佐／工学部 応用化学科 教授）
副委員長	羽後 静子	（国際関係学部 国際学科 教授）
委員	栗濱 忠司	（学生部長／工学部 電子情報工学科 教授）
同	戸田 香	（生命健康科学部 理学療法学科 教授）
同	内藤 和彦	（工学部 建築学科 教授）
同	福井 弘道	（中部高等学術研究所 教授）
同	横手 直美	（生命健康科学部 保健看護学科 准教授）
同	大竹 雄平	（学生支援課長）
同	蓑島 智子	（附属三浦記念図書館事務部図書課長）
同	殿垣 博之	（学生支援課）
	（松尾 直規 （センター長））	

9. 広報WG

委員長	保黒 政大	（工学部 電子情報工学科 准教授）
委員	倉根隆一郎	（COC地域連携教育研究センター 副センター長）
同	伊藤 守弘	（生命健康科学部 生命医科学科 准教授）
同	櫻井 誠	（学生部長補佐／工学部 応用化学科 教授）
同	裁 香織	（学園広報制作課長）
	（松尾 直規 （センター長））	

2. 活動報告

(1) 全体の活動成果

2. 活動報告

(1) 全体の活動成果

事業活動はCOC推進委員会ならびに活動毎のワーキンググループにより行なわれてきたが、それらに共通する課題や統括する活動はセンター長を中心にCOC推進委員会等COC全体で取り組んできた。それらの成果は以下のようなものである。

1) 「地（知）の拠点整備事業」の学内と春日井市住民への広報・周知活動の実施

今年度は事業5年目となるので、活動内容をパンフレット、チラシ等によりさらに広く学生、教職員、市民に周知し、活動参加者を増加させることに努めた。

2) 28年度COC活動報告会実施（別紙①参照）

6月28日（水）学内で開催し、正課教育活動を含む7つの活動プログラムのワーキンググループのリーダーが28年度の活動報告をした。一般市民、学生、教職員40名が参加した。

3) COCホームページの拡充

各ワーキンググループの活動内容を中心に適宜更新し拡充した。

4) 中部大学フェアのブース出展

9月14日（木）開催の中部大学フェアにCOC事業の紹介ブースを出展した。

5) 地域連携市民フォーラム開催（別紙②参照）

10月28日（土）春日井市東部市民センターホールにおいて、地域連携市民フォーラムを開催した。早川春日井副市長のご挨拶を頂き、その後外部講師に藤田保健衛生大学 副学長／地域包括ケア中核センター長 金田嘉清氏による「日本における地域包括ケアの取り組みについて～地方の大学における試み～」と題した講演に加え、本学学生部長補佐／工学部応用化学科 櫻井誠教授による「中部大学における課外学生支援と社会貢献」と題した講演を行った。一般市民52名、教職員14名が来場した。

6) 平成29年度市民アンケート実施（別紙③参照）

地域連携市民フォーラムに参加した一般市民52名にCOCアンケートを依頼し、50名から回答を得た。COC事業については約26%の人が春日井市の広報誌で知り、さらに約44%の人が地域連携市民フォーラムやその他の広報チラシで知ったと回答した。市民へのチラシ配布活動の重要性が配付方法の改善と共に重要であると認識された。

7) 地域志向教育研究の公募研究の実施

20件の研究課題を採択し、研究活動を支援（総額372万円）した。詳細は、「2.（3）」

地域志向教育研究経費の成果報告」に記載した。

8) COC推進委員会の拡充

各ワーキンググループリーダーと各学部代表委員などからなるCOC推進委員会（総数37名）を隔月毎に開催し、各活動の報告と重要事項の審議にあたった。

地域志向教育研究に採択された代表者も各ワーキンググループの委員として参画することとし、その結果新たに6名の委員が任命され、COC事業に係わる教職員数は延べ129名となった。

9) 地域創成メディエーターの本格的実施と育成

平成27年度までを立ち上げ期間とし、28年度からはCOC事業における地域創成メディエーターの育成を本格的に実施した。

(1) COC事業における地域創成メディエーターの人物像

本学の建学の精神「不言実行、あてになる人間」育成プログラムの重要な柱として、COC事業では「地域創成メディエーター」の育成を行っている。社会・産業界では、都市だけでなく「地域にも目を向けられる人材」を求めている。即ち「自ら行動できる人間」「考えられる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「がんばれる人間」「信頼できる人間」「地域にも目を向けられる人間」としての学生育成を図っている。学生が地域社会に触れると「なぜ」「どうして」とこれまでの同学年の学生仲間関係とは違う驚き等を感じ、対処法や改善策を考え、自然と「考える力」が熟成される。

(2) 地域創成メディエーター大幅育成のための具体的アクション

以上の認識の下に、センター長、副センター長、推進委員、地域志向研究担当教員、事務局が一丸となって、他部門とも密接な協力の下に以下に示すような具体的なアクションプランを作り、着実に実施し、地域創成メディエーターの育成を図った。

- ① 正課外教育事業の体験を1つ以上とする。（文科省に提出した達成目標等の文章の中に「正課外教育事業を1つ以上体験」の記載あり）
- ② オリエンテーション時に学生（新入生から現3年生）に対して、「地域創成メディエーター 資格取得のすすめ」（別紙④参照）を配布し、学生への周知を図った。
- ③ 推進委員は担当する正課科目の講義にて地域創成メディエーターの取得を学生に促した。
- ④ 教務支援課に依頼し、資格取得に必須となる正課科目10単位（およびわずかに足りない8単位目安）を取得している学生を学科ごとにリストアップした。
- ⑤ 各推進委員に学科毎（場合により学部）の上記リストを渡し、各学科の3年生指導教員とタイアップしてリストの学生に地域創成メディエーターを取得するように積極的に促した。
- ⑥ 副センター長が事務局と連携し、⑤のフォローアップを行った。
- ⑦ 地域志向教育研究課題は研究的側面に加えて教育的側面の両側面を有しており、文部科学省も「地(知)の拠点整備事業」のユニークな取り組みとして捉えていることより、

地域志向教育研究募集要項に地域創成メディエーター育成について記載し、応募様式に地域創成メディエーター育成の有無を記載する欄を設け、採択に重要な指標とした。

- ⑧ 副センター長が事務局と連携し、地域志向教育研究課題に採択された教員に④の学生リストを渡し、フォローアップを行った。
- ⑨ 推進委員および地域志向担当教員から、242名もの地域創成メディエーター候補の学生を選出いただき、「動く」の課外活動のフォローアップを行った。
- ⑩ 「動く」の活動について、年度展開に応じて柔軟に追加事例を推進委員会に諮り承認した。
- ⑪ 大学側の受講人数制限(キャリア教育科目(自己開拓、社会人基礎知識))により、本人の意思とは関係なく「学ぶ(正課教育)」を履修できない希望学生には、特別課題レポートを提出させて、地域創成メディエーター格条件の「学ぶ」をクリアとする特別措置を認めた。
- ⑫ 地域創成メディエーター育成のルーブリック評価(別紙⑤参照)を作成し、育成する人材を明確にした。

(3) 地域創成メディエーター取得学生の大幅増

以上のアクションプランを全体として一丸となり着実に実施したことにより、2月7日に地域創成メディエーター候補の学生 117名の発表会を開催し、当日公の理由により発表が困難であった学生 16名は2月20日(第2回)に発表会を行った。この結果、立ち上げ期間の26年度4名及び27年度5名から、本格実施となった28年度は144名となり、平成29年度はルーブリック評価に基づき「地域創成メディエーター」の資格を132名の学生に授与できる運びとなった。今後も引き続き地域創成メディエーターの育成数を増やしていく予定である。

10) 地域創成メディエーター学生発表会「+エクспレッション」開催(別紙⑥参照)

2月7日(水)・20日(火)の2回に分けて、それぞれ本学不言実行館アクティブホールとスチューデント・コモンズにおいて、中部大学地域創成メディエーター学生発表会「+エクспレッション」を開催した。

地域創成メディエーター資格認定の最終課題「+エクспレッション」は講義での規定単位取得に加え、キャンパスを地域に広げた課題体験に参加・実践した学生たちが、まちの再生や地域活性化などの特有の課題に地域と協働して現場で解決策を考えて取り組んだ過程と成果を発表。口頭発表6名、ポスター発表127名の学生が地域創成メディエーター候補生となった。2月7日の参加者は、一般市民36名、教職員53名、学生11人が来場した。

参加者にアンケートを依頼し、30名から回答を得た。60歳以上の一般参加者約57%、29歳以下の学生等約10%と幅広い層の参加があった。全体の感想について約87%が「とても良かった・良かった」と回答した。(別紙⑦参照)

2 活動報告

1 1) 学部長会メンバー、春日井市からなる内部評価委員会の開催

1月23日(火)に学部長・研究科長会構成員からなる内部評価委員会が開催され、平成29年度事業活動の内部評価が行われた。COC事業の最終年度として、「拠点整備事業として中部大学のひとつの特徴を作り上げ、確実に拠点を作り上げてきた本事業の終わりを見届けた」と総括された。

1 2) 大学・研究機関、行政、商工会議所の有識者からなる外部評価委員会の開催

2月27日(火)に外部評価委員による外部評価委員会が開催され、平成29年度事業活動の外部評価が行われた。

1 3) NPO連携協議会の開催

NPO側委員(2名)とCOC副センター長及び各活動リーダー委員(5名)からなるNPO連携協議会を6回開催した。COC推進委員会の報告を中部大学側委員が行い、それに引き続きNPO側委員から地域の活動や市民、NPO諸団体の活動報告が行われ、情報の共有化を図った。

1 4) 平成29年度COC最終活動報告会(別紙⑧参照)

3月15日(木)に5年間にわたる本学のCOC活動と成果について最終活動報告会が開催され、6名の教員による7つのワーキンググループ活動についてと、4名の教員による地域志向教育研究活動での地域連携による人材育成について発表が行われた。第2部では、16名の教員が地域志向教育研究活動のポスター発表を行い、交流会が開催された。

1 5) 採択他大学との交流と活動

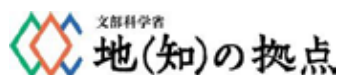
(1) COC事業採択校との情報交換会(岐阜大学はじめ中部圏12大学)

9月29日(金)岐阜大学で中部圏12大学のCOC採択校が参集して情報交換会が開催された。本学は正課・キャンパスタウン化・CAACについて報告を行った。

(2) 中部地区COC事業採択校「学生交流会」に参加

3月1日(木)岐阜駅前「じゅうろくプラザ大会議室」にて、岐阜大学を幹事として中部地区の12大学が集結し、各大学の代表学生が地域での活動やその成果を発表した。本学からは、工学部の宇野直暉が「～出会い、繋がり、そして未来へ～」と題した発表を行い、経営情報学部の井上恭助がポスターセッションに参加した。

別紙① 活動報告会 チラシ



文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(COC事業) (平成25年度採択)

春日井市における世代間交流による 地域活性化・学生共育事業

まちづくりを通して、共に学び(共学)・共に育つ(共育)!!

◆◆平成28年度 COC活動報告会◆◆

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」(平成25年度採択)の本学の活動と成果について報告会を開催しますので、是非ともご参加ください。

日時：平成29年 6月 28日 (水) 15:30~17:30

場所：中部大学 リサーチセンター 2階大会議室

プログラム

[司会: 倉根 隆一郎 教授

(COC地域連携教育研究センター副センター長)]

◇15:30~15:35 **あいさつ** 松尾 直規 教授 (COC地域連携教育研究センター長)

◇15:35~16:35 **活動報告(①~④)**

15:35~15:50

①正課教育

伊藤 守弘 准教授
(生命健康科学部)

15:50~16:05

②報酬型インターンシップ

櫻井 誠 教授
(工学部)

16:05~16:20

③コミュニティ情報ネットワーク事業

保黒 政大 准教授
(工学部)

16:20~16:35

④生活・住環境を考えるまちづくり

磯部 友彦 教授
(工学部)

(休憩 10分)

◇16:45~17:30 **活動報告(⑤~⑦)**

16:45~17:00

⑤高齢者・学生交流・LHS

戸田 香 教授
(生命健康科学部)

17:00~17:15

⑥シニア大学

對馬 明 教授
(生命健康科学部)

17:15~17:30

⑦高蔵寺NTキャンパスタウン化

櫻井 誠 教授
(工学部)

(質疑応答)

■お問い合わせ先

中部大学 COC地域連携教育研究センター 地域連携教育研究推進部

Tel:0568-51-1763 Fax:0568-51-4659 E-mail:coc@office.chubu.ac.jp

別紙② 地域連携市民フォーラム チラシ

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業



まちづくりを通して共に学び **共学** 共に育つ **共育**



中部大学 地域連携



市民フォーラム 2017

参加無料

主催 **中部大学**
後援 **春日井市**

講演内容

講演①

日本における地域包括ケアの取り組みについて ～地方の大学における試み～

藤田保健衛生大学 副学長／地域包括ケア中核センター長

金田 嘉清 氏

講演②

中部大学における課外学生支援と社会貢献

中部大学 学生部長補佐／工学部応用化学学科 教授

櫻井 誠

開催日時

平成29年

10月28日(土)

14:00～16:00(13:30 開場・受付)

開催場所

**春日井市
東部市民センター ホール**

春日井市中央台2-2-1 TEL.0568-92-8511

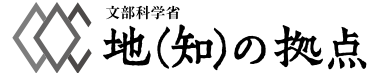
【交通のご案内】

- JR中央本線「高蔵寺」駅下車(名古屋駅より快速で約26分)
- 名鉄バス、高蔵寺駅北口のりばより
 - 「高森台」(約8分)下車、徒歩約4分
 - ▶4番のりば…かみや団地口、福祉の里、高森台北
 - ▶4番のりば…桃花台センター(春日台経由)
 - ▶5番のりば…石尾台南



中部大学

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業



春日井市と連携し、大学の「人材」「技術」「知」を活用して、地域の活性化に取り組んでいます。

平成25年度、中部大学の「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」が、文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択され、全学的に推進しています。この事業は、自治体、地域NPO、住民が大学のキャンパスの壁を越えて融合し、持続可能な新しい未来社会とその教育を春日井の地に実現することを目的としています。そのために、この事業の内容・趣旨を地域の皆様にお知らせし、事業への協力と積極的、自主的関与を依頼する機会として市民フォーラムを開催しています。

※大学COC(Center of Community)事業は、文部科学省が推進する「地(知)の拠点整備事業」で、国が地域の課題解決に取り組む大学を支援するものです。

第5回 中部大学 地域連携市民フォーラム／開催プログラム

13:30～ 開場・受付開始

14:00～14:20 開会挨拶
来賓挨拶

中部大学 COC地域連携教育研究センター長 松尾 直規
春日井市長 伊藤 太氏

14:20～15:10 講演 ①

日本における地域包括ケアの取り組みについて
～地方の大学における試み～



藤田保健衛生大学
副学長／地域包括ケア中核センター長
金田 嘉清氏

【講師プロフィール】

国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院理学療法科卒業
愛知県立大学外国語学部英米学科学卒業
医学博士・理学療法士
藤田保健衛生大学 副学長
藤田保健衛生大学大学院保健学研究科 研究科長
藤田保健衛生大学医療科学部学部長 教授
藤田保健衛生大学地域包括ケア中核センター センター長
学校法人藤田学園理事
全国リハビリテーション学校協会副会長

現在、国は2025年(平成37年)を目処に、高齢者の尊厳の保持と自立生活支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制(地域包括ケアシステム)の構築を推進しています。地域包括ケアシステムは街づくりです。街づくりとはそれを担う人材育成です。今回は、地域における街づくり・人材育成の取り組みを紹介します。

15:10～16:00 講演 ②

中部大学における課外学生支援と社会貢献



中部大学 学生部長補佐／工学部応用化学科 教授
櫻井 誠

【講師プロフィール】

平成 7年 3月 中部大学大学院博士後期課程
工業化学専攻修了(博士工学)
平成 7年 4月 中部大学助手
平成 9年 8月 プリストル大学博士研究員
平成10年 4月 中部大学講師
平成17年 4月 中部大学助教授
平成24年 4月 学生部長補佐兼務
平成26年 4月 中部大学教授
平成29年10月 現在に至る

中部大学では平成24年度に学生支援戦略室が設けられ、その中で課外教育活動と学生への経済支援の両立が答申されました。学生への経済的負担の軽減と新しい時代の人材を輩出することが狙いです。これらの考え方下、平成25年から「報酬型インターンシップ」および「地域連携住居」に関する取り組みが開始されました。これら「第三の教育の場」の構築の意義と効果について詳細にお話しします。

◆主催／中部大学◆後援／春日井市◆

キャンパスを春日井のまちに広げ、講義で得た専門知識を使って、学生が地域の人と人をつ結びつけるメディエーター(媒介者)となり、地域の様々な課題に主体性をもって取り組んでいきます。この中部大学式 人材育成体験プログラムを通じて、建学の精神「不言実行・あてになる人間」を身につけた学生には、本学独自の資格「地域創成メディエーター」を認定。2015年度に「地域共生実践～春日井市問題発見のすすめ～」を講義として新設しました。

さらに、学生の成長を飛躍させる取り組みとして…

中部大学生がさまざまな形で関わる「地域との関わり体験プログラム」を導入しています。

- 報酬型インターンシップ**
“報酬型”「給与を得る」+“インターンシップ”「就業&育成」
＝人材育成を目的とした就業体験
- 高齢者・学生交流 Learning Homestay**
高齢者宅に学生がホームステイすることで、
ニュータウンの高齢化問題を解決する新しい試み
- シニア大学** 中部大学アクティブアゲインカレッジ
(CAAC: Chubu University Active Again College)
高齢者のセカンドライフづくりに貢献
- キャンパスタウン化**
大学とニュータウンが一体化し、広がる学びの場
- 生活・住環境を考えるまちづくり**
地域の人々が安心して快適な生活を送るための研究を促進
- コミュニティ情報ネットワーク**
地域の人々の役に立つ情報ネットワークの構築を目指す

※「地域との関わり体験プログラム」など、詳しくはホームページ(下記アドレス)をご覧ください。

お問合せ

中部大学 地域連携教育研究推進部

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地 TEL.0568-51-1763(直通) FAX.0568-51-4659

E-mail / coc@office.chubu.ac.jp HP / http://www3.chubu.ac.jp/coc/

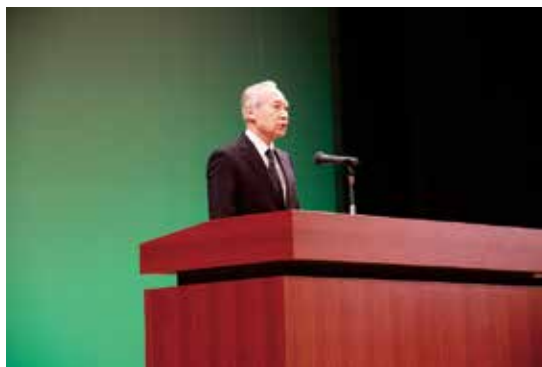
開催当日のお問合せは…090-1289-9755 まで。(この電話は開催当日以外は繋がりません。)



【第5回 中部大学地域連携市民フォーラム】の様子



開会挨拶：松尾 直規
(中部大学 COC地域連携教育研究センター長)



来賓挨拶：早川 利久 様 (春日井市副市長)



講演①：金田 嘉清 様
(藤田保健衛生大学 副学長/地域包括ケア中核センター長)



司会進行：倉根 隆一郎
(中部大学 COC地域連携教育研究センター
副センター長)



講演②：櫻井 誠
(中部大学 学生部長補佐/工学部応用化学科 教授)



会場の様子

別紙③

第5回 地域連携市民フォーラム アンケート集計結果

開催日 : 平成29年10月28日(土) 14:00~16:00
 場所 : 春日井市 東部市民センター ホール
 講演内容 : 藤田保健衛生大学 副学長/地域包括ケア中核センター長 金田嘉清氏
 「日本における地域包括ケアの取り組みについて~地方の大学における試み~」
 中部大学 学生部長補佐/工学部応用化学科 教授 櫻井誠
 「中部大学における課外学生支援と社会貢献」
 参加者数 : 一般45名、教職員14名 シニア大受講生7名 計66名
 回答数 : 50名(回答率75.7%)

【1】ご参加のあなたについてお聞きします。

①あなたの年齢は

1. 39歳以下(5名) 2. 40代(2名) 3. 50代(1名) 4. 60代(16名) 5. 70代(20名)
 6. 80歳以上(6名)

②あなたの性別は

1. 男性(37名) 2. 女性(13名)

③あなたのお住まいは

1. 高蔵寺ニュータウン(30名) 2. 高蔵寺町, 坂下町, 出川町, 庄名町, 白山町, 不二が丘,
 松本町, 大泉寺町, 上野町, 神屋町, 廻間町(1名) 3. 上記1と2以外の春日井市(14名)
 4. 名古屋市(0名) 5. 春日井市と名古屋市以外の愛知県内(4名) 6. 愛知県外(1名)

④あなたの同居者の構成についてお伺いします。

1. 一人暮らし(11名) 2. 夫婦二人(22名) 3. 自分と子供達(2名) 4. 自分達夫婦と子供達
 (11名) 5. 自分と子供達以外の親族(1名) 6. 夫婦と子供達以外の親族(0名)
 7. その他の同居形態(3名)

⑤あなたは

1. 一般市民(40名) 2. シニア大学(CAAC)受講生(7名) 3. 中部大学教職員(2名)
 4. 中部大学生(0名)

【2】中部大学「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」についてお伺いします。

⑥この事業を何で最初にお知りになりましたか。

1. 新聞やテレビ(2名) 2. 春日井市の広報誌(13名)
 3. 地域ミニコミ誌やNPO広報誌(1名) 4. この市民フォーラムのチラシ(17名)
 5. 他のCOC講演会の宣伝やチラシ(5名) 6. COCの活動や講演会に実際に参加して(7名)
 7. 中部大学のホームページ(8名) 8. クチコミや近所の方のお話(10名) 無回答(1名)

⑦この事業を知って地域と地域住民にとって何が最も有益あるいは興味深いと感じましたか。

1. 学生正課教育の改革(3名) 2. 報酬型インターンシップ(2名)
 3. シニア大学(CAAC)(5名) 4. 高齢者・学生交流・ホームステイ(LHS)(8名)
 5. キャンパスタウン化(15名) 6. コミュニティ情報ネットワーク(11名)

2 活動報告

7. 生活と住環境を考えるまちづくり (17名)
8. 地域高齢者の生活・健康・介護の支援 (23名) 9. 地域の次世代育成支援 (13名)
無回答 (3名)

⑧この事業について地域活性化や高齢者支援に今後必要と思われる事業があればご教示下さい。

- ・若い人たちが町内に住んでくれる
- ・藤田保健衛生大学の先生方のお話は、ニュータウンの高齢者が心配し、望んでいる事です。医科大学が無い春日井市には無理とは思いますが、市民が協力して病院（市民病院・東海（記念病院）・徳洲会）の協力をいただいて、地域の人々が安心して、豊かな老後を過ごせる見本の都市になれたらと思います。誕生から子育てを皆で優しく人間らしい生活を見守ってあげられたらと思います。
- ・難しく少し分かりづらかったけど、今回の講演のようにお年寄りだけでなくハンディ持ち（それぞれの度合いに合った施設や働き先、居場所等）の支援ももっと増えたらいいなと思った。後、訪問看護が出来る所ももっと増えたらいいなと思った。
- ・各自治会単位ごとに医療・介護の相談窓口となるサポートセンターのようなものを設置し、人材を定期的に派遣してもらえるとありがたい。
- ・車の自動走行を応用した無人バスなど、交通面での取り組みが必要となる。老人のためだけでなく、移り住んでくる若い世代のためにも実証実験を兼ねた安価で皆が利用できる取組が必要だと思います。
- ・地域と大学間の交通網の構築。大学が、住民にもっと開放された場となり、シニアと学生の交流が盛んに行われる取組み。
- ・藤田保健衛生大学の話①情報量が多すぎ、つづき先生の説明が早口すぎて聞き取り不十分で頭に残らない。②マル秘情報があるかもしれないが、発表内容のレジュメ資料を出席者に配布すべき。
- ・若く元気な学生さんの課外授業の一つとして、今後の活躍に期待しています。
- ・高齢者の寝たきり防止のため理学療法士の先生とそのゼミの学生さんの力を借りてロコモ体操の世話をさせていただいておりますが、今のところ2ヶ所だけの活動となっております。この運動をニュータウン全域に広げていただきたいと希望します。
- ・藤田保健衛生大学の事例の如く、タウン内に『保健室』を設け、住民アドバイスをすることが良いと思う。藤田事例のうち、中部大学がどこまで出来るか興味深い。
- ・自立した対応のため、健康、救急に対する支援が必要。
- ・高齢者向け交通対策について支援をしていただきたい。
- ・学生・教員の専門性を活かした「まち中の拠点づくり」による地域のつながりづくりの支援プログラム
- ・豊明市の例のような「医療・介護保険センター」を市内に何箇所か設置してほしい。→在宅介護のサポート役としての機能。
- ・高齢者の立場からの意見ですが介護・医療の現実的な組織づくりも大切な事業だが、高齢者が健康寿命を延ばし、元気な街づくりの為に何の事業が必要か、また大学もどう機能してゆけるかのフォーラムが必要でないか
- ・金銭が発生するレベルの事業、防犯、空き家をお店に
- ・キャンパス内の地元地域との共同化の促進（具体案：周辺散歩、駐輪街路の設置活用、周辺のお店の誘致と活用による集中）
- ・地域関係住民の積極的な参加が何よりも重要だと思います。本日の講演を参考にして地域で取り組みたいと思っていますので、希望に応じご支援もお願いしたい。
- ・お話にあった相談室をニュータウンの街中に何箇所か作ってほしいと思います。
- ・地域のニーズをすくい上げるアンケートは、行政や大学が何度実施してもやりすぎることはない。

- ・映画館（館でなくても）など映画を見られるように。娯楽施設がないので楽しむ場所が無い。子供にとっての公園は鉄棒と砂場くらいでアスレチックとか岩登りとか、魅力的な遊び場を。子供が集い、遊んだり勉強したりそれを大人が見守り支援したりするオープンな施設があればと思います。

⑨この事業についてご意見があれば以下にご自由にご記入をお願いします。

- ・近くに住んで体操などをしてくれる
- ・一軒家で一人暮らしをしている方は、よほどのことがないと出かけられないと思います。車の運転をやめると、お友達とお茶に行きたくても行けません。せめてお電話をと心がけていますが、若い学生さんに住んでいただけたらと思いますが、年を取ると決断がつかないかも、寂しいよりもやってみてはとロボット、インターネットも使って便利な生活をしたい。一番やってほしいことは老人を戸外に連れ出す事。日光を浴び、15分～20分歩く、公園に子供から老人まで使える体操器具を設置して、僅かなときでも気軽に外に出て筋肉が落ちないように自分で努力できるように、市と大学と市民が協力してそのようなことが出来るところを作ってほしい。身体を動かさないと駄目なことは自分で感じています。
- ・高蔵寺ニュータウンは本当に交通の便が悪いので車が運転できない人にとってもっと住みやすい街づくりになるように支援（サポート）してもらえるといろいろな人がもっと住みやすく助かるのではないかと思った。
- ・中部大学生のような若い人たちが団地に定住できるような環境（居住スペース、働き場所）を整備して老人たちをサポートしてもらえるとありがたい。
- ・両校の取組は参加した市民が求めている事でもあるが、発展途中の事業になると思うので、様々な意見が聞けて参加した甲斐があった。
- ・5年程度過ぎると思うが、ニュータウンに住む学生も増えてきた。これからどのように展開していくのが大切だと思います。
- ・平成30年3月で文科省COC事業が終了するが、今後とも中部大学独自の継続事業を実施して行ってほしい。
- ・今日のフォーラムで強く感じた事は、市民・大学・市の連携が大切で、特に市民（我々自らの参加活動）が前向きに活動していくことが大切だと思う
- ・医療と介護の人材教育が基本と伺いましたが、藤田保健衛生大学と中部大学の連携を期待したい。あるいは市民病院、徳洲会病院との取組もよいのでは？
- ・高蔵寺地区だけでなく全市に広がればいいと思います。
- ・今後も地域支援の中核となりがんばってください。
- ・是非行政職員も企画段階から参加できるようなしなかけを期待します。
- ・豊明市の医療・介護支援包括システムは素晴らしく思った。春日井市も同様なことが出来ないか？中核となる医療機関が必要です。春日井市民病院や徳洲会病院を参画していただくことを期待。
- ・カレッジキャンパスの広域な開放化。具体策、春日井市当局、県、文科省と協力のもと都市計画の一部に入れ交流、装置、遊び、学びの施設を誘致。
- ・私たち住民がそうしたステージを設けていくことも重要だと思いました。
- ・高齢化率が高い地域がこの地区に集中しているのは都市集中の政治問題だと思うのでまちづくりを根本からやり直さないといけないのではないか。
- ・ニュータウン関連については、ニュータウン開発に密に連携をとってやられたら良いと思う。
- ・地元ニュータウン側のまとまりがないことはハッキリしている。住民の意識の問題というより、行政が「地元のまとまり連携を強くする事」を主要な業務であると認識していないことが最大の問題です。
- ・入場者が少ないのが残念。もっと多くの人参加が得られるような宣伝が必要。（広報、回覧を利用）

2 活動報告

【3】本日の市民フォーラムについてお伺いします。

⑩本日の会場までの移動手段は

1. 自家用車あるいは自家用車での送り迎え (35名)
2. 公共バス (1名)
3. タクシー (0名)
4. 自転車あるいは徒歩 (14名) 無回答 (0名)

⑪本日の講演1はいかがでしたか。「日本における地域包括ケアの取組について」の講演について

1. 大変興味深く関心が持てた (34名)
 2. まあまあ興味や関心が持てた (9名)
 3. あまり興味や関心が持てなかった (1名)
 4. 興味も関心も持てなかった (0名)
- 無回答 (6名)

⑫本日の講演2はいかがでしたか。「中部大学における課外学生支援と社会貢献」の講演について

1. 大変興味深く関心が持てた (24名)
 2. まあまあ興味や関心が持てた (13名)
 3. あまり興味や関心が持てなかった (1名)
 4. 興味も関心も持てなかった (1名)
- 無回答 (11名)

⑬この市民フォーラムの会場や運営はいかがでしたか。

会場 1. 良い(36名) 2. やや良い(2名) 3. 普通(7名) 4. やや悪い(0名) 5. 悪い(1名) 無回答(4名)

運営 1. 良い(28名) 2. やや良い(4名) 3. 普通(9名) 4. やや悪い(0名) 5. 悪い(0名) 無回答(9名)

会場が寒かったとの声多数

⑭今後の講演会や討論会として希望されるテーマや講師の希望がありましたら以下にご記入下さい。

- ・高蔵寺ニュータウンの地域活性化と利便性についての具体的な取組み。
- ・地域活性化プロジェクト実践例の紹介
- ・老人会の構成率が非常に低い。(春日井市の場合65歳以上での加入率は7%前後) 高齢者が支えられる社会から支える側に回るためにも老人が何らかのコミュニティに参加できるとよいと考えます。そのためにも高齢者に対してそれ相応に講演が求められる。
- ・高齢者とニュータウンのこれからの関わりや将来像を示すテーマ。「高蔵寺ニュータウンのまちづくり」のプロセス紹介等。
- ・高齢者の健康維持、若者の見方など。
- ・もっと地域に踏み込んだ講演がほしいです。
- ・地域包括ケアシステムを通じた「地域コミュニティの活性化」の視点に気づく事ができるようなシンポジウムがあるとよいと思います。
- ・一般論として、今回のテーマでよいと思うが、もう一步の踏み込み案がほしい。論の発展に役立つためには夢の具体案がほしく、示してよいと思います。
- ・中部大学は、私たち市民に応えるべく種種企画してみえますが、今後希望事項は直接お話していきたいと思っています。
- ・経済問題、環境
- ・市職員参加へのPRを。
- ・集合住宅にあって「人のつながりが希薄であること」これに焦点をあてた大学内の学際を越えた共同の取組が望まれる。

以上

(2017年10月28日実施)

地域創成メディエーター 資格取得のすすめ

社会は「地域にも目を向けられる人材」を求めています

中部大学は「あてになる人間」育成プログラムの一つとして文部科学省の地(知)の拠点整備事業(COC事業)に採択されています。「地域創成メディエーター」資格^{*}は社会・産業界の中で地域にも目を向けて「行動できる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「頑張れる人間」「信頼できる人間」として、中部大学が自信を持って認定し推薦できる学生の証です。

^{*}中部大学が学長名で認定

地域創成メディエーター資格取得の条件

学 (正課教育)	<p>Aの科目から1単位以上、BとCの科目から各2単位以上、合計10単位以上取得する</p> <p>A: キャリア教育科目 … 「自己開拓」「社会人基礎知識」</p> <p>B: 特別課題教育科目 … 2015年度以降の入学生 必修: 「地域共生実践」 選択: 「持続学のすすめ」「地域の防災と安全」「地球を観る」「人類と資源」「グローバル環境論」</p> <p>2014年度以前の入学生(生命健康科学部除く[*]) 必修: 「持続学のすすめ」 選択: 「地域の防災と安全」「地球を観る」「人類と資源」「グローバル環境論」</p> <p>C: 地域関連科目 … メディエーター資格取得の動機や地域の理解に役立つ科目を選択 (例) aさん: 「健康運動コーチング論」「救急医学」「スポーツ医学」 bさん: 「地球環境学」「環境動物学」「生態学概論」 cさん: 「地域とコミュニケーション」「生活環境と人間」「社会調査法」 詳しくは 地域連携教育研究推進部までお問い合わせください</p> <p>[*]2014年度以前入学の生命健康科学部生 「医科学入門」「生涯発達看護論」「生と死の文化人類学」「社会福祉学」「心の科学」「生活環境と人間」から4単位以上取得でA+Bに該当する</p>
動く (正課外)	<p>COC事業の6つの地域関連プロジェクト活動に1つ以上参加する</p> <p>※活動の例は裏面を参照してください</p>

資格取得の条件が変わりました

「動く」に必要なプロジェクトへの参加数が1つ以上になりました。

問い合わせ先

中部大学 地域連携教育研究推進部 16号館3階

Phone: 0568-51-1763 E-Mail: coc@office.chubu.ac.jp

http://www3.chubu.ac.jp/coc/



学生が参加するプロジェクト活動の例

高齢者との交流

- ・シニア大学受講生のサークル活動支援
- ・シニア大学の講義を補助
健康増進実習 など
- ・世代間交流会への参加
座談会、防災活動、栄養教室、体力測定会 など
- ・LHS(Learning Home Stay) にて、ホストファミリーとの共同生活を体験
- ・LHV(Learning Home Visit) にて、ホストファミリー宅を訪問
- ・LHS, LHV 報告会での議論に参加

イベントの運営を通して地域貢献

- ・高校の体育系部活動でのケガ予防講習会 運営補助
- ・子育て相談会の運営補助
- ・街のイベント情報広報誌「まちこみゆニュース」の編集・発行
- ・世代間交流会の運営補助
座談会、防災活動、栄養教室、体力測定会 など

春日井のまちを知る・まちづくりを考える

- ・報酬型インターンシップ
- ・高蔵寺ニュータウン地域連携住居への入居と地域交流イベントへの参加
- ・春日井の NPO 活動情報発信 Web サイトの作成
- ・街のイベント情報広報誌「まちこみゆニュース」の編集・発行
- ・世代間交流会への参加
座談会、防災活動 など
- ・障害者スポーツのすすめ
- ・森の健康診断

技術を身につけながら地域貢献

- ・報酬型インターンシップ
- ・春日井の NPO 活動情報発信 Web サイトの作成
- ・春日井の医療情報共有システムの開発・構築
- ・高校の体育系部活動でのケガ予防講習会 運営補助
- ・子育て相談会の運営補助
- ・街のイベント情報広報誌「まちこみゆニュース」の編集・発行
- ・シニア大学受講生のサークル活動支援
- ・シニア大学の講義やサークル活動を補助
健康増進実習、パソコンサークル活動 など
- ・地域の健康教室の活動支援

その他、様々な活動が計画されています。詳しくは地域連携教育研究推進部までお問い合わせください。

メディエーター資格 取得者の声

- ・発表の練習を繰り返すことで、人と話すことに自信が持てた。
- ・発表資料を作成するにあたって、自分を振り返ることができた。
- ・発表のために、論理的に考える力が鍛えられた。
- ・「学ぶ」ことによって、取り組んだ活動をより深く理解することができた。
- ・地域の方々と接することで、コミュニケーション能力を身につけられた。
- ・就職活動では、履歴書にメディエーターの資格を取得したことを記載したため面接でメディエーターについて質問された。発表資料を再び説明することで、自分のペースで面接を進めることができた。
- ・何となく就職を考えていたが、メディエーター取得後は自分の地元に戻り、地域の人々の役にたつ就職先を考えるようになり自分の将来が明確化できた。

別紙⑤ ルーブリック評価 (2017年作成)

< A-2表 >

【ルーブリックは、学生に見せて、この項目で評価されることを伝えて頂きますようお願いいたします。】

中野大学地域創成デザインエディター資格申請 ルーブリック(A-2) 【動くの活動責任者(推薦者)が記入して下さい。申請書<A-1表>に添付の上、提出下さい。】

被推薦者氏名		学籍番号		所属:		氏名:			
参加プロジェクト		学級番号		推薦者(教職員)		氏名:			
到達目標	大項目	配点	A(5点)	B(4点)	C(3点)	D(2点)	E(4点) C(3点)	F(0点) E(0点)	点數
1) 地域で生じている問題について理解し、解決のための地域の取り組みに主体的かつ継続的に仲間を協力し参加することができる。またその活動に意義を見出すことができる。	合計10単位の整合性がとれている	3	十分整合性がとれている	整合性がとれている	整合性が不十分	整合性が不十分	整合性が不十分	整合性がない	
2) 取り組みに係る様々な主体とコミュニケーションを円滑にすることができ、自分の担当内容について責任をもって取り組むことができる。そのため、POCAサイクル、報告・連絡・相談を滞りなく実施することができる。	自由選択の「地域連携科目」が活動(動く)と関連している	3	十分関連している	関連している	関連が不十分	関連が不十分	関連が不十分	関連がない	
3) 地域の取り組みに係ること、自己理解を深め、キャリア設計を再構築することができる。	自由選択の「地域連携科目」の本来の意義や目的が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解が不十分	理解が不十分	理解が不十分	理解がない	
4) 自分の専門性と特性を活かし、新しい強みから意図や提案をすることができ、	自分にとっての「関連科目」の意義が整理できる	3	十分整理されている	整理されている	整理が不十分	整理が不十分	整理が不十分	整理されない	
5) 自ら、自分の専門分野に関する情報収集をよりよく進めることができる。	自己と社会の関わりを学び、実践できる	3	十分実践できる	実践できる	実践できない	実践できない	実践できない	実践できない	
6) プロジェクトにおける自分の役割が説明できる	組織を活性化させる力が身に付いている	3	十分説明できる	説明できる	説明できない	説明できない	説明できない	説明できない	
7) 報告・連絡・相談(ホウレンソウ)を理解し、実行できる	組織可能な社会のために必要なものごとを考える力が身に付いている	3	十分身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	
8) 自ら、POCAサイクルを理解し、実行できる	"持続可能な社会"のために必要なものごとを考える力が身に付いている	3	十分身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	
9) 自ら、POCAサイクルを理解し、実行できる	考え方や価値観を異にする人々との対話に要するコミュニケーション能力が身に付いている	3	十分身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	身に付いている	
10) 自ら、POCAサイクルを理解し、実行できる	合憲形成のために重要な行動が理解できる	3	十分理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	理解している	
1) 1) 地域で生じている問題について理解し、解決のための地域の取り組みに主体的かつ継続的に仲間を協力し参加することができる。またその活動に意義を見出すことができる。	1) 参加したプロジェクトの目的や意義が理解できる	3	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	若干の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	指導が不十分	指導が不十分	指導が不十分	指導が不十分	
2) 2) 取り組みに係る様々な主体とコミュニケーションを円滑にすることができ、自分の担当内容について責任をもって取り組むことができる。そのため、POCAサイクル、報告・連絡・相談を滞りなく実施することができる。	2) 十分な量の活動ができる	3	行動に関して、運賃や間接費がほとんどなく、確実に実施することができる	行動に関して、たまたま運賃や間接費がかかるが、自らそれに気づき修正し、真の向上のために努力を重ねることができる	行動に関して、運賃や間接費がほとんどなく、確実に実施することができる	行動に関して、運賃や間接費がほとんどなく、確実に実施することができる	行動に関して、運賃や間接費がほとんどなく、確実に実施することができる	行動に関して、運賃や間接費がほとんどなく、確実に実施することができる	
3) 3) 地域の取り組みに係ること、自己理解を深め、キャリア設計を再構築することができる。	3) 十分な量の活動ができる	3	申請者に期待される活動量の6割程度は参加することができる	申請者に期待される活動量の6割程度は参加することができる	申請者に期待される活動量の6割程度は参加することができる	申請者に期待される活動量の6割程度は参加することができる	申請者に期待される活動量の6割程度は参加することができる	申請者に期待される活動量の6割程度は参加することができる	
4) 4) 自分の専門性と特性を活かし、新しい強みから意図や提案をすることができ、	4) 責任感をもって活動に参加できる	3	自分の仕事はほとんど休日も休まず、遅刻や無断欠席も殆どない	自分の仕事はほとんど休日も休まず、遅刻や無断欠席も殆どない	自分の仕事はほとんど休日も休まず、遅刻や無断欠席も殆どない	自分の仕事はほとんど休日も休まず、遅刻や無断欠席も殆どない	自分の仕事はほとんど休日も休まず、遅刻や無断欠席も殆どない	自分の仕事はほとんど休日も休まず、遅刻や無断欠席も殆どない	
5) 5) 自ら、自分の専門分野に関する情報収集をよりよく進めることができる。	5) 主体的に活動に参加できる	5	指導がなくても、極めて積極的に活動に参加することができる	指導がなくても、積極的に活動に参加することができる	指導がなくても、積極的に活動に参加することができる	指導がなくても、積極的に活動に参加することができる	指導がなくても、積極的に活動に参加することができる	指導がなくても、積極的に活動に参加することができる	
6) 6) プロジェクトにおける自分の役割が説明できる	6) 解決すべき課題が理解できる	5	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	
7) 7) 報告・連絡・相談(ホウレンソウ)を理解し、実行できる	7) 課題解決のためにクリエイティブなアイデアを提案できる	3	指導がなくても、適切な情報収集およびそれに基づく客観的な判断を十分に実行することができる	指導があれば、適切な情報収集およびそれに基づく客観的な判断を十分に実行することができる	指導があれば、適切な情報収集およびそれに基づく客観的な判断を十分に実行することができる	指導があれば、適切な情報収集およびそれに基づく客観的な判断を十分に実行することができる	指導があれば、適切な情報収集およびそれに基づく客観的な判断を十分に実行することができる	指導があれば、適切な情報収集およびそれに基づく客観的な判断を十分に実行することができる	
8) 8) 自ら、POCAサイクルを理解し、実行できる	8) プロジェクトにおける自分の役割が説明できる	3	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	
9) 9) 自ら、自分の専門分野に関する情報収集をよりよく進めることができる。	9) チーム活動における自分の特性を理解し、チームに貢献できる	3	自分で自分の特性を把握し、他者にも伝えることができ、活動にもそれを活かす努力をしている	指導があれば、自分の特性を把握し、他者にも伝えることができる	指導があれば、自分の特性を把握し、他者にも伝えることができる	指導があれば、自分の特性を把握し、他者にも伝えることができる	指導があれば、自分の特性を把握し、他者にも伝えることができる	指導があれば、自分の特性を把握し、他者にも伝えることができる	
10) 10) 自ら、自分の専門性と特性を活かし、新しい強みから意図や提案をすることができ、	10) 自分の専門性を活かして、新しい視点からの意見や提案をすることができる	3	自ら、自分の専門分野に関する情報収集を十分に実行したり、新しい意見や提案を述べることができる	指導があれば、自分の専門分野に関する情報収集を十分に実行したり、新しい意見や提案を述べることができる	指導があれば、自分の専門分野に関する情報収集を十分に実行したり、新しい意見や提案を述べることができる	指導があれば、自分の専門分野に関する情報収集を十分に実行したり、新しい意見や提案を述べることができる	指導があれば、自分の専門分野に関する情報収集を十分に実行したり、新しい意見や提案を述べることができる	指導があれば、自分の専門分野に関する情報収集を十分に実行したり、新しい意見や提案を述べることができる	
11) 11) 自ら、POCAサイクルを理解し、実行できる	11) POCAサイクルを理解し、実行できる	3	自ら、POCAサイクルを理解し、実行できる	指導があれば、POCAサイクルを理解し、実行できる	指導があれば、POCAサイクルを理解し、実行できる	指導があれば、POCAサイクルを理解し、実行できる	指導があれば、POCAサイクルを理解し、実行できる	指導があれば、POCAサイクルを理解し、実行できる	
12) 12) 報告・連絡・相談(ホウレンソウ)を理解し、実行できる	12) 報告・連絡・相談(ホウレンソウ)を理解し、実行できる	3	指導がなくても、ホウレンソウを理解し、実行できる	指導があれば、ホウレンソウを理解し、実行できる	指導があれば、ホウレンソウを理解し、実行できる	指導があれば、ホウレンソウを理解し、実行できる	指導があれば、ホウレンソウを理解し、実行できる	指導があれば、ホウレンソウを理解し、実行できる	
推薦理由		小計点 [70点満点]		配分考慮後の合計点(0点~9.5/35点満点)					

＜日表＞

中部大学地域創成メディアセンター資格申請 ルーブリック(B) 【発表指導責任者が申請後から発表会4日前までに記入し提出ください。】
 【ルーブリックは、学生に見せて、この項目で評価されることを伝えて頂きますようお願いいたします。】

被指導者氏名		学籍番号		所属		発表指導責任者		氏名					
区分	小区分	選考番号	大項目	発表目標	3A 5A	A(5点)	A(3点)	B(2点)	C(1点)	D(0点) F(0点)	点数		
「動く」	内容・組織の理解	1	参加したプロジェクトの活動目的が理解できる	1)	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	3		
			参加したプロジェクトの活動目的が理解できる	1)	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	3	
			参加したプロジェクトの運営組織(フレームワーク)と関係者(対象者)について理解できる	1)	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	3
			参加したプロジェクトの成果物について理解できる	3)	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	3
			参加したプロジェクトにおける今後の課題が理解できる	5)	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	若手の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度を他者に明確に伝えることができる	3
活動後の反省・成長	1)	2	プロジェクトに参加したことによる自分の成長が説明できる	1)	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	3		
			プロジェクトに参加した自分に対する課題が説明できる	1)	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	3	
			自分自身の専門性と特性を活かし、新しい視点からの意見や提案をすることができ	3)	指導がなくても、自分の特性を十分に理解でき、個性を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、自分の特性を十分に理解でき、個性を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、自分の特性を十分に理解でき、個性を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、自分の特性を十分に理解でき、個性を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、自分の特性を十分に理解でき、個性を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、自分の特性を十分に理解でき、個性を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、自分の特性を十分に理解でき、個性を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、自分の特性を十分に理解でき、個性を他者に明確に伝えることができる	5
			成果を生むために重要なチームや個人としての在り方や考え方について説明できる	1)	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	3
			「地域創成メディアセンター」資格の目的や意義について理解できる	3)	指導がなくても、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容を他者に明確に伝えることができる	3
プレゼン準備	1)	3	プレゼンに必要な資料収集ができる	3)	十分な資料を集められる	十分な資料は集められないが、簡便的に行っている	十分な資料は集められないが、簡便的に行っている	資料を集められる	資料を集められる	資料を集められる	3		
			プレゼン内容の方向性を考えることができる	3)	自ら考えて工夫・改善が見られる	指導があれば、工夫・改善が見られる	指導があれば、工夫・改善が見られる	指導があれば、工夫・改善が見られる	指導があれば、工夫・改善が見られる	指導があれば、工夫・改善が見られる	指導があれば、工夫・改善が見られる	3	
			プレゼン内容を総合的に理解できる	3)	十分に理解できる	ある程度は理解できる	ある程度は理解できる	ある程度は理解できる	部分的に理解できないところがある	理解できない	理解できない	3	
			プレゼン内容を通して、大学での自らの成長や課題を客観的に整理できる	4)	十分に成長がみられ、課題について整理できる	課題については整理できる	課題については整理できる	課題については整理できる	課題については整理できる	自らは気付いていない課題がある	指導を重ねても、整理できない	指導を重ねても、整理できない	3
			プレゼン内容を通して、将来自分が貢献したい「地域」における「活動」を語る事ができる	5)	具体的な活動内容を語る事ができる	ある程度の活動内容を語る事ができる	ある程度の活動内容を語る事ができる	ある程度の活動内容を語る事ができる	ある程度の活動内容を語る事ができる	活動内容が曖昧である	具体的な活動内容がない	具体的な活動内容がない	3
合計点 (47/100点)													

＜C表＞

中部大学地域創成メディエーター資格申請 ルーブリック(C) 【発表会当日に評価員が記入】

被評価者氏名	学籍番号
--------	------

評価委員	所属:	氏名:	Ⓜ
------	-----	-----	---

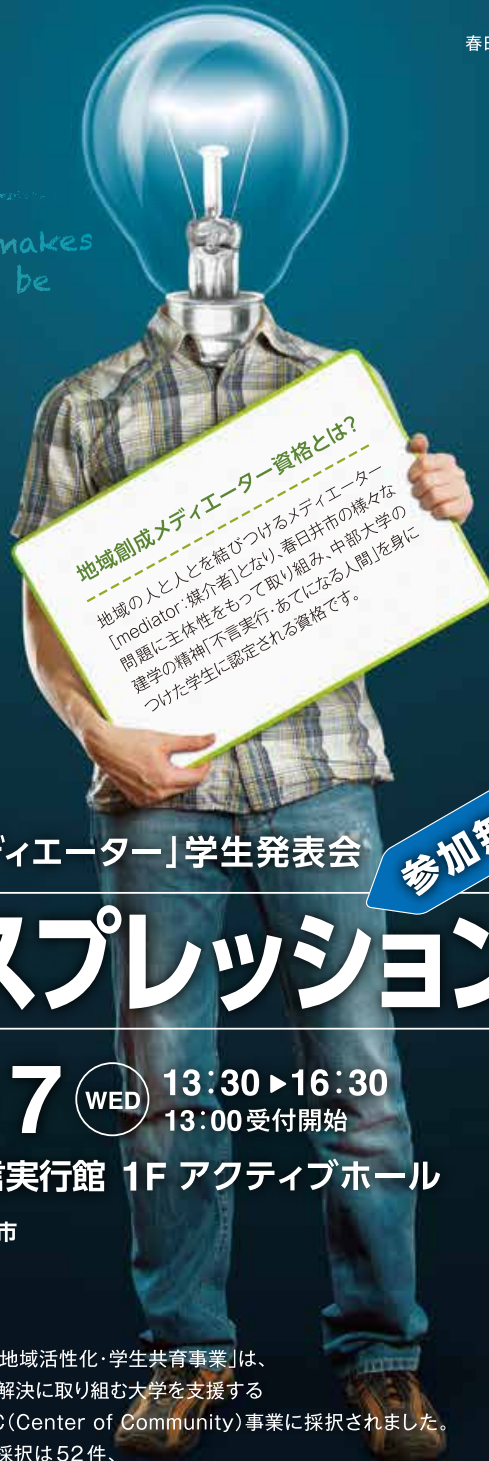
区分	大項目	チェック	得点	小項目
プレゼン 当日	プレゼン内容が分かりやすい		A(3点)	内容が簡潔にまとめられていて理解しやすい
			B(2点)	内容は簡潔にまとめられているが、理解しづらい部分がある
			C(1点)	内容が簡潔にまとめられていないか、量が少なすぎるため、理解できない
			D(0点)	明らかに発表内容として不十分である
	プレゼン資料が見やすい		A(3点)	十分に工夫されていて分かりやすく、また効果的である
			B(2点)	工夫が少なく簡素ではあるが、理解できる
			C(1点)	資料不足あるいはまとめきれておらず、理解しづらい部分がある
			D(0点)	明らかに資料作成が不足していて、理解できない
	声の大きさが適切で、 身振りも使ってプレゼンができる		A(3点)	聞き取りやすい声で、身振りも使って発表ができる
			B(2点)	聞き取りやすい声ではあるが、身振りが少なく淡々と発表している
			C(1点)	声は大きいですが、早口で聞き取りづらい
			D(0点)	声が小さく、身振りも少なく、発表内容が分かりづらい
	プレゼンにふさわしい服装や姿勢、 視線、言葉遣いができる		A(3点)	いずれもふさわしいものである
			B(2点)	姿勢が悪く、下を向いているなど視線が定まっていない
			C(1点)	言葉遣いが悪く、言い直しが多い
			D(0点)	いずれもプレゼンにふさわしいものではない
	プレゼン内容に対しての 質疑応答ができる		A(3点)	質問に対して適切に答えることができる
			B(2点)	質問に対して時間は必要だが、答えることができる
			C(1点)	質問に対して適切に答えられない
			D(0点)	質問に対して全く答えられない
プレゼン内容を通して、 今後の自分のキャリア設計を 伝えることができる		A(3点)	具体的な内容を伝えることができる	
		B(2点)	曖昧な部分もあるが、ある程度は伝えることができる	
		C(1点)	キャリア設計と思われる内容はあるが、伝えられない	
		D(0点)	キャリア設計と思われる内容がない	
				合計点 [18点満点]

別紙⑥ 地域創成メディエーター学生発表会 チラシ

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業



Just
move on!
What you are now makes
what you will be
in the future.



地域創成メディエーター資格とは?
地域の人と人をつなげるメディエーター
[mediator: 媒介者]となり、春日井市の様々な
問題に主体性をもって取り組み、中部大学の
建学の精神「不言実行」あてになる人間を身に
つけた学生に認定される資格です。

中部大学
第4回「地域創成メディエーター」学生発表会

参加無料

PLUS エクスプレッション

日時 2018 2 / 7 WED 13:30 ▶ 16:30
13:00 受付開始

会場 中部大学 不言実行館 1F アクティブホール

主催 / 中部大学 後援 / 春日井市

地域創成メディエーターを育成する
「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」は、
平成25年、文部科学省が地域の課題解決に取り組む大学を支援する
「地(知)の拠点整備事業」=大学COC(Center of Community)事業に採択されました。
全国の大学等から319件が申請し、採択は52件、
そのなかで私立大学は15校のみという、優れた評価を得た事業です。

「地域創成メディエーター資格」認定の最終課題「プラスエクスプレッション」は
講義での規定単位取得に加え、
キャンパスを地域に広げた課外体験に参加・実践した学生たちが、
まちの再生や地域活性化などの特有の課題に地域と協働して
現場で解決策を考えて取り組んだ過程と成果の発表の場。
実社会のなかで起こった自身の変化や、自己成長を通じて得た、
いまの「自分」をプレゼンテーションします。
彼らの経験や努力の軌跡を知り、「自分」を生き生きと語るファイナルステージが
見る人を触発し、感動させてくれるでしょう。

春日井のままちが ボクらのキャンパス。



お問い合わせ

中部大学 地域連携教育研究推進部
TEL. 0568-51-1763 FAX. 0568-51-4659

e-mail / coc@office.chubu.ac.jp
HP / http://www3.chubu.ac.jp/coc/

中部大学 COC | 検索



中部大学

〒487-8501
愛知県春日井市松本町1200番地



「地域創成メディエーター」資格は、資格そのものが大切なのではなく、その道のりこそが学生自らにとって大事なことであり、「意義」と「価値」がある「行動」です。

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

第4回「地域創成メディエーター」学生発表会 PLUS **エクспレッション**

プログラム

- 13:30 開会挨拶：松尾 直規（中部大学COC地域連携教育研究センター長）
- 13:35 学生によるプレゼン発表 [70分]
- 14:45 学生によるポスター発表 [90分]
- 16:15 地域創成メディエーター認定証 授与式
- 16:25 閉会挨拶：倉根 隆一郎（中部大学COC地域連携教育研究センター副センター長）
- 16:30 閉会

*プログラム内容は予告なく変更される場合がありますのでご了承ください



自己プレゼンテーション	ポスターセッション
地域創成メディエーター資格に挑む学生が、これまでの知識修得と体験を振り返り、達成感や今後の課題、目標なども交え、自己成長について自らプレゼンテーションを行います。	自己プレゼンテーション同様、ポスターを用いて自己成長について視覚的にPR。参加者の皆さまには学生と直接コミュニケーションをとっていただき、ご意見やアドバイスをお願いします。

中部大学へのアクセス

- JR 神領駅からスクールバス
JR中央本線「神領(じんりょう)」駅下車
(名古屋駅より「普通」で約26分)、
北口「中部大学スクールバスのりば」から約7分
- JR 高蔵寺駅から名鉄バス
JR中央本線・愛知環状鉄道「高蔵寺(こうぞうじ)」駅下車
(名古屋駅より「快速」で約26分)、
北口8番のりばより名鉄バス
「中部大学前」行に乗車(約10分)
- お車ご利用の場合
東名高速道路
春日井インターチェンジより約5分



お申し込み締切
2/2 (FRI)

参加ご希望の方は、下記ご記入のうえFAXにてご送信ください。お申し込みはメール、お電話でも受けつけております。

ふりがな			
氏名			
勤務先 団体名			
所属			役職
連絡先	TEL		
	e-mail		



中部大学

[参加お申し込み・お問い合わせ先] 中部大学 地域連携教育研究推進部

FAX. 0568-51-4659 / TEL. 0568-51-1763 e-mail. coc@office.chubu.ac.jp

第4回地域創成メディエーター学生発表会 PLUS エクスプレッション

日時：2018年2月7日(水曜日) 午後1時30分～午後4時30分
 会場：中部大学 不言実行館 1階 アクティブホール, 2階 スチューデント・commons
 主催：中部大学
 後援：春日井市

13時30分～13時35分 (会場:1F アクティブホール)
 開会挨拶 松尾 直規 (中部大学 COC地域連携教育研究センター長)

13時35分～14時45分
 地域創成メディエーター紹介 上野 薫 (中部大学 応用生物学部・准教授)

学生による自己プレゼンテーション

- | |
|--|
| 1 「大学3年間で得たもの 変わり始めた自分」
野中 拓真 (応用生物学部 環境生物科学科 3年) |
| 2 「自分の影響力」
中村 優志 (生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 3年) |
| 3 「～出会い、繋がり、そして未来へ～」
宇野 直暉 (工学部 電気システム工学科 3年) |
| 4 「『 』」
加藤 達也 (生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 3年) |
| 5 「理想の自分になるために」
井上 恭助 (経営情報学部 経営学科 4年) |
| 6 「小さい力が繋ぐ「コミュニケーション」—報酬型インターンシップで見た人間像」
星野 卓 (人文学部 コミュニケーション学科 3年) |

<移動>

14時50分～16時10分 (会場:2F スチューデント・commons)

地域創成メディエーター候補学生によるポスター発表

14:50～15:15 Aグループ
 15:17～15:42 Bグループ
 15:45～16:10 Cグループ

※地域活性化リーダー候補学生によるポスター発表も同時に行います。

<休憩・移動>

16時20分～16時25分 (会場:1F アクティブホール)

地域創成メディエーター認定証 授与式

16時25分～16時30分

閉会挨拶 倉根 隆一郎 (中部大学 COC地域連携教育研究センター副センター長)

** 中部大学 地域連携教育研究推進部 **
 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地
 Tel:0568-51-1763

■学生によるポスター発表(2月7日)

NO.	学科	氏名	学年	NO.	学科	氏名	学年	NO.	学科	氏名	学年
A-1	環境生物科学科	野村 智輝	3年	B-1	建築学科	秋野 敬哉	3年	C-1	建築学科	松永 勇人	3年
A-2	スポーツ保健医療学科	湯本 潤輝	3年	B-2	食品栄養科学科	石川 敬真	4年	C-2	歴史地理	味岡 勇太	3年
A-3	幼児教育学科	興語 愛永	2年	B-3	幼児教育学科	木殿明日香	2年	C-3	作業療法学科	中島 真登	4年
A-4	欠番			B-4	歴史地理	海老原 颯	3年	C-4	建築学科	山田 歩夢	3年
A-5	環境生物科学科	武馬 弘季	3年	B-5	スポーツ保健医療学科	神 航	3年	C-5	都市建設工学科	日比野昊治	2年
A-5	幼児教育学科	世古 美鈴	2年	B-6	幼児教育学科	水野 歩実	1年	C-6	スポーツ保健医療学科	熊崎丈一部	2年
A-7	歴史地理	濱田 大夢	3年	B-7	経営学科	熊澤 友大	4年	C-7	建築学科	田舎中直人	3年
A-8	生命医科学科	小山 彰乃	4年	B-8	都市建設工学科	山本 太郎	2年	C-8	スポーツ保健医療学科	杉山 英臣	3年
A-9	作業療法学科	大島 千佳	3年	B-9	コミュニケーション学科	高橋恵里歌	3年	C-9	欠番		
A-10	建築学科	中島 憲成	3年	B-10	経営会計学科	若杉 拓哉	3年	C-10	建築学科	小田 波輝	3年
A-11	作業療法学科	大島 由蒼	4年	B-11	欠番			C-11	コミュニケーション学科	水野 裕太	3年
A-12	幼児教育学科	宮崎 若菜	2年	B-12	幼児教育学科	勝股 拓海	2年	C-12	スポーツ保健医療学科	森田 良平	3年
A-13	歴史地理	佐藤 遼	3年	B-13	経営情報学科	小林淳太郎	3年	C-13	建築学科	後藤 孝汰	3年
A-14	臨床工学科	鈴木 琢也	4年	B-14	都市建設工学科	川部 らら	3年	C-14	スポーツ保健医療学科	飯沼日登実	3年
A-15	スポーツ保健医療学科	長谷川弓珠	3年	B-15	コミュニケーション学科	青山 由季	3年	C-15	幼児教育学科	田代 麻緒	2年
A-16	建築学科	寺本 教希	3年	B-16	生命医科学科	三田 康暁	4年	C-16	経営学科	野口 稔吾	4年
A-17	スポーツ保健医療学科	藤堂 敬彦	3年	B-17	作業療法学科	長谷川 隼	3年	C-17	応用生物化学科	早川 優希	3年
A-18	幼児教育学科	本庄谷晴海	2年	B-18	幼児教育学科	岩原 麻琴	2年	C-18	コミュニケーション学科	高橋麻里那	3年
A-19	建築学科	児玉 蓮恩	3年	B-19	建築学科	中村 和樹	3年	C-19	欠番		
A-20	欠番			B-20	スポーツ保健医療学科	山下 雄大	3年	C-20	生命医科学科	大羽 竜司	3年
A-21	幼児教育学科	武藤 衣里	2年	B-21	作業療法学科	清田誠之介	4年	C-21	幼児教育学科	加藤 璃稀	2年
A-22	経営学科	各務玄太郎	4年	B-22	生命医科学科	稲生 光敏	4年	C-22	建築学科	武内 達也	3年
A-23	応用生物化学科	荒木 舞	3年	B-23	スポーツ保健医療学科	佐久間早紀	3年	C-23	歴史地理	武山 佳輔	3年
A-24	コミュニケーション学科	志田 潤希	3年	B-24	幼児教育学科	林 茜里	2年	C-24	作業療法学科	晴日奈優衣	3年
A-25	欠番			B-25	経営学科	森下 裕斗	4年	C-25	スポーツ保健医療学科	中島 啓輔	3年
A-26	欠番			B-26	経営学科	渡辺 光虹	3年	C-26	理学療法学科	木殿 孝仁	4年
A-27	欠番			B-27	欠番			C-27	幼児教育学科	三宅 舞香	2年
A-28	都市建設工学科	大矢 航平	3年	B-28	建築学科	神戸 一奏	3年	C-28	歴史地理	小西 涼太	3年
A-29	心理学科	木股 匠	2年	B-29	日本語日本文化学科	久保 康太	2年	C-29	欠番		
A-30	理学療法学科	吉田 圭穂	4年	B-30	欠番			C-30	スポーツ保健医療学科	北村 育海	3年
A-31	経営学科	増田 高英	4年	B-31	欠番			C-31	欠番		
A-32	応用生物化学科	宮木 通	3年	B-32	スポーツ保健医療学科	中川竜之介	3年	C-32	生命医科学科	宮野 大樹	4年
A-33	コミュニケーション学科	柘植 清明	3年	B-33	欠番			C-33	幼児教育学科	内田 恵美	2年
A-34	建築学科	山中 隆志	3年	B-34	建築学科	森 健将	3年	C-34	建築学科	伊藤 裕樹	3年
A-35	歴史地理	伊藤 咲希	3年	B-35	都市建設工学科	須山 龍人	2年	C-35	環境生物科学科	榊原 世文	3年
A-36	幼児教育学科	野崎 雅弥	1年	B-36	スポーツ保健医療学科	奥村隆之介	2年	C-36	幼児教育学科	島屋 彩香	2年
A-37	建築学科	櫻田 智也	3年	B-37	理学療法学科	山浦 奈美	4年	C-37	建築学科	西山 諒哉	3年
A-38	臨床工学科	吉田 優花	4年	B-38	歴史地理	白木 京介	3年	C-38	都市建設工学科	黒田 葵	3年
A-39	幼児教育学科	塚崎 祐望	2年	B-39	スポーツ保健医療学科	太田 有哉	3年	C-39	コミュニケーション学科	北川 翔登	3年
A-40	建築学科	松見 勇亮	3年	B-40	スポーツ保健医療学科	堀 天	3年	C-40	経営学科	荒木佑希也	4年
A-41	環境生物科学科	石川 真己	3年	B-41	建築学科	増田 佑哉	3年	C-41	スポーツ保健医療学科	山本 胡輝	3年
A-42	幼児教育学科	加茂 果純	2年	B-42	都市建設工学科	土田 拓輝	2年	C-42	幼児教育学科	山崎紗和子	2年
A-43	スポーツ保健医療学科	山田 健太	3年	B-43	応用生物化学科	山本 真由	3年				

※地域活性化リーダー ポスター発表

■学生によるポスター発表(2月20日)

NO.	学科	氏名	学年	NO.	学科	氏名	学年	NO.	学科	氏名	学年
D-1	理学療法学科	加藤 拓磨	4年	D-6	保健看護学科	陸浦英里香	4年	D-11	食品栄養科学科	石黒 力	3年
D-2	保健看護学科	石崎 祐美	4年	D-7	保健看護学科	山崎 祐美	4年	D-12	応用生物化学科	入江ひなの	3年
D-3	保健看護学科	田中 環	4年	D-8	スポーツ保健医療学科	瀧野 翔牙	3年	D-13	保健看護学科	三木はる香	4年
D-4	保健看護学科	松浦 千晴	4年	D-9	スポーツ保健医療学科	洞桐 樹	3年	D-14	保健看護学科	長尾 未来	4年
D-5	保健看護学科	宮下 涼音	4年	D-10	スポーツ保健医療学科	高橋 桜也	3年	D-15	応用生物化学科	木村 都明	3年

地域創成メディアーター ポスター発表者 計128名

第4回地域創成メディエーター学生発表会 PLUS エクスプレッション

日時：2018年2月20日(火曜日) 午後2時00分～午後2時40分

会場：中部大学 不言実行館 2階 スチューデント・commons

14時00分～14時05分

開会挨拶 松尾 直規 (中部大学 COC地域連携教育研究センター長)

14時05分～14時35分 (30分間)

学生によるポスター発表 Dグループ (1人 6～8分)

* 地域創成メディエーター候補学生 16名

14時35分～14時40分

閉会挨拶 倉根 隆一郎 (中部大学 COC地域連携教育研究センター副センター長)

■地域創成メディエーター候補学生によるポスター発表

NO	学科	年	氏名
D-1	理学療法学科	4	加藤 拓磨
D-2	保健看護学科	4	石崎 祐美
D-3	保健看護学科	4	田中 環
D-4	保健看護学科	4	松浦 千晴
D-5	保健看護学科	4	宮下 涼音
D-6	保健看護学科	4	陸浦 英里香
D-7	保健看護学科	4	山崎 祐美
D-8	スポーツ保健医療学科	3	濱野 翔牙
D-9	スポーツ保健医療学科	3	洞桐 樹
D-10	スポーツ保健医療学科	3	高橋 桜也
D-11	食品栄養科学科	3	石黒 力
D-12	応用生物科学科	3	入江 ひなの
D-13	保健看護学科	4	三木はる香
D-14	保健看護学科	4	長尾 未来
D-15	応用生物化学科	3	木村 都萌
C-34	建築学科	3	伊藤 裕樹

**** 中部大学 地域連携教育研究推進部 ****

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地

Tel:0568-51-1763

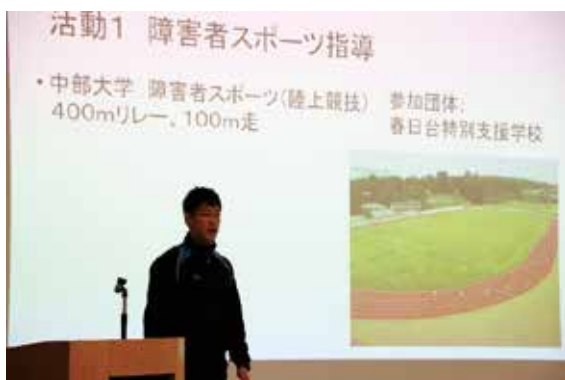
[第4回地域創成メディエーター学生発表会]の様子 ～平成30年2月7日(水)～



開会挨拶 松尾直規
(中部大学教授 COC 地域連携教育研究センター長)



学生によるプレゼンテーション 1



学生によるプレゼンテーション 2



聴衆からの質疑応答



学生によるポスター発表



評価員による評価



資格認定授与式 石原修 (中部大学長)



口頭発表・ポスター発表学生合同記念撮影

別紙⑦

第4回 中部大学 地域創成メディエーター学生発表会 PLUS エクスプレッション アンケート集計結果

開催日：平成30年2月7日（水） 13：30～16：30

場所：中部大学 不言実行館 1F アクティブホール, 2F スチューデント・commons

参加者数：一般36名 教職員53名 学生11名

地域創成メディエーター候補学生117名

計217名

回収数：30名

- 1. 性別**
 1. 男性（24名）
 2. 女性（6名）
- 2. 年齢**
 1. 29歳以下（3名）
 2. 30代（2名）
 3. 40代（6名）
 4. 50代（2名）
 5. 60代（6名）
 6. 70歳以上（11名）
- 3. 所属**
 1. 大学教員（10名）
 2. 大学職員（3名）
 3. 教育関係機関（0名）
 4. 地方自治体（0名）
 5. 企業（1名）
 6. NPO・市民団体（2名）
 7. 学生（3名）
 8. CAAC受講生（1名）
 9. オープンカレッジ聴講生（2名）
 10. 一般市民（5名）
 11. その他（3名）
- 4. この「地域創成メディエーター学生発表会」を何でお知りになりましたか**
 1. ホームページ（3名）
 2. チラシ（7名）
 3. 広報春日井（4名）
 4. タウン誌（0名）
 5. 所属関係者からの案内（19名）
 6. その他（2名）
- 5. この「地域創成メディエーター学生発表会」全体のご感想をお聞かせください**
 1. とてもよかった（13名）
 2. よかった（13名）
 3. 普通（0名）
 4. やや不満（1名）
 5. 不満（1名）
 - 無回答（2名）
- 6. この「学生発表会」の会場や運営はいかがでしたか**

会場	1. 良い（24名）	2. やや良い（3名）	3. 普通（1名）
	4. やや悪い（0名）	5. 悪い（0名）	無回答（2名）
運営	1. 良い（18名）	2. やや良い（7名）	3. 普通（2名）
	4. やや悪い（0名）	5. 悪い（1名）	無回答（2名）
- 7. 学生の自己プレゼンテーションを踏まえ本学教育実践に対するご意見ご感想がございましたらお聞かせください**

- ・知のグループとして、大学関係の出席はそこそこと思った。但し、地のグループは以外に少なかったのでは。地へのアプローチ・PRの方法？
- ・学生自身が自分の成長を自覚できたこと（それも成長の一つ）を発表できた点がよかった。
- ・春日井市内にもコミュニケーションを学ぶ場が多くあります。ささえ愛センターをたずねてください。
- ・自己実現に向かって進もうとしている学生達に拍手。
- ・地域に目を向けつつ自分（個）の変化にスポットをあてた、今日のコンセプト参考になりました。

- ・ポスター発表が、まったく評価委員(?)のためだけの場で、一般の参加者は置き去り状態。自己プレゼンはどれもよくまとまって、良い内容ですが、発表が少しパターン化している感がありました。
- ・地域社会を本当の自分育成のキャンパスにしている。
- ・地域の活動に関するものが多く参加したくなりました。
- ・体験や自己啓発からの得た貴重な発表力には感心しました。反面、その実施には大変な努力が伴います。この為の対応力(忍耐・傾聴・実行力等)の鍛錬も必要である、この方面に力点を。
- ・企画段階で医療機関も学生さんと交流する場があると良いと感じました。
- ・発表テーマと地域創成メディアーターの目指すところの整合性を評価する項目がほしい。
- ・各学部の教員が積極的に関わっている点が印象的でした。

8. その他ご意見ご要望などございましたらお聞かせください

- ・難しい問題ですが、是非頑張って全国の大学の見本となろう。条件はよい、春日井には中部大だけ。
- ・発表者が自信をもってスピーチしている姿に感動しました。次回の本会を期待しております。
- ・自分の専門ではない分野に積極的に取り組んでいる学生がいることはうれしかった。学生自身でのチームワークがとれていることに感動した。
- ・女子学生の発表も21世紀は女性の時代ですよ!
- ・貴重な機会をいただきました。ありがとうございました。
- ・中部大学は、恵那に立派な研修センターを持っています。そこを活用したプロジェクト(地元と協働した)なりをぜひ実行してほしいと思います。恵那の地元は、大学、学生の参加、参入を期待しています!
- ・今回初めて参加。面白い活動(地域創成メディアーター)です。学外への展開もできるように充実発展を望みます。
- ・積極的な活動(学生達)に少々ビックリしました。また優秀な学生と世の若者(一部)の心構えの差を感じています。比較対照の差がある→教育の力で補える。よろしく。
- ・ありがとうございました。

平成30年2月7日実施



平成29年度 中部大学
COC
最終活動
報告会

平成30年
3月15日(木)
13:30～16:30
中部大学55号館1階
(5511講義室・ラウンジ)

平成25年度に文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の採択を受け、「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」を全学的に推進しています。5年間にわたる本学の活動と成果について最終活動報告会を開催しますので、是非ともご参加ください。

参加無料・申込不要

第1部

ワーキンググループ活動の発表

7つの活動についてワーキングリーダーの教員6名が発表します

… 伊藤守弘、櫻井誠、保黒政大、磯部友彦、戸田香、對馬明

地域志向教育研究活動の発表

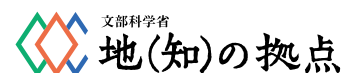
地域連携による人材育成について4名の教員が発表します … 行本正雄、豊田洋一、堀田典生、野田明子

第2部

地域志向教育研究活動の ポスター発表・交流会

16名の教員がポスター発表します … 伊藤佳世、塚本義則、小川宣子、牧野典子、西垣景太、千田隆弘、武田明、武田誠、横江彩、尾鼻崇、上野薫、宮田茂、長島万弓、尾方寿好、矢澤浩成、横手直美

お問合せ 中部大学 地域連携教育研究推進部 (16号館3階)
〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200 ダイヤルイン 0568-51-1763
<https://www3.chubu.ac.jp/coc/> E-mail: coc@office.chubu.ac.jp





平成29年度 中部大学 COC最終活動報告会 プログラム

第1部 (5511講義室)

13:30～13:35 **開会挨拶** 松尾直規 教授/COC地域連携教育研究センター長

13:35～14:45 ワーキンググループ活動の発表

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. 「正課教育」 | 伊藤守弘 准教授/生命健康科学部 |
| 2. 「報酬型インターンシップ」 | 櫻井 誠 教授/工学部 |
| 3. 「コミュニティ情報ネットワーク事業」 | 保黒政大 准教授/工学部 |
| 4. 「生活・住環境を考えるまちづくり」 | 磯部友彦 教授/工学部 |
| 5. 「高齢者・学生交流・LHS」 | 戸田 香 教授/生命健康科学部 |
| 6. 「シニア大学」 | 對馬 明 教授/生命健康科学部 |
| 7. 「高蔵寺NTキャンパスタウン化」 | 櫻井 誠 教授/工学部 |

14:50～15:30 地域志向教育研究活動の発表

- 「春日井市における廃食油回収とBDF製造・利用の地域循環システムの構築」
行本正雄 教授/工学部
- 「地域や人から学ぶ建築をつくるための実践的学習」
豊田洋一 教授/工学部
- 「健康・体力づくりを推進する地域高齢者リーダーの育成は可能か」
堀田典生 准教授/生命健康科学部
- 「多職種連携による認知症予防のための睡眠・血圧管理に関する教育」
野田明子 教授/臨床検査技術教育・実習センター

第2部 (55号館ラウンジ)

15:40～16:30 地域志向教育研究活動のポスター発表・交流会

- 「学生主体の標準化教育を通じた春日井及び周辺地域の活性化」 **伊藤佳世** 准教授/経営情報学部
- 「愛知県特産農作物の桃・イチジクからの美白剤の開発と地域企業の共同商品化プロジェクトの推進」 **塚本義則** 教授/応用生物学部
- 「春日井市における産地直売所を介した地域活性化への取組み」 **小川宣子** 教授/応用生物学部
- 「大学生の防災リーダー育成に必要なファシリテーション能力の習得」 **牧野典子** 教授/生命健康科学部
- 「春日井市の運動実施率向上を目指した学生達の取組み」 **西垣景太** 講師/生命健康科学部
- 「進学地域を第二の故郷とし子育てを課題とする学生の育成」 **千田隆弘** 講師/現代教育学部
- 「医療系学生の報酬型インターンシップ制度の発展」 **武田 明** 教授/生命健康科学部
- 「春日井市における内水氾濫の理解とその地域住民への広報活動」 **武田 誠** 教授/工学部
- 「環境に配慮し、地域に開かれた高齢者福祉施設の提案」 **横江 彩** 助教/工学部
- 「春日井市における音環境のフィールドレコーディングとメディアデザイン教育のための実践的活動」 **尾鼻 崇** 講師/人文学部
- 「春日井市における産官学民協働によるカヤネズミ生息環境保全の試み」 **上野 薫** 准教授/応用生物学部
- 「地域住民の健康増進を目指した実践的食育活動」 **宮田 茂** 准教授/応用生物学部
- 「世代間交流会における栄養教育実践と継続支援の効果について」 **長島万弓** 教授/応用生物学部
- 「中部大学機能別分団の活動によりもたらされる大学生への教育的効果の解明」 **尾方寿好** 准教授/生命健康科学部
- 「健康増進サークルへの参加が学生の臨床力と研究力に与える効果」 **矢澤浩成** 講師/生命健康科学部
- 「中部大学で開催する乳児と母親に対する子育てセミナーによる看護学生の共学・共育プロジェクト」 **横手直美** 准教授/生命健康科学部

(2) ワーキンググループ報告

- ① 正課教育WG
- ② 報酬型インターンシップWG
- ③ コミュニティ情報ネットワーク事業WG
- ④ 生活・住環境を考えるまちづくりWG
- ⑤ 高齢者・学生交流・LHS WG
- ⑥ シニア大学WG
- ⑦ 高蔵寺NTキャンパスタウン化WG

① 正課教育WG

1. 活動組織

委員長 伊藤守弘

副委員長 上野薫

委員 倉根隆一郎、羽後静子、戸田香、山羽基、今枝健一、竹内環、吉村和也、大日方五郎、伊藤佳世、尾鼻崇、堀部貴紀、水野智之、小川宣子、牧野典子、西垣景太、千田隆弘、塚本義則、出口良太、(松尾直規)

2. 活動計画

現在まで進めてきた教育改革をさらに発展させ、地域社会に役立つ人間となるための行動計画を持てるよう、全学共通教育の科目として新たに『地域共生実践』を設置し、学部・学科にも地域志向関連科目を設置し基礎教育と専門教育を交互に発展的に教育し、地域社会再構築のために必要な実践的人材を育成するための教育改革を目的とする。さらに最終的に中部大学が認定する“あてになる人間＝『地域創成メディエーター』”の育成を目的とする。

通年

- ・「地域共生実践」を核にして、正課科目の地域関連科目のカリキュラムを体系化し、システム化を進める。
 - ・ 地域創成メディエーター育成のルーブリック評価を確立する。
 - ・ 育成する人材像（何をどの程度できるのか）を明確にする。
 - ・ 地域創成メディエーターへの導き（春・秋オリエンテーション・メディエーターサロン・関連講義内）、AL/TBL の勉強会の実施、必要なパンフレット等の改正/作成・HP での案内等の掲載。
- 4～8月： 地域共生実践を5講義・並列開講の運営。2作成テキストの活用と修正案の収集。
評価基準の再検討、担当教員・協力者の勧誘と増員。
- 8～9月： 春学期地域共生実践のふりかえり、評価基準の再確認、共有化。秋学期新規担当教員・協力者への実施説明。
- 9～3月： 地域共生実践を春学期同様の規模にて開講・運営、ふりかえり、評価基準の再確認。担当教員・協力者の勧誘。
- 11～12月： 地域創成メディエーター学生発表会（+エクспレッション）を開催し、地域創成メディエーターをルーブリック評価に基づき、認定する。

3. 活動成果

通年

- ・「地域共生実践」を核にして、正課科目の地域関連科目のカリキュラムを体系化し、システム化を進めた。
- ・地域創成メディエーター育成のルーブリック評価として、申請前、審査直前、審査時の3段階に分けて、各内容を作成してこれに基づき学生を育成した。これにより、学生の資質の保証することができるようになった。
- ・上記で作成したルーブリック評価を確立することにより、育成する人材像（何をどの程度できるのか）を明確にし、学生および指導者への到達目標の明確化を図ることができた。
- ・地域創成メディエーターへの導き（春・秋オリエンテーション、メディエーターサロンに代わる各研究室単位での勧誘・説明、関連講義内での勧誘・説明）、AL/TBL の勉強会（COC+での協働イベントであるサマースクール：9月5～7日合宿形式への参加による学生指導法の学び合い）の実施、必要なパンフレット等の改正/作成・HP での案内等の掲載を行った。

4～8月：春学期に地域共生実践を5講義・並列開講を運営し（履修者計169名）、作成テキストを活用し、修正案を収集した。また、評価基準については再検討したが昨年度内容について大きな修正は必要なかった。担当教員・協力者の勧誘を委員会にて積極的に行い、増員された。

8～9月：春学期地域共生実践をふりかえり、評価基準の再確認をしたが、大きな修正は必要なかった。秋学期新規担当教員・協力者への実施を説明した。

9～3月：秋学期に地域共生実践を春学期同様の規模にて開講・運営した（履修者計328名）。また、事後にふりかえり、評価基準を再確認したが、大きな修正は必要なかった。次年度の担当教員・協力者を再度委員会にて勧誘し、次年度の大枠も決定した。

2月：地域創成メディエーター学生発表会（+エクスペッション）を平成30年2月7日と20日開催し、地域創成メディエーターをルーブリック評価に基づき、合計132名（口頭発表者6名、ポスター発表者126名）を認定した。



② 報酬型インターンシップWG

1. 活動組織

委員長	櫻井誠
副委員長	佐伯守彦
委員	栗濱忠司、對馬明、武田明、宮本順一、大竹雄平、細川貴史
オブザーバー	松尾直規

2. 活動計画

春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に社会の現場で学生を教育するインターンシップ型の就労システムの構築を目的とする。

- 4月 医療系での連携について議論する。
学生への説明会を開催する（7月、9月、11月）。
新入生にパンフレットを配布する。
- 10月 特命教授の会を開催する。
- 10月 座談会を実施する。
- 3月 特命教授の会を実施する。

3. 活動成果

地（知）の拠点整備事業も5年目に入り、報酬型インターンシップ活動は学内においては周知が進み、また、学生を受け入れている春日井商工会議所会員企業においても周知が進んだ。報酬型インターンシップは春日井商工会議所との連携による取り組みと、医療機関で実施する医療系報酬型インターンシップの2種類があり、その両方を報酬型インターンシップWGで運用などについて議論を行いながら展開した。以下に活動内容を記述する。

1. 報酬型インターンシップ参加企業は78社に増加した。（平成30年2月1日現在）
2. 春学期、夏季休暇、秋学期、春季休暇、医療系報酬型インターンシップにおいて、合計99名が参加した。内訳は春学期17名、夏季休暇23名、秋学期18名、春季休暇11名、医療系報酬型インターンシップ30名であった。
3. 春日井商工会議所と2回（9月、2月）打ち合わせを行った。
4. ポイント制度（春学期・秋学期：1ポイント、夏季休暇・春季休暇：0.7ポイント、合計2.0ポイント以上認定）により報酬型インターンシップ修了証書を授与することを決定し、本年度は6名に授与する予定である。

2 活動報告

5. 学内説明会を4回(4/7 参加学生 96名、6/23 参加学生 66名、9/20 参加学生 42名、12/21 参加学生 21名)開催した。
6. 参加者との意見交換会を2回(5/11 参加学生 6名、10/20 参加学生 6名)を開催した。
7. 中部大学側からは学長、副学長、学部長を中心にしたメンバーで構成され、春日井商工会議所からは会頭、学外特命教授、学外特命講師で構成された学外特命教授の会を2回(10/13、3/7)行った。
8. 学生向けのパンフレットを作成し、全学に配付するとともに、報酬型インターンシップ参加を促すポスターを作成し、学内に掲示している。



高柳組での研修風景



4月に開催した説明会



学外特命教授の会



修了証書授与式

③ コミュニティ情報ネットワーク事業WG

1. 活動組織

- 委員長 保黒政大
副委員長 富永敬三
委員 倉根隆一郎、前田和昭、中路純子、河内信幸、宮下浩二

2. 活動計画

地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がIT化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発研究を推進する。

1) 医療情報システム

医療情報共有システムを改良すると共に、システム利用業種の増加を図る。

2) シニア大学講義映像配信

学生とIT企業の開発者とのミーティング・開発を通して、シニア大学で必要なアプリ開発の基礎を学ばせる。

3) NPO活動情報受発信システム

NPOの活動情報を発信するホームページを定期的に更新する。

活動情報の発信およびホームページ広報のために地域広報誌を作成，発行する。

・子育て支援相談会及び「プチ勉強会&交流会」

子育て支援相談会を開催して子育てに悩む市民を支援すると共に、学生を相談会の運営に参加させて将来の糧とする。

・高校生向け部活動支援

体育会系部活動に所属する高校生に向けて、部活動におけるケガの発生を未然に防ぐための講義・実技の講習会を実施する。

3. 活動成果

【イベント】

- ・子育て相談会プチ勉強会&交流会(5月) 参加学生数：5名
- ・部活動支援講習会(6月) 参加学生数：9名
高蔵寺高校の運動部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。参加生徒数：約180名
春日井高校の硬式野球部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。参加卒業生数1名、参加生徒数：約10名
- ・部活動支援講習会(7月) 参加学生数：1名
春日井高校の女子ハンドボール部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。参加生徒数：約10名
- ・子育て相談会プチ勉強会&交流会(8月) 参加学生数：3名

2 活動報告

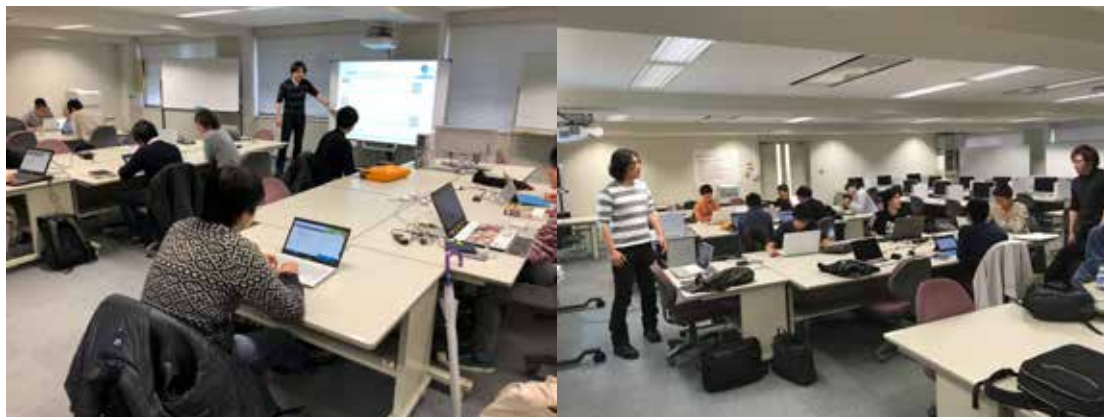
- ・子育て相談会を実施(9月) 参加学生数：5名，卒業生：1名
8件の相談を，8名の専門スタッフで対応
- ・部活動支援講習会(11月) 参加学生数：6名
高蔵寺高校の運動部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。参加生徒数：約130名
- ・シニア大学の講義映像配信システム開発に関する講習会(11月～1月に9回) 参加学生数：最大で17名
- ・まちこみゅニュース編集に向けた，地元のデザイナーによるデザイン講習会(9月～12月に5回実施) 参加学生数：最大で10名
- ・「まちこみゅニュース Vol.6」を発行(2月) 参加学生数：2名
- ・子育て相談会プチ勉強会&交流会開催予定(2月) 参加学生数：5名

【概要】

- ・NPOの活動情報発信と情報共有のためのホームページを更新すると共に、本ホームページの周知と電子媒体が苦手な方々への対応として紙媒体の「まちこみゅニュース」を発行した(参加学生数：2名)。また、デザインの知識を習得させるため講習会を開催した(参加学生数：12名)。
- ・発達障害児を持つ家族など、子育てをサポートする活動として「子育て相談会」を9月に実施した(参加学生数：5名，卒業生参加者数：3名)。その他、4回の「子育て支援相談会プチ勉強会&交流会」を実施(参加学生数：16名の予定)。
- ・シニア大学を充実するためのアプリ開発に関する勉強会を実施した(参加学生数：8名)。
- ・医療情報共有サービスシステムにおいて、他職種連携に向けた春日井市医師会主催の導入研修会にて講演を実施した。
- ・春日井市内の高校にて、部活動時のケガ防止やケガ発生時の対応に関する講習会やアンケートを実施した(参加学生数：10名)。



デザイン講習会



ソフトウェア作成講習会



子育て相談会



スポーツ障害予防講習

④ 生活・住環境を考えるまちづくりWG

1. 活動組織

- 委員長 磯部友彦
副委員長 松山明
委員 豊田洋一、内藤和彦、山羽基、杉井俊夫、武田誠、伊藤睦、岡本肇、
行本正雄、甲田道子、南基泰、上野薫、尾鼻崇、林良嗣、宮田茂、
千田隆弘、横江彩、吉住隆弘

2. 活動計画

春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域住民が安心快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する地域開発研究を進める。

1) 意見交換会などの実施

高蔵寺ニュータウンの課題についての住民などとの意見交換の場に参加

2) まちづくり講演会の開催

まちづくり講演会を開催して、全学部の学生に「まちづくり」の意義とそれへの参加方法を学ぶ機会をつくる。

3) タウンウォッチングの実施

様々な地域の視察を通して、学生の学習に役立てる。

4) 正課並びに自主活動の強化

通年 演習・ゼミナールのテーマとして現実の地域課題を取り上げる。

通年 卒業研究のテーマとして地域課題に対する解決方法に取り組む。

通年 地域の人々との十分なコミュニケーションを交えた学生の自主活動を促進する。

3. 活動成果

<学生参加活動>

- 1)2017年5月29日 名古屋駅にある地域冷暖房システム（DHC名古屋㈱）名駅東地区地域冷暖房を見学し、省エネルギーについて学んだ。（横江対応）【参加学生14名】
- 2)2017年7月5日 豊川市中心市街地地区（豊川稲荷地区、諏訪地区）でのまちあるき及び懇談会の開催。豊川市役所職員、地元商店主との交流。（岡本対応）【参加学生8名】
- 3)2017年7月28日～2018年1月30日 豊川



豊川市中心市街地まちあるき

市まちなか再生検討事業の一環である住民参加型豊川稲荷薬師如来堂ポケットパークづくり会議を企画運営（期間中計6回のデザインワークショップを開催）。成果物としてポケットパークの整備案と運営・維持管理の方針を作成。（岡本対応）

【参加学生4名】

- 4) 2017年8月8日 サウンドスケープ調査活動ミーティングおよび勉強会。（大学内）（尾鼻対応）【参加学生10名】
- 5) 2017年8月9日（水）～10日（木） オープンキャンパスにて、「使用済み燃料が燃料に変わるまで！」というテーマで来場者に春日井市との取り組みを紹介した。（行本対応）【参加学生7名】
- 6) 2017年8月18日 サウンドスケープ調査の実施。（大学内）（尾鼻対応）【参加学生5名】
- 7) 2017年9月3日 春日井市の健康救急フェスティバル2017に参加（宮田対応）【応用生物学部の学生参加11名、院生参加3名】
- 8) 2017年9月7日 サウンドスケープ調査の実施。（高蔵寺ニュータウン周辺）（尾鼻対応）【参加学生5名】
- 9) 2017年9月8日 サウンドスケープ調査の実施。（高蔵寺ニュータウン）（尾鼻対応）【参加学生6名】
- 10) 2017年9月26日 都市建設工学科「部門創成B（3年生科目）」において名古屋都市センターの視察を実施。（磯部・岡本対応）【参加学生26名】
- 11) 2017年10月3日 都市建設工学科「部門創成B」において春日井市中心部とJR春日井駅視察を実施。（磯部・岡本対応）【参加学生27名】
- 12) 2017年10月8日、11月12日、12月17日 高蔵寺ニュータウン定点観測。（磯部・松山対応）【都市建設工学科と建築学科の学生延べ14名参加】
- 13) 2017年10月18日 大学内でサウンドスケープ調査実施。（尾鼻対応）【参加学生6名】
- 14) 2017年10月19日 大学内でサウンドスケープ調査実施。（尾鼻対応）【参加学生5名】
- 15) 2017年10月31日 都市建設工学科「部門創成B」において高蔵寺ニュータウン現地視察を実施。（磯



春日井市の健康救急フェスティバル2017



高蔵寺ニュータウン定点観測（2017年11月12日）
歩行支援モビリティサービス実証実験のコース視察と、
プレ走行会、体験乗車に参加

部・岡本対応)【参加学生 27 名】

16)2017 年 11 月 1 日 名古屋市(大曾根駅~徳川園~主税町~栄~名古屋駅)でのまちあるきの開催。(岡本対応)【参加学生 8 名】

17)2017 年 11 月 8 日 大学内で音情報バリアフリー調査実施。(尾鼻対応)【参加学生 8 名】

18)2017 年 11 月 13 日 半田市亀崎公園及び空き家のリノベーション事例の見学・ヒアリング。公園設計者、半田市のまちづくり NPO、半田市役所職員との交流。(岡本対応)【参加学生 2 名】

19)2017 年 11 月 29 日 大同大学情報学部総合情報学科かおりデザイン専攻光田恵教授による講演会「生活環境のにおい・かおり」(本学で開催)に学生が参加し、高齢者施設での臭気問題の対策方法等について学んだ。(横江対応)【参加学生 30 名】

20)2017 年 12 月から 2018 年 1 月 高齢者福祉施設の温熱環境調査(春日井市内の 2 施設)を実施し、加えて参加学生の自宅や祖父母宅との比較を踏まえ、温度差から生じるヒートショック等を考慮した適切な温熱環境について調査検討した。(横江対応)【参加学生 17 名】

21)通年。都市建設工学科での卒業研究において地域に関する多くの課題が選定され、解決方法の検討がなされた。【参加学生 31 名】

(例 春日井市内の工場跡地の戦後の土地利用の変遷とまちづくりに与えた影響)

22)通年。建築学科での卒業研究、卒業設計において地域に関する多くの課題が選定され、解決方法の検討がなされた。【参加学生 93 名】

(例 高蔵寺ニュータウンにおけるセンター地区への集客のための提案)

<学会発表等>

・2017 年 4 月 30 日 学会論文公表

豊田章起・服部敦・岡本肇,「ゲーミフィケーションによるまち歩きイベントの効果に関する研究~豊川市諏訪地区におけるすごろくイベントを例として~」『日本建築学会計画系論文集』No. 734, pp. 999-1008, 2017

・2017 年 7 月 12 日 第 27 回環境工学総合シンポジウム 2017、アクトシティ浜松

「BDF と BDF の混合燃料を用いた小型発電機実験」山田莉央、行本正雄

・2017 年 8 月 2 日 第 26 回日本エネルギー学会大会、ウインクあいち

「BDF と BDF の混合燃料を用いた小型発電機実験」山田莉央、行本正雄

・2017 年 10 月 31 日 学会論文公表

Kaede TEJIMA, Masao YUKUMOTO, Tsuneo YAMANE, Scale-up and Energy Consumption of Bubble Stripper for Residual Methanol Removal from Crude Biodiesel Fuel, Journal of the Japan Institute of Energy, 96, 430-435(2017)

・2018 年 2 月 6 日 平成 29 年度大学院工学研究科創造エネルギー理工学専攻 修士論文公聴会 「廃食油及び廃プラスチックを原料とする燃料化技術」手嶋楓、行本正雄

⑤ 高齢者・学生交流・LHS WG

1. 活動組織

- 委員長 戸田香
 副委員長 堀文子
 委員 栗濱忠司、内藤和彦、河内信幸、長島万弓、櫻井誠、城憲秀、野田明子、
 三摩真己、末田智樹、尾方寿好、矢澤浩成、谷利美希、河村守雄、
 福田峰子、松村亜矢子、大竹雄平、殿垣博之

2. 活動計画

ラーニングホームビジット (LHV) の充実を図るとともに、参加学生の増加を図る。また、ホストファミリー獲得に向けて定期的な世代間交流会を企画する。

- 1) 定期的な世代間交流会開催
 - 2) 教育セミナー・福祉用具セミナー・健康教室の開催
 - 3) LHV の実践と報告会開催
-
- 1) 学生を対象とした活動説明会開催
 高齢者-学生交流活動の定期的開催
 昨年度の活動計画を踏襲しつつ、おおくの学部からの学生参加を呼び掛ける。
 - 2) セミナー：5月・8月、健康教室：年24回
 - 3) LHV の実施 スケジュールは昨年度に概ね即して実施
 4月～7月 世代間交流会ならびにLHVへの参加学生・ホストファミリー募集
 8月 お見合い交流会
 8月～9月 LHS・LHV実施
 11月 体験報告会・ホストファミリー懇談会

3. 活動成果

- 1) 5月 LHS 活動説明会開催 (全学部生を対象に案内を配信) 参加者 26名
- 2) 世代間交流会への参加実績
 6月 第1回 栄養教室 参加者 30名 (内 学生 17名)



ゴマをたっぷり練り込んで餃子を皮から手作りしました。

2 活動報告

6月 第2回 防災企画

参加者 57名 (内 学生 41名)



ファーストレスポonder体験

温かい非常食試食体験

救急隊に引き継ぐまでの的確な応急手当を学びました。

10月 第3回 体力測定会

参加者 89名 (内 学生 32名)



睡眠調査
エコー検査
尿検査



地域の皆様の健康増進活動
を通して、多くの学生が学び
成長しています。

3) 教育セミナー・福祉用具セミナーの開催

5月 テーマ「コミュニケーションのコツ」

参加者 51名 (内 学生 36名)

8月 介護機器 (リフト) 体験

参加者 14名 (内 学生 9名)



教育セミナー風景



スライディングボード・走行式リフト体験

介護用品の紹介と介護される立場を世代間で模擬体験

4) お見合い交流会 8月

参加者 31名 (内 学生 16名)

5) LHV の実施

9月 7世帯へ学生16名が2~3名ずつでLHVを実施 (1回~4回の訪問を実施)

6) LHV 報告会の開催

参加者 38名 (内 学生 16名)

11月報告者 シニア7名、学生13名



LHV の後も、一部の学生と
ホストファミリーとの
交流は継続しています。

7) KCG サークル 4月 ~ 翌年 3月 2回/月で開催

8) まとめ

地域との長期的なつながりが期待される防災企画と医療と食事をテーマとした世代間交流会の企画が実践された。

LHS に代わって実践した LHV については、学生と受け入れ世帯がお互いの学びのテーマを確認し合って実践したことが、個別の交流の学びの効果を高めている。また、活動は個別の世帯に留まらず、ホストファミリーの住む地域活動への広がりも確認でき、今後の発展性が期待できる。

4. 今後の課題

世代間交流会は地域に息づいた活動に学生を取り込んで頂く形が、長期的な活動継続の理想型と思われる。大学が企画した交流会は参加者が固定する傾向にあり、大学内の活動をいかに地域活動とコラボレーションできるかが、今後の発展性を左右すると思われる。LHV については受け入れ世帯は限定的であり、参加する学生も少数ではある。しかし、活動による学生の学びと成長が確認され、地域貢献活動への参加意欲を高めた学生は地域からも歓迎されている。長期的な広報活動と地域のニーズに合わせた活動の展開が必要である。

⑥ シニア大学WG

1. 活動組織

委員長	對馬明
副委員長	尾方寿好
委員	甲田道子、櫻井誠、羽後静子、藤丸郁代、林上、末田智樹、町田千代子、根岸晴夫、堀田典生、宮本靖義、宮田茂、伊藤正晃、庄山敦子、種村育人、稲ヶ部正幸、大竹雄平、出口良太、松田佳子

2. 活動計画

高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的としたシニア世代への実践教育。

- 4月 2・3期生の後期授業（春学期）を開始する。
- 5月 4期生を募集する。
- 7月 4期生の可否を決定する
- 8月 2期生の修了式を行う。
- 9月 既卒者（1期生）の社会貢献活動報告会を開催する。
- 9月 4期生の入学式を行い、3・4期生の授業（秋学期）を開始する。
- 10月 新入生のオリエンテーション合宿を実施する。
- 通年 既存のカリキュラムの充実を図る。
- 通年 地域在住のシニアに対して体験入学の開催など、シニア大学を身近に感じさせる企画を実施する。
- 通年 募集パンフレットの配布先を検討する。
- 通年 CAACを継続的に運営するため、学内関係各部署および学外協力者との調整を行う。

3. 活動成果

上記活動計画に即し、中部大学アクティブアゲインカレッジ（シニア大学）を運営した。以下、経時的に活動とその成果を報告する。

- 1) 4月に2・3期生の後期授業（春学期）を開始した。開講科目数および単位数は2期生5科目（12単位）、3期生13科目（14単位）であった。
- 2) 5月から新1年生（第4期生）を募集し、13名を合格（面接試験は7月）とした。13名が新たにシニア大学受講生となることとなった。
- 3) 8月に第2期生の修了式を挙行（修了認定の学習成果発表会は7月開催）した。13名がシニア大学を修了し、「地域再生コーディネーター（CAACカレッジ長認定）」の称号を得た。

4) 同月にキャリア支援課と共催し介護職員初任者研修講座を開講した。シニア大学受講生6名、学部生6名が受講し、シニアおよび大学生は共学・共同して本講座に臨み全員が資格を取得した。

5) 同月に修了生の会（同窓会）が開催され、今後の活動の確認と在校生も合わせた体力測定会も開催した。

6) 9月に4期生の入学式を行い、3・4期生の前期授業（秋学期）を開始した。開講科目数および単位数は3期生9科目（14単位）、4期生12科目（13単位）であった。また、新入生（4期生）のオリエンテーション合宿を実施した。

7) 11月に本学大学祭開催日に合わせて、受講生企画のシニア大学活動報告会をCAAC講義室（22号館）で開催した。地域住民、学長をはじめ本学関係者の約100名が来場した。



[4期生入学式]



[同入学式]



[4期生オリエンテーション合宿]



[同合宿（朝のストレッチ体操）]



[授業風景（英会話活用）]



[同（旅と文学）]



[同（臨床医学：春日井市民病院）]



[体力測定会]



[2期生学習成果発表会]



[2期生修了式]



[CAAC 活動報告会]



[同報告会]

4. 補足

シニア大学開設の目的は、シニアが健康で生産性のある社会の一員として生涯現役生活を送ることができるように再学習の場を提供することと、シニアのこれまでの経験や知識、技術を直接的、間接的に学生に伝授していただく機会・場所を創造することである。

シニア大学は開学以来、入学者延べ 59 名、修了者延べ 24 名、在校生 33 名となった。徐々に知名度も向上しているように思われる。CAAC 修了者は再雇用により就職を果たした方、NPO 法人を設立し地域貢献活動を行っている方、ボランティア活動を行っている方など新たな生きがいを見出し多方面で活躍中である。シニア大学開設の目的の一部は達成されつつあるように思われる。今後、本学学生とのさらなる共学・共育を推進させる仕掛け作りも検討段階に入り実践に移していきたい。

CAAC 受講生募集方法は検討が必要であるが、上記 11 月に開催した CAAC 活動報告会には多くの方が来場された（写真参照）。受講生と地域在住シニアが直接触れ合い、CAAC の取り組みを目で見て、肌で感じていただけるとこの会は募集形態の一つとして今後定着させたい。

CAAC の運営には本学が有する有形、無形の資源を活用することが必要であるが、これからも様々な部署、研究室のお世話になることが多い。この場を借りて関係各部署、各位にも引き続きのご協力とこれまでのご助力に深くお礼を申し上げたい。

最後に、昨年 12 月、安倍首相は総理大臣官邸で第 4 回となる人生 100 年時代構想会議を開催したそうである（www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/201712/19jinsei100.html 閲覧日：平成 30 年 2 月 7 日）。会議での総理の発言に「生産性革命と人づくり革命を車の両輪として、少子高齢化という最大の壁に立ち向かい…後略。」とある。今後も CAAC はこの考えの先駆者として COC の目的でもある「地（知）の拠点」、すなわち地域に開かれた大学の事業の一環として活動を展開していきたい。

⑦ 高蔵寺NTキャンパスタウン化WG

1. 活動組織

委員長 櫻井誠

副委員長 羽後静子

委員 栗濱忠司、戸田香、内藤和彦、福井弘道、横手直美、大竹雄平、
蓑島智子、殿垣博之、(松尾直規)

2. 活動計画

高齢化で衰退した高蔵寺ニュータウンを活性化する目的で中部大学のキャンパス機能を高蔵寺ニュータウン内に拡大し、地域と大学が融合した若者も生活する場とする。

1) 春日井市・URとの連携による地域連携住居の充実

4月 新入生に対して、パンフレット配付する。

9月 URおよび春日井市との打ち合わせを行う。

10月 地域連携住居の学生への説明会を開催する。

3月 URおよび春日井市との打ち合わせを行う。

2) コミュニティプラザ Kozoji の充実

通年 CAAC修了者が行う地域貢献活動について議論する。

3. 活動成果

地(知)の拠点整備事業も5年目に入り、キャンパスタウン化活動においても本格的な活動を行っている。キャンパスタウン化は学外において地域住民、春日井市、UR都市機構との連携による取り組みであり、学内においては中部大学学生、学生支援課および図書館との連携による取り組みである。その両方をキャンパスタウン化WGで運用などについて議論を行いながら展開した。以下に活動内容を記述する。

1. URおよび春日井市と連携による地域連携住居の入居者は66名であった。
2. コミュニティプラザ Kozoji は215名であった。また本プラザは12月末日をもって閉館した。
3. 地域連携住居の募集にあたり、新入生宛入学手続き関係書類に案内チラシを同封した結果、新入生の入居者数が増加した。
4. 学生寮寮生向けに2回(11/28(参加学生数:46名)、11/30(参加学生数:8名))実施した。

2 活動報告

5. 入居学生による活動組織を立ち上げ、中部大学 KNT 創生サポーターズ CU⁺（通称 CU⁺）と命名した。入居学生は半年間で 5 ポイント（1 ポイントは概ね 1～2 時間の貢献活動に対しポイントを付与）の地域貢献活動を行い、学生支援課に実施報告書を提出している。また、CU⁺主催によるコーヒーサロンなどの地域交流イベントを 4 回開催した。総イベント参加回数は 46 回であった。
6. UR 都市機構および春日井市と打ち合わせを 2 回行った。
7. キャンパスタウン化WGを 6 回行った。



COC交流会への貢献



ニュータウンウォークでの活動風景



岩成台団地ラジオ体操での活動



自主開催したコーヒーサロンでの活動

(3) 地域志向教育研究経費の成果報告

(3) 地域志向教育研究経費の成果報告

地域志向教育研究経費は、学内の教員が広く地域志向の教育研究活動を実践できるよう、助成を行うものである。

課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての本学の地域志向教育研究活動の強化を図る課題を学内に広く公募した。

本学の「地（知）の拠点整備事業」を推進するため、多くの教員から積極的に応募があり、20件の採択となった。

活動課題一覧

* 職名等は平成30年3月時点

No	氏名	所属	役職	課題名	分担者／協力者
<①地域連携教育改革・教育システムの構築>					
1	伊藤 佳世	経営情報学部 経営総合学科	准教授	学生主体の標準化教育を通じた春日井及び周辺地域の活性化	石川彩音、春日井商工会議所ものづくり支援課、中日新聞中央台専売所、愛知県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長、日進市環境課、日進市市民協働課、春日井市環境政策課
2	塚本 義則	応用生物学部 応用生物化学科	教授	愛知県特産農作物の桃・イチジクからの美白剤の開発と地域企業の共同商品化プロジェクトの推進	
3	上野 薫	応用生物学部 環境生物科学科	准教授	新・森の健康診断、森の治療法を考えよう！	
4	小川 宣子	応用生物学部 食品栄養科学科	教授	春日井市における産地直売所を介した地域活性化への取組み	
5	牧野 典子	生命健康科学部 保健看護学科	教授	大学生の防災リーダー育成に必要なファシリテーション能力の習得～避難所運営ゲームのファシリテーター経験を通して～	江尻晴美准教授

6	西垣 景太	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科	講師	春日井市の運動実施率向上 を目指した学生達の取組み	酒井俊郎教授
7	千田 隆弘	現代教育学部 幼児教育学科	講師	進学地域を第二の故郷とし子 育てを課題とする学生の育成	
<②報酬型インターンシップ(就業体験)>					
8	武田 明	生命健康科学部 臨床工学科	教授	医療系学生の報酬型インター ンシップ制度の発展	福田信吾講師,児 玉泰准教授,對馬 明教授,矢澤浩成 講師,福田峰子准 教授,長谷川龍一 教授,小嶋和恵助 手
<③コミュニティ情報ネットワーク>					
<④生活・住環境を考えるまちづくり>					
9	行本 正雄	工学部 機械工学科	教授	春日井市における廃食油回 収とBDF 製造・利用の地域循 環システムの構築	波岡知昭准教 授、竹島喜芳准 教授
10	武田 誠	工学部 都市建設工学科	教授	春日井市における内水氾濫 の理解とその地域住民への 広報活動	
11	豊田 洋一	工学部 建築学科	教授	地域や人から学ぶ建築をつく るための実践的学習	
12	横江 彩	工学部 建築学科	助教	環境に配慮し、地域に開かれ た高齢者福祉施設の提案	
13	尾鼻 崇	人文学部 コミュニケーション学科	講師	春日井市における音環境の フィールドレコーディングとメ ディアデザイン教育のための 実践的活動	
14	宮田 茂	応用生物学部 食品栄養科学科	准教授	地域住民の健康増進を目指 した実践的食育活動	矢野智奈美助手
<⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay(LHS) >					
15	長島 万弓	応用生物学部 食品栄養科学科	教授	世代間交流会における栄養 教育実践と継続支援の効果 について	戸田香教授
16	尾方 寿好	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科	准教授	中部大学機能別分団の活動 によりもたらされる大学生へ の教育的効果の解明	北辻耕司助手、 岡村雪子講師、 藤丸郁代准教授

17	野田 明子	臨床検査技術教育・実習センター	教授	多職種連携による認知症予防のための睡眠・血圧管理に関する教育	戸田香教授、堀文子准教授、矢澤浩成講師、長島万弓教授
18	矢澤 浩成	生命健康科学部 理学療法学科	講師	健康増進サークルへの参加が学生の臨床力と研究力に与える効果	戸田香教授
<⑥シニア大学(Chubu University Active Again College : CAAC)>					
19	堀田 典生	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科	准教授	健康・体力づくりを推進する地域高齢者リーダーの育成は可能か	對馬明教授
<⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化>					
20	横手 直美	生命健康科学部 保健看護学科	准教授	中部大学で開催する乳児と母親に対する子育てセミナーによる看護学生の共学・共育プロジェクト	山下恵講師、岡倉実咲助手、橋本妙子助手

※③コミュニティ情報ネットワークは、平成 29 年度は、採択課題なし。

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	イトウカヨ 伊藤佳世	所属・職名	経営情報学部 経営総合学科・准教授		
活動課題	学生主体の標準化教育を通じた春日井及び周辺地域の活性化				
活動組織					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
イトウカヨ 伊藤佳世	代表者	経営総合学科・准教授	環境管理標準化教育	修士	中部大学ESDエコマネーチーム顧問 中部大学ESDエコマネーチーム地域部長 春日井ビジネスフォーラム主催 新聞プロジェクト共同実施 春日井わいわいカーニバル、紙芝居実演共同実施 にしんわいわいフェスティバル 春日井まつり主催 レッツエコアクションあいち事務局
イシカワアヤネ 石川彩音	協力者	経営会計学科・学生			
マツイヨウタ 松井幸太	協力者	春日井商工会議所 ものづくり支援課			
タムラヤスヒロ 田村康弘	協力者	中日新聞 中央大専売所			
トウゲテルコ 峠テル子	協力者	愛知県青少年育成 アドバイザー 連絡協議会会長			
キトウ 鬼頭氏 オカダ 岡田氏	協力者	日進市市民生活部			
オカキハラ 櫛原氏	協力者	春日井市環境政策課			
マツハバナオキ 松巾直樹	協力者	中日本ハイウェイ・エンジニアリング 古屋株式会社			
中部大学ESDエコマネーチーム(協力者、役割分担：実践者) 4年：荒木佑希也 井上恭助 各務玄太郎 熊澤友太 笹井理央 相馬滉一 奈加拓也 仲尾裕太 野口奨吾 増田高英 森下裕斗 3年：岩田尚也 青木泰樹 大須賀隆起 石川彩音 若杉拓哉 小林涼太郎 2年：石田亮太 梶間大誠 神谷鞠依 川本隆貴 小林大輝 小林将也 志賀勇斗 柴田瑠莉 杉浦圭紀 高屋朋代 寺澤佑哉 中野翔大 萩原悠平 林美有 樋口雄大 藤森友紀 森大朗 矢野圭吾 油井宏真 1年：足立樹哉 伊藤一樹 今井浩登 牛垣和也 岡野太智 柏工登紀夫 加藤美樹 河尻和樹 楠瀬大樹 琴浦翔 佐尾龍弥 島井結里 島田新 鈴木悠介 高橋勇希					
活動経過と成果					
二つの目的①学生主体とした標準化教室を通じ産学官民連携活動の実践、②ESD学園としてのESD推進を実現するために以下の内容を実施した。 ①学生主体とした標準化教育 1-1 ファシリテータ育成 春日井及びその他周辺地域との連携で各イベントへ今年度チームで開発した消費者向け標準化教材とエネルギーマネジメントシステムについての標準化教材を出展するにあたり、1年生から4年生のチームメンバー全員が教材について説明できるように育成した。各イベントでは幅広い年代の方々が参加されるので年代に合わせた分かりやすい説明と楽しんで教材を体験してもらえるように練習を重ね、一人一人が実演の担当をできるようになった。 1-2 産業界向けの標準化教育 1-2-1 主催イベント 11月11日に、春日井市の後援を受けた春日井市周辺企業向けのイベント「超スマート社会の実現に向けた標準化と地域における実践」を開催した。IoTによる技術革新を取り込みながら、情報社会に次ぐ「超スマート社会」を実現するためにエネルギーの好循環を図るバリューチェーン、中でも「エネルギーマネジメントの標準化とスマートシティ」に焦点を当て、日本の標準化戦略、地域における実践を通じて、未来社会の在り方を学べるイベントとなった。					

第一部では、標準化の専門家である日本規格協会の千葉祐介氏とスマートシティに取り組む豊田市の杉浦栄紀氏に基調講演をしていただいた。第二部では、企業向け標準化教室として、伊藤佳世准教授より標準化教育についての概説と中部大学 ESD エコマネーチームによる標準化教材の実演を行った。第三部では、大学内のアロハテーブルにてビジネス交流会を行い、企業の方々と講演者、学生を交え教材やエネルギーマネジメントシステム、スマートシティについて意見交換を行うことができた。66 人の参加であった。

1-2-2 春日井ビジネスフォーラム

11 月 16 日 17 日に春日井商工会議所、中部大学研究支援課の依頼を受け、中部大学ブースを担当した。平日開催であったため 4 年生が中心となり、エネルギーと消費者の標準化教材を実演した。地元企業が参加するイベントに出展することで異業種交流ができた。467 人が教材を体験し 2 社が教材を採用した。

②ESD の推進

2-1 子供及び一般向け標準化教育

- ・日進市と連携し、7 月 8 日に行われた日進わいわいフェスティバルに出展した。我々のブースでは標準化教材とスマートフォンの適正使用を目的とした紙芝居の実演を行い、標準化と ESD を広めることができた。308 名の来場者があった。

- ・春日井市の依頼に基づき 10 月 21、22 日に春日井まつりに出展を行う予定だったが台風接近のため中止となった。前日まで標準化教材の改訂作業やブースの装飾デザインなどの準備を行った。

- ・愛知県の依頼に基づき、11 月 18、19 日に愛知県主催のレッツエコアクションに出展した。愛知県職員及び運営事務局と打ち合わせを重ね、ブースでの出展と企画運営を担当した。ブースは主に 1 年生と 2 年生が担当し教材の実演を行い、3 年生と 4 年生はインフォメーションやステージサポーターなどを担当しイベントの企画運営に関わるスキルを身に着けた。987 人に実演を行った。

2-2 青少年育成

愛知県青少年育成アドバイザー連絡協会と連携を行った。昨年度開発したスマートフォンの功罪をテーマにした紙芝居 2 作を用いて 5 月 14 日の春日井わいわいカーニバル（落合公園）で 248 人に実演を行った。また 10 月 14 日の子供体験教室（鶴舞公園）で 406 人に実演を行った。

2-3 大学間交流

ESD を推進している学生の交流を進めた。

- ・日進のイベントに関連し、大学間の共同プロジェクトを企画運営した。3 月 28 日より日進市役所職員と周辺大学（中京大学、愛知学院大学、名古屋学芸大学と打ち合わせを重ねてブースデザインの統一やイベント企画を行った。里山再生プロジェクトに絡め竹を使った装飾と来場者が対戦型で楽しめるゲームを開催した。

- ・岐阜大学の ESD 活動を実施している ESD クオリアと連携をし、11 月 18 日に行われた学生環境会議に参加し、岐阜県にある長良川を中心とした生物多様性や川の恵みについて他の参加学生とともに話し合いを行った。

2-4 学生向け ESD 活動

中日新聞春日井営業所の依頼を受け、若者の新聞離れ対策をすべく 2 月 14 日に本学生向けのイベントを開催する。若者の新聞への関心を高め、新聞を読む習慣を身に付けることで、読解力や文章力を伸ばし、今後の学生生活や就職活動に活かすことを目的として行う。講演とワークショップで構成している。2 年生が中心となり企画立案を行った。

活動成果の公表

標準化教材及びチームの報告書は伊藤佳世研究 (http://www3.chubu.ac.jp/faculty/ito_kayo/) で、チームの活動は随時 FB (<https://www.facebook.com/ChubuunivESDecomoneyteam/>) で公表している。ツイッター (@EsdTeam) での周知、環境らしんばん (<http://www.geoc.jp/rashinban/>) の周知を行った。さらに名古屋市、愛知県、春日井市、日進市の HP のイベント情報でも活動が掲載された。その結果、地元のマスコミによる取材を受けた。



日進市イベント



紙芝居



主催イベント




標準化教材実演

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	ツカト ヨシノ 塚本 義則	所属・職名	応用生物学部応用生物化学科 教授		
活動課題	愛知県特産農作物の桃・イチジクからの美白剤の開発と地域企業との共同商品化プロジェクトの推進				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ツカト ヨシノ 塚本 義則	代表者	応用生物化学科	応用微生物学 食品栄養科学	博士(食品栄養科学)	研究統括 美白剤開発の研究推進 共同商品化プロジェクトの推進
活動経過と成果					
<p><美白剤開発></p> <p>1. 愛知県特産農作物の桃とイチジクの果肉及び果肉の酵母発酵液の脂質抽出物にシミ・ソバカスの原因物質であるメラニンの形成に関与する酵素(チロシナーゼ)の活性を強力に低下させる物質が含まれることが分かった。</p> <p>2. この内、桃の酵母発酵液の脂質抽出物についてはシリカゲルカラムクロマトグラフィーによる有効物質の単離・精製を行った結果、チロシナーゼ活性低下はもとより、メラノサイトでのメラニン形成と蓄積及びメラニンの放出を阻害することが確認されるとともにその化学構造についても新規物質であることが推定できた。</p> <p><共同商品化プロジェクト></p> <p>1. 当該美白素材の地域企業との共同商品化を目指して先ず地元の春日井市市役所の経済振興課・企業活動支援課・農政課に地域の美白剤開発が可能な企業の紹介(株エー・アイ・システムプロダクト)を受けるとともに原材料の将来の供給元である地域JA団体であるJA尾張中央の関係者との打ち合わせを通して原材料の供給の可能性について協議することができ地域企業との共同商品化を強力に推進することができた。</p>					
活動成果の公表					
<p>1. 第4回地域創成メディエーター学生発表会及び平成29年度中部大学「COC最終活動報告会」による公表2/7(水)開催の第4回地域創成メディエーター学生発表会でのポスター発表及び3/15(木)開催予定の平成29年度中部大学「COC最終活動報告会」でのポスター発表による公表を行う。</p> <p>2. 大学Web上への掲載による公表と活用</p> <p>本研究成果は論文化の対象となるものではなく、あくまでもアンケート調査結果の大学あるいは当該学部の今後の就職活動への活用を通して研究成果を実践の場面に応用していくことにあることから、大学のWeb上での研究成果の公表による中部大学内への研究成果の普及を図るものである。</p>					

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	カノ カル 上野 薫	所属・職名	応用生物学部 環境生物科学科・准教授		
活動課題	新・森の健康診断				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ウエノカオル 上野薫	代表者	環境生物科学科・ 准教授	土壌圏管理学・ 保全生態学	博士(学術)	
活動経過と成果					
<p>今年で3回目となった新・森の健康診断。本年度は人工林問題と関係の深い、里でのイノシシ問題を取り上げ、サブタイトルを「五感で知る恵那の問題と魅力～里のイノシシ問題解決に向けて～」として恵那研修センターを拠点として1泊2日で実施した。参加者は、環境生物科学科4年生が12名、3年生が9名、スポーツ保健学科3年生が2名、日本語日本文化学科2年生が1名、都市建設工学科が4名、地域の森の健康診断事務局長が1名、本学引率者が1名、卒業生1名の計31名の参加であった。そのうち、本年度のメディエーター候補者が9名、昨年度メディエーター認定者が3名であった。</p> <p>中部大学恵那研修センター周辺でのイノシシの被害状況を実際に歩いて体感し、その背景の一つとなっている人工林の現状についても簡単に調査し、さらに駆除等で活躍している地元の猟友会会長や恵那市林務課の担当者から現状を語ってもらった。これらのフィールドワークの後、イノシシ問題の解決に向けた提案を1泊2日のグループワークで行い、翌日班ごとに発表を行った。現地で生の状況を把握し、自ら問題を捉え、地域での問題に対する理解の際に重要な視点や解決法の探求法、グループワークの手法を身につけ、地域で活躍するための資質を磨いた。</p>					

以下に、スケジュール詳細を示す。

■実施日：2017年12月9日（土）・10日（日）（1泊2日）

■開催場所：中部大学恵那研修センター

12月9日（土）

1000 恵那研修センター集合、オープニング（挨拶、趣旨説明、チーム形成）
 1030 拓志館にて、シシ肉部位の観察、試食会、イノシシ猟と肉の利用の紹介、片づけ
 1400 恵那キャンパス内散策、イノシシ痕の観察、人工林の観察
 1600 恵那研修センター第4研修室で講義、（上野、ゲスト）
 ゲスト：恵那市林務係 各務氏（有害鳥獣による被害や対策などについて）
 各チームでプロジェクト提案の作成開始
 1800 夕食
 1930 グループワーク、随時風呂
 2300 就寝

12月10日（日）

0730 朝食、部屋掃除、チェックアウト、荷物移動（第1研修室）
 0830 発表準備（@第4研修室）
 0930 発表会
 1030 意見交換会（ゲスト：恵那市猟友会会長、地元市民）、移動
 1200 三郷コミュニティセンターにて、お昼ご飯（シシ肉カレー）、後片付け
 1330 ふりかえり
 1500 閉会 挨拶と集合写真、片づけ
 1600 スタッフ解散

12月中に個人レポート提出、1月中に班ごとのレポート提出を行った。

【学生の反応】（個人レポートより抜粋）

- ・地域の課題根本的な解決のためには、問題となっている現場を自分でしっかり確認し、各関係者から生の声を聴くことが何よりも重要だと感じた。
- ・全く知らない分野の研修だったが、現場を自分で観て、感じ、議論し、今後の自分の専門分野や就職してから役に立つことが多かった。
- ・イノシシ被害が身近な問題であることを初めて知ることができた。
- ・知っているつもりだったが、猟友会の現状や行政の苦勞など、知らないことがたくさんあった。
- ・異分野で学年も違うメンバーであったが、優しく受け入れてもらえ、議論の楽しさを知ることができた。



活動成果の公表

本活動内容は、学生全員のレポートおよび班ごとのレポートをまとめる形で、恵那市林務課および岐阜県に提出される。また、下流域での市民会議（主催：藤前干潟クリーン大作戦）である「第7回ごみと水の集い」（2018年1月21日@藤前会館）の中で、活動報告としてその一部について報告を行っている。

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	オ ガワ ノリ コ 小 川 宣 子	所属・職名	応用生物学部 食品栄養科学科・教授		
活動課題	春日井市における産地直売所を介した地域活性化への取組み				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学 位	役割分担
オガワ ノリコ 小川 宣子	代表者	食品栄養科学科・教授	食物学	学術	献立作成指導
活動経過と成果					
<p>地域特産物を活かした栄養のあるお弁当や食品加工品などの提案をし、販売をするとともに、販売時には学生が、今回の取組み趣旨について購入者に説明を行う。これにより、学生は今回の活動の目的をより明確にするとともに、自分の考えを人に説明する力を修得できる。今回の活動は本学と連携協定を締結している JA 尾張中央および製造業者との連携のもと実施した。</p> <p>1. 活動経過</p> <p>1) <u>地域活性化に向けての課題を考える</u> (9月4日)</p> <p>春日井市における産地直売所である JA 尾張中央のぐーぴーひろばの現場見学、および店長からの現状の説明を受けることで、学生は産地直売所の課題を抽出する。</p> <p>2) <u>JA 尾張中央の流通について知る</u> (9月13日)</p> <p>JA 尾張中央の農政振興部やファーマーズマーケットの現場の方からはマーケットの現状を伺った。現場での課題と今回の説明から、活動内容について、意見交換を行うことで学生は社会状況を把握するとともに自分の考えを述べることができた。</p> <p>3) <u>活動の提案を行う</u> (9月20日)</p> <p>産地直売所の活性化に向けての活動内容について学生が考えた案を提案し、実践にするにあたっての問題について JA 尾張中央から意見が出され、話し合いを行い、より実際の活動に向け、テーマ設定を行い、活動内容をより明確にすることができた。実際の活動は、</p> <p>①お弁当販売：冬の寒いシーズンに向け、「免疫力をアップ」するための食材と地域の特産物を活用した献立を考える。②ソースの販売：若者を引き付ける目玉商品として地域の特産物(にんじん、ほうれんそう)をそれぞれ用いたソースで、現代の若者に不足している栄養素を補填した上で、多種類の料理に広く活用できるものを考える。</p> <p>こととなった。</p> <p>4) <u>試作、打ち合わせ</u> (10月11日、11月15日、12月5日、12月6日、12月16日)</p> <p>販売に向けてテーマにそって、お弁当とソースの試作を行ったものについて JA 尾張中央や製造業者と試作会を行うことを繰り返し、改善を行った。併行して販売時に配布する資料は説明資料について検討を行った。販売したお弁当についてアンケートを実施し、購入者の意見を聞き、活動内容の反省資料とする。</p>					

5) 細菌検査

瓶販売をするソースは、常温販売になるため、細菌検査を食品分析センターに依頼し、一般細菌数（生菌数）は300以下/g、大腸菌、黄色ブドウ球菌は陰性であることを確認した。

6) お弁当の販売（12月16.17日）（活動成果の公表参照）

昨年度に継続して、地域の特産物を活用した栄養を考えたお弁当の販売を行った。



7) ソースの瓶販売（3月3.4日）（活動成果の公表参照）

本年度からあらたに地域の特産物を活用し、栄養を考えた加工食品として、料理に活用できるソースの販売を行う。

2. 成果

学生は実際にマーケットで消費者に対し、自分達が行ってきた活動内容を紹介することで、社会とのコミュニケーション力を少しでも修得することができたと考える。これらの一環した活動が今後の自信につながっていくことが期待できる。継続した活動により地域との繋がりが強くなったことを感じた。

活動成果の公表

1. お弁当の企画および販売

1) お弁当販売（12月16.17日）

6名の学生が季節、春日井市産、栄養の視点から考え、試作を何度も行い、製造についてはJA尾張中央、製造についてはやおとうふ工房いしかわと数回にわたる打ち合わせ、試作を繰り返し、提案したお弁当のレシピにそった**お弁当の販売を実施**した。主菜を魚と肉の2種類とし、それぞれ40食ずつ、1日80食を販売した。これは昨年に比べ倍の数であるが、10時からの販売で、12時には完売した。

2) コンセプトのチラシ作製

販売時には学生がお弁当のコンセプトを紹介し、消費者とのコミュニケーションを図ることができた。この時のコンセプトの紹介は「免疫力アップ弁当」として冬の風邪予防に必要な栄養素の説明とお弁当の献立の作り方（レシピ）と栄養価を記載した**チラシを作製し、実施**した。

3) アンケート実施

購入者を対象にアンケートを実施した結果、「どんなところに魅力を感じてご購入されましたか」という設問に対して、「地元の大学生がメニューを考案したこと」が最も多く、今後の購買意欲は「買いたい」「改善があれば買いたい」という回答が大半であった。また、自由記載には「管理栄養士として高い志をもって、頑張ってください」という励ましも多く見られた。

2. ソースの企画および販売

1) ソース販売（3月3.4日）

若い人に産地直売所を利用してもらうために、若い人に使ってもらえそうなソースを企画した。地域の特産物であるほうれんそうとにんじんをベースにしたソースで、若い人が不足しているカルシウムやビタミン類を料理に少しかけるだけで補うことができる栄養を考えたソースを企画した。栄養だけでなく、いろいろな料理に合い、おいしいソースを作製するために何度も試作を繰り返し、業者（桃花亭）と試作会において意見交換を行い、販売を実施する。

2) コンセプトのチラシ・瓶のデザイン作製

販売時には4名の学生がソースのコンセプトを紹介し、消費者とのコミュニケーションを図る。この時のコンセプトは説明資料として**チラシを作製し、瓶のデザインも行っている**。

以上のように春日井市での活動については、ファーマーズマーケットで学生が考えた活性化に向けての提案を実践することができ、学生が社会で活動をしている姿が多く目の触れていただける機会となった。これらの活動は数社の新聞においても紹介されるとともに、ケーブルテレビでも放映（1月16日）され、紹介された。また、購買者の小学生から励ましの手紙（管理栄養士を目指して頑張ってください）が、店舗の方にも届き、販売が終わった時には、達成感からか、涙する学生も見られた。

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	マキノ ツネコ 牧野 典子	所属・職名	生命健康科学部保健看護学科・教授		
活動課題	大学生の防災リーダー育成に必要なファシリテーション能力の習得 —避難所運営ゲームのファシリテーター経験を通して—				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学 位	役割分担
マキノ ツネコ 牧野 典子	代表者	保健看護学科・教授	看護学	修士	研究の企画、運営、 評価、論文・報告書 作成、研究成果公表
エジリ ハルミ 江尻 晴美	分担者	保健看護学科・准教授	看護学	修士	研究の運営、評価、 論文・報告書作成、 研究成果の公表
活動経過と成果					
<p>1. 本学の学生を対象に避難所運営ゲーム(以下、HUG)を以下の時期に実施した。</p> <p>1) 2017年7月3日(月)「地域の防災と安全」受講生134名を6~7名編成で20班作り、2511と2512に分かれて実施した。学生の出席率は2511が86.8%、2512が84.8%であった。各班にはポニター1名がファシリテーターとして配置され、さらに2511の6班と10班にはポニターに加えてHUG経験がある学生を1名配置した。その結果、学生を配置した班の学生のシャトルシートから「学生でもHUGの進行ができることを知って凄いと思った」「ポニターに聞きにくいことを先輩の学生には聞けた」「学生の進み具合を見てゆっくり進めてくれた」など、ファシリテーター役の学生がファシリテーターとしての基本的な要素をとらえた進め方をしてくれていたことがわかった。</p> <p>2) 2017年10月7日(土)「災害看護論」受講生104名を6~7名編成で18班作り、5131と5134に分かれて実施した。学生の出席率は5131が100%、5134が97.9%であった。各班にはポニター1~2名がファシリテーターとして配置した。その結果、学生は全員プレーヤーとして災害時要配慮者の避難所配置を考えることができた。<u>ポニターは学生間の関係がよく取れているクラスであることを踏まえ学生が自ら考えてアイデアを出せるように促した。</u>学生から出たアイデアは、高齢者用または車いす用の広い通路と狭い通路とを設けた、器具庫を更衣室にした、ステージを共有スペースにしてテレビを置き避難者に情報を提供した、インフルエンザの疑いがある人は2階の教室に隔離した、車中泊の人はエコノミークラス症候群の予防の為に避難所に誘導したなど、学科専門科目で学んだ知識を生かした工夫が次々と出された。また学生の感想からは、<u>災害時の避難所環境の改善に積極的に本部に要求し関与していく必要性</u>についても学んでいることがわかった。</p> <p>3) 2017年12月21日(木)「地域の防災と安全」受講生135名を6~7名編成で18班作り、5131と5134に分かれて実施した。学生の出席率は5131が83.8%、5134が92.5%であった。各班にはポニター1~2名をファシリテーターとして配置し、さらに5134の18班にはHUG経験があるSA学生を1名配置した。18班の学生のシャトルシートにはSAを配置したことに関する記述はなかった。この日の学生には「グループワーク時に意識したいこと」という用紙を配付し、<u>HUG前後で目的達成行動と集団維持行動の12項目に4段階の点数をつけてもらった。</u>その結果は報告会の時に発表する。</p>					

2 活動報告

2. 本学の学生が学会や研究会の参加者を対象に HUG のファシリテーターを以下の時期に経験した。
- 1) 2017 年 7 月 22 日 (土) 「協同学習フェスタ (久留米大学) の授業作り研究会」参加者 (小・中・高・大学の教員約 56 名) を 9・10 名編成で 6 班作り、3 つの班をポニターが担当し、3 名の班をファシリテーター役の学生が担当した。参加者からの学生評価は「カードを平等にプレーヤーに回してくれてリードしてくれた」「プレーヤーがカードの問題に取り組んで夢中になっている時、カードを渡しにくそうだった」「一瞬懸命にカードを渡して進めようとしていた」など、学生が少し遠慮しながらも懸命に役割を果たそうとしていたことを評価していた。学生は「元気な参加者が多く、自分が提案しても無視されたことがあった」と回答した。北九州北部豪雨が起って間もない時期であったため、参加者から水害時の避難所と大地震との違いについての質問があった。そういう意味で HUG は適時に行われた と考える。
 - 2) 2017 年 8 月 30 日 (水) 「日本看護研究学会 (日本福祉大学) ワークショップ」の参加者 (約 12 名) を 2 班に分けてポニターとファシリテーター役の学生がペアで班を担当した。参加者からのファシリテーター評価は「カードを渡されても全体が見えないので自分の判断でよいのか不安が残った」「災害支援経験のある看護師とポニターがとてもよく知っていて頼ってしまった所があった」「学生は遠慮がちにカードを渡していた」など、プレーヤーは、学生より多くの経験を積んでいるポニターや看護師を頼りがちであったこと、学生は少し遠慮しながらも懸命に役割を果たそうとしていたことが分かった。学生は「参加者の中に避難所支援活動経験者がいて、具体的な提案に自分も納得してしまった」と述べている。経験豊富なメンバーがいる班は課題への対応は早いが、そのメンバーに引っ張られる可能性があることが分かった。ファシリテーターとしての対応が課題である。
 - 3) 2017 年 10 月 28 日 (土) 「日本協同教育学会 (岡山大学) 交流集会」の参加者 (小・中・高・大学の教員及び行政職員、看護師など約 16 名) を 2 班に分けてポニターとファシリテーター役の学生がペアで班を担当した。参加者の学生評価は「学生からカードを受け取る人と、避難所全体を見通して配置を指示するリーダーを決めてから、やり易くなった」「落ち着いてできていた」と良い評価だった。1 度 HUG を経験した参加者には、「学生のように、職場でファシリテーターになって実践してもらいたい」と伝えた。

活動成果の公表

1. 2018 年 3 月 15 日 (木) 平成 29 年度中部大学 COC 最終活動報告会にてポスター発表
2. 2018 年度 日本災害看護学会第 20 回年次大会 (神戸) にて発表
3. 2018 年度 日本協同教育学会第 15 回大会 (大阪) にて発表

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	ニシガキ ケイタ 西垣 景太	所属・職名	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科・講師		
活動課題	春日井市の運動実施率向上を目指した学生達の取り組み				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ニシガキ ケイタ 西垣 景太	代表者	スポーツ保健医療 学科・講師	スポーツ心理学	博士 (心理学)	学生指導、教室の 開催や指導
サカイ トシロウ 酒井 俊郎	分担者	スポーツ保健医療 学科・教授	発育発達	博士 (学術)	学生指導、
活動経過と成果					
<p>本活動は、スポーツ庁が掲げている第2期スポーツ基本計画の中の、「する」「みる」「ささえる」のスポーツ参画人口の拡大について、活動を行ったものである。具体的には、スポーツ実施率を42%から65%への引き上げ、学校施設のオープンスペースの有効活用などが挙げられている。</p> <p>本課題の目的は、春日井市内在住ならびに在勤者の運動実施率の向上をめざし、教員と学生が企画、運営し運動の機会を構築することによって、大学の地域貢献活動の1つとすることであった。</p> <p>1. 春日井市での運動実施率向上への取り組み実践①</p> <p>春学期、秋学期それぞれで、中部大学在勤の教職員を対象とした週1回90分の運動教室を開催した。春は全10回で参加申込者が20名、秋は全11回で参加申込者が24名であった。仕事や家庭の都合によって、短時間の参加の方なども見られたが、教室前の運動実施率がほとんどなかった方達が、仕事帰りに運動を行って帰るといった機会を作ることができている。</p> <p>また、指導に参加した11名の学生達は、教員指導のもと安全で楽しめる運動内容を計画し、参加者の方への指導も行って来た。今まで自分達が経験してきたようなスポーツとは異なり、健康のための運動とは何か、配慮すべき点は何かということ、実体験を通してさらに学び、正課内の学びの重要性を再認識する機会にもなっている。</p> <p>2. 春日井市での運動実施率向上への取り組み実践②</p> <p>中部大学のエクステンションセンター主催のジュニアセミナーで、春日井市在住の子ども達を中心とした運動教室を開催した。週1回の教室を全3回と少ない回数ではあるが、20名の低学年の子ども達に色々な運動遊びを体験してもらった。保護者達も実施場所の横で見学し、普段運動している様子を見ていない保護者の方や運動に関心のなかった保護者にも、運動のコツなどを資料で紹介し、家庭でもできる運動遊びなどを見てもらった。参加者の感想でも、家庭でもできそうという意見が多く、家族での運動実施率向上につながっていくことが期待できる活動となった。</p> <p>12名の学生達が、発達段階に応じた運動指導のプログラムを検討し、指導の補助を行った。小学生と接しながら、こども達と楽しそうに体を動かしていた。</p>					

3. 春日井市での運動実施率向上への取り組み実践③

毎年1月に開催されている新春春日井マラソンには、約9,000の方が参加している。以前まで救護班の設置なく開催されていたが、2014年より主催者である春日井市スポーツ・ふれあい財団と連携し、AEDと救急バッグを持ったコース上での救護を行っている。学生達は事前に学内での救命講習を受講し、準備を行った。

今年度は春日井市の消防署、春日井市民病院所属の救急救命士の方にもボランティアで参加して頂き、現場での学生への直接の指示や対応を指導して頂くこともできた。また、大会運営についての課題抽出等をおこない、主催者側へ報告を行った。子どもから高齢者、家族と一緒に走るなど、毎年多くの方が参加されている春日井マラソンを、今後も安全・安心な大会として市民の方々にも多く参加して頂けるように、学生がサポートするこの活動を今後も継続できればと思う。

活動成果の公表

本活動を通しての成果は、各実践的な活動を通して、参加して頂いた方々の運動実施率向上の一助となることであり、大いに達成されたと考えられる。また、春日井市の方々に中部大学と運動の関わりについて知って頂く機会にもなっていることである。

学生達にとっての大きな成果は、正課外での体験から健康運動の実施率向上のためには、どのような知識が必要なのか、準備の大切さからコミュニケーションに関することまで、正課内で学んでいることの重要性を再認識したことである。なお、本活動課題を通して、中部大学の認定資格である『地域創成メディエーター』の資格取得を目指す学生3名を輩出した。活動を通して、動くことと学ぶことのバランスや、それぞれの重要性を再認識し、資格取得を目指した。3名共に3年生であり、就職活動が始まるというこの機会に、卒業後のキャリア支援としても大きな価値のある活動であったと考えられる。なお、これらの活動の一部は、大学HPのFacebookなどでも公表している。

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	センダ タカヒロ 千田 隆弘	所属・職名	現代教育学部幼児教育学科・講師		
活動課題	進学地域を第二の故郷とし子育てを課題とする学生の育成				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
センダタカヒロ 千田 隆弘	代表者	幼児教育学科・講師	幼児教育・保育環境	修士	
活動経過と成果					
<p>目的・内容</p> <p>地域社会の未来を担うのは、子どもである。この地域への関わりは、子どもに影響を与える。そして、その子どもによっていずれ地域は構成されていく。子育ては循環する。</p> <p>子どもたちの処遇は、大人たちに委ねられるが、その処遇についての質を問うとき、そこには子どもとは何か、子育てとは何かといった概念形成を無くしては語れない。本教育研究活動の目的は、そこにある。数年以内に地域の教育や保育を担う社会人となる学生に、子どもや子育てについての概念形成をすることである。これは、座学では済ませられない。子どもはどのような表情で歓声を上げるのか、子育ての喜びとは何か、肌で学ばなくてはならない。昔あった地域の異年齢者同士が関わるといった光景を、意図的に構成しなくてはならない時代である。</p> <p>また、本学に通学の理由のみで来る学生は、大学を含む「地域」を意識しているのだろうか。本活動代表者の私は、学生時代、地元以外の福祉施設でボランティア活動を行っていた。地元では授業が無い日に乳幼児に関わる同様のボランティア活動の機会ができなかったからである。最初は、福祉活動そのものが目的であったが、自然と活動施設周辺にも出向く機会が多くなり、今ではその場が第二の故郷と感じている。そして、その地域への貢献活動は現在も続いている。この経験も活かし、指導にあたった。</p> <p>当初予定していた内容は、次の通りである。</p> <p>①実施する教育研究活動</p> <p>地域の幼稚園や保育所、子育て支援施設で子どもの姿を観察したり、遊びの場面に参与したり、プログラム活動を展開するなどして、子ども、幼稚園や保育所の先生、保護者の方々と関わる。可能であれば、地域の公民館やふれあいセンター、文化施設、スポーツ施設、公園といった、公の施設でも活動する。</p> <p>②学ばせようとする事</p> <p>第一に、学生が、地域の幼稚園や保育所、子育て支援施設といった、子どもの生活や遊びの場へ赴き、現代の子育ての状況を肌で学ぶことである。第二に、子どもや子育てについての概念を再構築することである。どのような大人に育ってほしいかという地域のニーズはどこにあるのかを学ぶことである。第三に、地域でプログラム活動を行う上で、事前にプロの活動を観て、その計画性や展開の技術等を学ぶことである。</p> <p>活動経過(活動計画・方法含む)</p> <p>複数名のグループで、複数回の活動を計画・実践する。希望者が2年生28名、1年生2名、計30名と、昨年度の2年生のみ13名を上回る人数と学年で始まった。2~4名のチームに分かれ、2回ずつ延べ19回の活動とすることになった。その際、1年生は2年生と組むように、学生の判断でチームが作られた。途中、諸々の事情で辞退者が出たため、資格取得者は18名に留まった。</p> <p>活動の基本的な流れは、次の通りである。</p> <p>①PLAN(計画)…学内で、関連書籍を活用して教材研究を行い、計画を立案し、教材製作を行う。</p> <p>②DO(実践)…地域の保育所等で、プログラム活動を実践する。</p> <p>③CHECK(反省)…実践した保育所の保育士より意見を頂く。</p> <p>④ACTION(改善)…今後の活動に向けて、学生同士で課題を整理し、教材改善を行う。</p> <p>このPDCAサイクルによる反省と改善を行うため、最低2回の活動を行った。</p>					

成果

上記の「目的・内容」で述べた活動を繰り返し行うことにより、春日井市を進学の間としてだけでなく、第二の故郷と感じるような愛着の形成が期待できる。そして、将来的に春日井市に貢献し続けたいという気持ちが学生の中に芽生え、「あてになる人間」が育成されることが予想される。ただし、2回の実践だったためか、この成果を発表で伝えた学生は、18名中12名に留まった。

学生自身が、学生発表会やその後に行った意識調査（本活動で良かったことや今後役に立てたいこと等）で成果として挙げていた内容を次の3カテゴリーにまとめた。

①子どもの理解

- ・地域の保育園を訪れて子どもと触れ合うことができ、子どもの反応を直に感じられ、子どもの理解が進んだこと。 ・こちらの理想で関わってはならないこと。
- ・子どもの反応も一通りではないし臨機応変に対応する力を養うためにも子どもと多く関わる機会をもって、学んだことを次に活かしていきたいと思えたこと。
- ・子どもの年齢に合わせて保育をするには、子ども理解ができていないといけないうこと。

②保育者の理解

- ・子ども自らが「やってみたい！」と思えるような展開や交流が大切であること。
- ・「保育には演じる力が必要」であること。保育者が実際に遊んでいる姿を見せたり、役になりきる必要があること。
- ・企画をグループで考えて実践するという経験を積むことができたこと。
- ・今後もグループでの活動が多くあると思うので、その際に役に立てられること。
- ・安全面や、自分からやろうとする意欲について企画を考える際に配慮すべきこと。
- ・話し方ひとつで子どもたちの反応は全く異なること。
- ・見本を見せることやジェスチャーをすることでより集中して話を聞くこと。
- ・コミュニケーション能力と計画力が大切だと学んだこと。相談が重要であること。
- ・実践には日々の積み重ねが大切であること。友達と共に復習したい。
- ・体調管理が重要であること。 ・自分の意見を言えるようになったこと。
- ・専門の視点で物事を考えるようになったこと。 ・今は経験が不足していること。

③保育環境・地域環境の理解

- ・製作する物の用途や耐久性等を考慮しながら材料を選んでいくことが重要であること。
- ・地域の保育所があったから活動できたこと。感謝することを忘れてはならないこと。
- ・保育士は地域と関わりが大切だと理解していたものの、どのようにしているのかはわかかなかったが、今回具体的に学べたこと。 ・教材研究で、素材に特性や相性があること。

今後の課題

今回の学生による地域での活動回数は、2回に留まった。回数を重ねることで、さらに地域を身近に感じる事が推察されること、また、活動内容も改善されることが予測できる。次年度以降、どのように本活動を継続していくことが、今後の課題である。

さらに、活動場所が一つの保育所に集中したため、今後は活動場所を拡大すること。また、活動内容も劇発表が中心となっていたため、内容の拡充も図りたい。

辞退者が12名（40%）も出たことも課題である。個々の事情に対するケアにも努めなくてはならない。

活動成果の公表

2018年2月7日 中部大学 文部科学省「地（知）の拠点整備事業」選定取組（大学COC事業）

第4回地域創成メディアーター学生発表会【プラス・エクスペリション】（以下18名）

- | | | |
|----|--------|---------------------------|
| 2年 | ・内田 恵美 | 今日までの成長とこれからのについて |
| | ・勝股 拓海 | 子どもとの関わりを通しての成長 |
| | ・加藤 瑞稀 | 成長できた自分 |
| | ・加茂 果純 | 地域の保育での活動を通して |
| | ・木股明日香 | 活動を通して学んだこと |
| | ・島屋 彩香 | 地域と連携できる保育者になるために |
| | ・世古 美鈴 | 地域と連携できる保育者を目指して |
| | ・田代 麻緒 | 地域と連携ができる保育者を目指して |
| | ・塚崎 紘望 | 保育活動を通しての私の成長 |
| | ・林 茜里 | さまざまな活動から学んだこと |
| | ・本庄谷晴海 | 地域の保育所に行ってPDCAを実践する |
| | ・三宅 舞香 | 地域創成メディアーター～活動から学んだこと～ |
| | ・宮崎 若菜 | 地域創成メディアーター～子どもとの関わりを通して～ |
| | ・武藤 衣里 | 地域の子どもの関わり |
| | ・山領紗和子 | へびになって地域の子どもの |
| | ・與語 愛永 | 保育所での実践から学んだこと |
| 1年 | ・野崎 雅弥 | 子どもの健康は朝ごはんから |
| | ・水野 歩実 | 地域の子どもたちと物語 |

2018年春 「活動報告書」発行予定

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	②報酬型インターンシップ（就業体験）				
フリガナ氏名	タケダ アキラ 武田 明	所属・職名	生命健康科学部臨床工学科・教授		
活動課題	医療系学生の報酬型インターンシップ制度の発展				
活動組織 (分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
タケダ アキラ 武田 明	代表者	臨床工学科・准教授	医用工学	博士	企画・運営責任者
ヨダマ ヤスシ 児玉 泰	分担者	臨床工学科・准教授	体外循環技術、生体計測	修士	学生との連絡窓口・運営
フクタ シンゴ 福田 信吾	分担者	臨床工学科・講師	血液浄化	準学士	学生との連絡窓口・運営
ツシマ アキラ 對馬 明	分担者	理学療法学科・教授	理学療法学	博士	企画・運営
ヤザワ ヒロナリ 矢澤 浩成	分担者	理学療法学科・講師	運動学、理学療法評価学	修士	学生との連絡窓口・運営
フクタ ミネコ 福田 峰子	分担者	保健看護学科・准教授	老年看護学	修士	学生との連絡窓口・運営
ハセガワ リュウイチ 長谷川 龍一	分担者	作業療法学科・教授	作業療法学、健康支援学	博士	学生との連絡窓口・運営
ヨシマ カズエ 小嶋 和恵	分担者	臨床工学科・助手	血液浄化	学士	学生との連絡窓口・運営
活動経過と成果					
<p>昨年度の活動を継続し内容を充実させ、長期的な報酬型インターンシップ（就業体験）を希望する学生に対して、紹介を行ない学生や病院の窓口となった。また、学生の希望する地域（居住区域）にも、報酬型インターンシップ先を増やしより学生生活に密着した報酬型インターンシップを目指した。結果、報酬型インターンシップへは、28年度は、臨床工学科4名、理学療法学科14名、作業療法学科1名の参加学生であった。また、臨床工学科では2名の地域創成メディエーター資格を取得した。29年度は、臨床工学科9名、理学療法学科19名、作業療法学科2名の参加学生であった。また、臨床工学科では2名の地域創成メディエーター資格を取得した。引き続き、地域志向の教育研究活動の実践として、生命健康科学部の学生に、病院やクリニックおよび医療機器メーカーや薬局などで就労する機会を提供し、職種の業務や、病院で働くことの魅力および病院のシステムなどを学び、「気づき」を体験させ、自分を知る機会にする。また、病院で働く人たちの「志」に触れさせ、働くことに対するモチベーションの向上をめざす。また、社会へと飛び立っていけるような精神的な礎を築き、就業前の就職先の選択肢を広げることなどを目指す。また、春日井市域の病院やクリニックは、報酬型インターンシップを実施することにより、スタッフ募集の広告費を使わずに、医療の勉強をしている質の高い学生の労働力を活用できるメリットがある。このように、学生と医療現場の双方にメリットがある体制を構築し、春日井市の活性化に貢献していきたい。</p>					
活動成果の公表					
地域創成メディエーター学生発表会にて公表した。					

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	ユクモト マサオ 行本 正雄	所属・職名	工学部 機械工学科 教授		
活動課題	春日井市における廃食油回収と BDF 製造・利用の地域循環システムの構築				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ユクモト マサオ 行本 正雄	代表者	機械工学科・教授	熱工学	博士(工学)	取りまとめ
ナミオカトモアキ 波岡 知昭	分担者	機械工学科・准教授	燃料化学	博士(工学)	BDF 製造と分析
タケジマ キヨシ 竹島 喜芳	分担者	国際 GIS センター・准教授	地球システム学	修士(農学)	GIS 解析
活動経過と成果					
<p>1. 春日井市の廃食油回収</p> <ul style="list-style-type: none"> ・廃食油回収の現状調査 昨年度からの調査により、味美ふれあいセンター地域での回収率が最も高く、市民の環境意識も高いことが判明している。春日井市役所職員や市議会議員、市民の方から味美ふれあいセンター付近の特徴についてお話を伺った。その結果、地域独自の催しが定期的に行われており、地域住民の結びつきが強く、廃食油回収に関して認知度が高かった。 <p>2. BDF の利用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小型ディーゼル発電機への利用 小型ディーゼル発電機の燃料として、本研究により精製された BDF を使用し、燃焼実験を行い、排気ガスを測定した。正常運転を確認し、燃費と排気ガスの PM と CO 濃度を昨年度と比較し遜色ない結果を得た。 					
活動成果の公表					
<ul style="list-style-type: none"> ・2017年7月12日(水)の第27回環境工学総合シンポジウム2017にて、BDF と BDF の混合燃料を用いた小型発電機実験と題し、口頭発表を行った。 ・2017年8月2日(水)の第26回日本エネルギー学会大会にて、BDF と BDF の混合燃料を用いた小型発電機実験と題し、ポスター発表を行った。 ・2017年8月9日(水)~10日(木)の中部大学オープンキャンパスにて、「使用済み燃料が燃料に変わるまで!」というテーマで来場者に春日井市との取り組みを紹介した。 ・2018年2月6日(火)の平成29年度大学院工学研究科創造エネルギー理工学専攻修士論文公聴会にて、廃食油及び廃プラスチックを原料とする燃料化技術と題し、発表を行った。 ・<i>Journal of the Japan Institute of Energy</i>にて「Scale-up and Energy Consumption of Bubble Stripper for Residual Methanol Removal from Crude Biodiesel Fuel」と題した論文が掲載された。(96巻, p. 430-435) 					

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	タケダ マコト 武田 誠	所属・職名	工学部都市建設工学科・教授		
活動課題	春日井市における内水氾濫の理解とその地域住民への広報活動				
活動組織					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
タケダ マコト 武田 誠	代表者	工学部・都市建設工学科	水工学	博士（工学）	解析ツールの開発、現地調査の実施、学生指導、研究のとりまとめ
活動経過と成果					
<p>春日井市の地蔵川流域では、平成23年9月台風15号の豪雨の影響により浸水被害が生じた。このような浸水対策を検討するためには、下水道の影響を考慮した浸水解析ツールが有効である。また、下水道整備などのハード対策や避難などのソフト対策の実施には、住民の理解が不可欠である。本研究では、都市浸水のモデリング（現地観測）や、浸水対策の検討に有用な内水氾濫解析モデルおよび雨水の移動の可視化技術の開発を行った。さらに、浸水に関する住民理解の促進のために、都市氾濫模型を活用し広報活動を行った。本研究に参加した学生は、春日井市の水害の特徴や対策を学んだ。オープンキャンパス、大学祭などにおける都市氾濫模型を活用した学生の広報活動により、地域住民の浸水に関する理解と参加学生の地域志向の学びが深まった。</p> <p>本研究活動は、平成27年度～平成29年度に行われた。平成27年度は、春日井市の内水氾濫を対象とした解析ツールを構築し、平成23年の豪雨災害の再現計算を行い、モデルの精度を検証した。平成28年度は、雨水の移動の可視化技術を開発し、河川から下水道への逆流の見える化など、都市浸水を深く考察することができた。平成29年度は、都市浸水のモニタリングを行い、春日井市における豪雨による浸水現象を、現地観測データを用いて深く考察することができた。さらに、観測結果と解析結果の比較により、解析モデルの精度検証を行うことができた。このように、学術の面からも、この3年間の成果が得られている。</p> <p>また、これらの研究を実施した学生は、春日井市の都市浸水に関する理解を深め、多くの学会で成果発表を行っている。さらに、大学祭、中部大学フェア、建設技術フェア（主催、国土交通省中部地方整備局・名古屋国際見本市委員会）を活用し、得られた都市浸水の理解を広報し住民の理解の深化のための学生発表を行った。特に、平成28年度からは、大学祭において、地域住民に対する「都市氾濫模型」を用いた学生プレゼンテーションを実施した。さらに、これらの活動を通じて、地域創成メディアータも育成できた。</p> <p>本研究は、春日井市を対象とした都市浸水の研究を進め、それらを学生が理解して、学生が地域に向かって情報発信することで、地域に還元する「地域志向型の学び」を目的とした。参加した学生も積極的に活動し、地域住民の意見から刺激を受けるなど、良い学びができたと思う。</p>					

平成 27 年度～平成 29 年度の学生が参加した活動をまとめれば、以下のとおりである。

中部大学フェア：都市水害のシミュレーション技術の開発

（平成 27 年度の参加学生 2 名）

（平成 28 年度の参加学生 2 名）

（平成 29 年度の参加学生 2 名）

中部大学大学祭：研究発表展「水素と酸素の結合物による様々な実験・体験」

（平成 27 年度の参加学生 10 名）

（平成 28 年度の参加学生 13 名、内地域創成メディエータ資格取得 2 名）

（平成 29 年度の参加学生 12 名、内地域創成メディエータ資格取得 3 名）

建設技術フェア in 中部（主催、国土交通省中部地方整備局・名古屋国際見本市委員会）

中部大学都市水工研究室：都市の水防災に関する解析技術と防災教育

（平成 29 年度の参加学生 9 名）

活動成果の公表

平成 27 年度～平成 29 年度では、土木学会中部支部研究発表会（2 編）、土木学会全国大会（1 編）、土木学会水工学講演会（2 編）の研究発表を行った。また、APD-IAHR（国際水圏環境工学会アジア・環太平洋部会）（1 編）の国際会議でも発表を行った。現在、平成 29 年度の成果をまとめ、平成 30 年 3 月の水工学講演会に 1 編の研究発表を予定している。

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	トヨダ ヨウイチ 豊田 洋一	所属・職名	工学部建築学科・教授		
活動課題	地域や人から学ぶ建築をつくるための実践的学習				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
トヨダ ヨウイチ 豊田 洋一	代表者	工学部建築学科 教授	建築計画	工学修士	全体
活動経過と成果					
活動は下記の2つの内容から構成される。 ① 高蔵寺ニュータウンの新たなまちづくりの手法提案 高蔵寺ニュータウンのセンター地区(バスターミナル、歩行者空間、商業施設)、高齢者、集合住宅の空家について卒業研究の課題として取り上げ、その再生提案を検討する。提案は最終的に手直しをして展示・発表を行い、関係者等の意見を聴取し、再検討する。 ② まちづくり活動への参加・支援 ・高蔵寺ニュータウン押沢台北町内会が行う「ブラブラまつり」(10月14日)への参加・協力 地域創成メディアーターの「動く」の活動、ボランティア・NPOセンターの活動 ・高蔵寺ニュータウン押沢台を紹介するガイドブック「押なび」編集・発行への協力					
活動成果の公表					
各活動は下記のように公表された ① については下記5編の卒業研究としてまとめられた。 ・「高蔵寺ニュータウンセンター地区におけるバスターミナル案の計画」 ・「高蔵寺ニュータウン ペDESTリアンデッキの調査・提案」 ・「高蔵寺ニュータウンにおけるセンター地区への集客のための提案」 ・「空き家対策の研究 高蔵寺ニュータウンの再生」 ・「地域住民の居場所作りの研究 コーヒーサロンの実施」 ② については表彰及び下記メディアに取り上げられた ・「ブラブラまつり」は「まちなみコンクール」(住宅生産振興財団等主催)にて国土交通大臣賞を受賞 ・中日新聞 「ブラブラまつり 国土交通大臣賞」(平成30年1月26日) ・春日井ケーブルテレビ「押沢台北ブラブラまつり」(平成29年10月) ・中日新聞 「押なび」完成(2月)について記事が掲載予定					

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ 氏名	ヨコエ アヤ 横江 彩	所属・職名	工学部建築学科・助教		
活動課題	環境に配慮し、地域に開かれた高齢者福祉施設の提案				
活動組織	(分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員)、協力者はそれ以外。)				
フリガナ 氏名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ヨコエ アヤ 横江 彩	代表者	建築学科・助教	環境工学	博士 (工学)	
活動経過と成果					
<p>日本は超高齢化社会であり、高齢者施設の需要も大きい。今回の活動では、「環境に配慮し、地域に開かれた高齢者福祉施設の提案」と題し、①温熱環境、②臭気環境、③省エネルギー、の3つに対して「学ぶ」および「動く」の活動を行った。</p> <p>①に対しては、春日井市にある特別養護老人ホームや介護老人保健施設、対照群として、自宅あるいは学生の祖父母宅に温湿度ロガーを設置し、特に冬期の温度差に着目し、温度差から生じるヒートショック等を考えながら適切な温熱環境について探った。これは「動く」活動であり、データを得るために自ら計測ポイントを決定し、また得られたデータを加工して見える化することにより、現状を踏まえ、今後どうしていったらよいのかを考える機会となった。</p> <p>②については、大同大学 情報学部総合情報学科かおりデザイン専攻 光田恵先生に來学いただき、「生活環境のにおい・かおり」というタイトルの元、嗅覚の特性(嗅覚テスト含む)、生活の中でのにおいの種類、建物内外のにおいの基準、対策の考え方、対策事例と効果、においの測定・評価法(量・質の測定・評価)、ヒトのにおい感覚とは、といった内容についてご講演いただいた。この中で、高齢者施設での臭気問題についても触れていただき、その対策方法等についても示唆いただき、学生が考えるヒントを多く教えていただく機会となった。</p>					

③については、大規模建築物の省エネルギーを考える上で、地域冷暖房システムについて学んでもらうこととした。地域冷暖房システムとは、一定地域内の建物群に熱供給設備(地域冷暖房プラント)から、冷水・温水・蒸気などの熱媒を、地域導管を通して供給し、冷房・暖房・給湯などを行うシステムのことである。省エネルギー効果として、まず未利用エネルギーの活用による省エネルギー効果が考えられる。次に、高効率システムの採用による省エネルギー効果、が考えられる。最後に高度な運転技術による省エネルギーと安定供給の実現、が考えられる。これらの省エネルギー効果を念頭に、実際にDHC名古屋(株)名駅東地区地域冷暖房を見学し学びに行った。中部地区の表玄関、名古屋駅前に相応しい快適で災害に強い空間を維持するとともに、環境性および省エネルギー性、そして安価なエネルギー供給を継続する先進事例を目の当たりにし、省エネルギーについて深く考えるきっかけとなった。

以上、「学ぶ」および「動く」活動を通して①温熱環境、②臭気環境、③省エネルギー、の3つについて深く知識を得ながら活動することにより、今後の超高齢化社会で増え続ける高齢者福祉施設について、今後どのような施設があるべきか、建築的な視点から考えることができるようになったと考える。今後、学生が社会で活躍するときに、この活動を通じて得たものを活かしていってもらえると考えている。

活動成果の公表

特になし

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	オバナ タカシ 尾鼻 崇	所属・職名	人文学部 コミュニケーション学科・専任講師		
活動課題	春日井市における音環境のフィールドレコーディングとメディアデザイン教育のための実践的活動				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
オバナ タカシ 尾鼻 崇	代表者	コミュニケーション学科・専任講師	ゲームスタディーズ、デジタル・ヒューマニティーズ	博士 (学術)	研究代表者
活動経過と成果					
<p>本年度の教育研究活動は、前年度に実施した「春日井地域の音風景調査とサウンドデザインに関する教育研究」の発展的活動として行った。春日井市は近年、JR 勝川・春日井駅を中心に集中的に集合住宅が開発され、環境の変化が著しくなっている。そこで本教育研究活動では、春日井駅・勝川駅・高蔵寺駅周辺を対象としたサウンドスケープ・プロジェクトを組織し、フィールドレコーディングやサウンドマップ制作、そしてサウンドスケープデザインを実施することで、地域の課題発見やまちづくりを実践的に行った。</p> <p>加えて、本活動は、上記を実践的に行うことで、地域との「共育」による主体的かつ行動力に富んだ人材育成を目指すものであり、聴覚による認識の重要性に気づかせるための実践的教育研究でもある。本プロジェクトの活動を通じて、バリアフリーの概念を学び、地域の音環境の整備に貢献することで、プロジェクト参加学生を含む9名が「地域創成メディエーター」の資格を授与された。活動経過は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2017年8月8日 活動ミーティングおよび勉強会。(大学内)(尾鼻対応)【参加学生10名】 ・2017年8月18日 サウンドスケープ調査。(大学内)(尾鼻対応)【参加学生5名】 ・2017年9月7日 サウンドスケープ調査。(高蔵寺ニュータウン周辺)(尾鼻対応)【参加学生5名】 ・2017年9月8日 サウンドスケープ調査。(高蔵寺ニュータウン)(尾鼻対応)【参加学生6名】 ・2017年10月17日 活動ミーティングおよび勉強会。(大学内)(尾鼻対応)【参加学生10名】 ・2017年10月18日 サウンドスケープ調査。(大学内)(尾鼻対応)【参加学生6名】 ・2017年10月19日 サウンドスケープ調査。(大学内)(尾鼻対応)【参加学生5名】 ・2017年11月8日 音情報バリアフリー調査。(大学内)(尾鼻対応)【参加学生8名】 ・2017年11月27日 活動ミーティングおよび勉強会。(大学内)(尾鼻対応)【参加学生10名】 					
活動成果の公表					
<p>本研究課題の活動成果の公表については、2018年8月に行われる日本デジタルゲーム学会2017年度夏季研究大会において、その全容を報告する。また、本プロジェクトが作成した音環境ムービーは、権利関係の範囲内でウェブ上にて公開し、また「中部大学サウンドスケープCD」を広く配布する予定である。</p> <p>さらに2018年度発行予定の『中部大学教育研究』に本プロジェクトの成果を踏まえた研究論文を投稿する。また、本研究プロジェクトに関わった学部生9名は、地域創成メディエーターの資格を授与されるという形で、本研究課題の成果の公表に貢献した。</p>					

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	ミヤタ シゲル 宮田 茂	所属・職名	応用生物学部 食品栄養科学科・准教授		
活動課題	地域住民の健康増進を目指した実践的食育活動				
活動組織	(分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)				
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ミヤタ シゲル 宮田 茂	代表者	食品栄養科学科・准教授	微生物学	博士(医学) 博士(農学)	教育研究の総括、学生教育活動の企画・運営
ヤノ テナミ 矢野 智奈美	分担者	食品栄養科学科・助手	生化学	学士(食物栄養学) 管理栄養士	学生教育活動の運営
活動経過と成果	<p>【目的】 年齢に関係なく、食と健康には密接な関わりがあるが、実際には何らかの疾病を発症するまで、食に関して科学的に考えることはあまりない。そこで、春日井市を含む地域住民に対して実際に啓発活動を行い、活動を通じて食に対する心構えや栄養に関する専門知識、伝統的な食文化、安全管理等総合的な知識を有し活用できる人材の育成を目指した。さらに、単なる料理教育ではなく、地域住民一人一人が生涯を通じた健全な食生活の実現と健康の確保等が図れるように、自らの食について考える習慣や食に関する様々な知識と食を選択する判断力を楽しく身に付けさせるための啓発を行うことができる人材の育成を目指した。そのために通常の教育課程では実施できない以下の活動を行った。</p> <p>【活動内容】 すべての活動は学部学生が主体となり、それを大学院生や教員がサポートした(学部学生5名、大学院生3名)。栄養学や食文化、食品衛生等については、関連講義で学習したが、啓発活動を行ううえで、不足する専門知識や手技を主体的に学ばせ、それらを有機的に関連付けることで、相手の理解度に応じた説得力のあるコミュニケーション能力を獲得させた。</p> <p>(1) オープンキャンパス オープンキャンパスにて別ブースを設け、食品サンプルを展示し、主に高校生に対してそれらの食品に含まれる栄養成分や機能成分について解説した。また、食育に関する意識の向上をはかるため、それらの食品サンプルから普段の食事や理想とする食事をお盆にとってもらい、SAT システムを用いて食事バランスについて栄養指導を行った。健康救急フェスティバルのプレイベントとしての位置づけで始めての活動だったが、対象者の年齢が近いこともあり、率直な意見をもらうことができ、改善点を見出すことができた。</p>				

(2) 健康救急フェスティバル

健康救急フェスティバルでは、下記に示した2つの活動を行った。

① あなたの食事をチェックしてみよう！

地域住民に展示した食品サンプルから普段の食事や理想とする食事のメニューを選んでもらい、SATシステムを用いて食事バランスについて栄養指導を行った。主な対象者は小学生とその両親、祖父母と幅広い年齢層で、聴覚障害者に対しても手話通訳を通じて活動を行った。さらに、それらの食品に含まれる栄養成分や機能性成分について、相手にあわせて適時解説を加えることにより地域住民の興味を惹起した。(地域住民の参加者数 135人)

②善玉菌と悪玉菌をのぞいてみよう！

純粋培養した細菌及び3種類の乳酸菌飲料やヨーグルト内の細菌を地域住民に顕微鏡を用いて観察させ、所謂「善玉菌」と「悪玉菌」の違いについて解説した。細菌は、不活化した食中毒菌である大腸菌と黄色ブドウ球菌、今年度注目を浴びたウェルシュ菌を供試した。また、健康づくりに役立ててもらうために、それぞれの細菌が引き起こす食中毒の症状や予防の注意点等を説明し、乳酸菌の性質や一般的なプロバイオティクスとプレバイオティクスについて解説した。(地域住民の参加者数 228人)

【成果】

(1) 学部学生が主体となり調査研究を行うことで、学習意欲の向上に寄与した。また、大学院生が学部生の研究指導を行うことで、大学院生の資質向上にも寄与した。幅広い年齢層の春日井市民にわかりやすく説明することを通じ、知識の向上の必要性を痛感させ、コミュニケーション能力の養成につながった。

(2) 栄養指導に関しては SAT システムのような小道具の有効性や事前準備の必要性を考えさせることができた。目に見え直接手に取ることができる食品サンプルを用いた栄養指導が、老若男女に効果的であり、特に聴覚障害者にも有効であることを実感させることができた。

(3) 多人数に対して個別に対応する場合のスルーブットの向上に欠かせない技術を習得させた。

これらの活動の結果、地域創成メディエーター資格を1人が取得した。

活動成果の公表

2017年8月10日	オープンキャンパスにて高校生に対して学習内容を実践した。
2017年9月3日	春日井市2017健康救急フェスティバルにてブースを設置し春日井市民に対して学習内容を発表・実践した。
2017年12月19日	学内にて中間報告会を行った。
2018年2月7日	第4回 地域創成メディエーター学生発表会にてポスター発表を行った。
2018年3月15日(予定)	総括として最終報告会を行う予定である。

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay (LHS)				
フリガナ氏名	ナガシマ マユミ 長島 万弓	所属・職名	応用生物学部 食品栄養科学科・教授		
活動課題	世代間交流会における栄養教育実践と継続支援の効果について				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ナガシマ マユミ 長島 万弓	代表者	応用生物学部食品栄養科学科・教授	栄養教育学	博士(生活科学)	世代間交流会企画・運営・学生指導・研究活動総括
トダ カオル 戸田 香	分担者	生命健康科学部理学療法学科・教授	内部障害理学療法	博士(医学)	地域高齢者の窓口・世代間交流会の運営
活動経過と成果					
<p><活動経過></p> <p>6月実施の世代間交流会およびLHV活動で交流を持った参加者から希望者を募り、研究への説明に対して同意の得られた62歳～81歳の男性2名と女性3名の計5名を対象者として研究を行った。対象者には機能性食材としてのゴマを野菜ジュースと共に継続的に1か月間摂取していただいた。昨年度の反省からゴマ摂取前の食事調査も行うこととし、前3日分とゴマ摂取中3日分と終了後の3日分の計9日間の食事調査を依頼した。血圧測定、体重測定、抗酸化力テスト、酸化ストレス度テストおよび食事調査の聞き取りを含む面談を、ゴマ摂取前、摂取終了時、摂取終了1か月後の3回実施し、これらの栄養教育実践と継続支援が対象者にどのような効果をもたらすかを調査するとともに、調査にたずさわる学生の教育効果について検討した。シニアとの交流と主な栄養教育実践を①～⑪に示す。</p> <p>①4月～6月 世代間交流会の準備(栄養教育指導案、教育媒体作成、交流会調理実習の試作等)</p> <p>②6月10日 世代間交流会当日 ～挑戦!ゴマで減塩～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゴマの栄養素・抗酸化能など効能の説明 ・調理実習 ゴマ餃子 ・ゴマ餃子を用いた官能検査 ・ゴマ入りパンの試食 ・塩分と高血圧に関する栄養教育 ・研究に関する説明と同意書回収 <p>③8月2日 LHV お見合い交流会への出席(ゼミ生5名)</p> <p>④8月～9月 LHV (3回訪問した学生1名、2回訪問した学生2名、1回訪問した学生1人ずつ2名)</p> <p>⑤11月1日 LHV 報告会</p>					

⑥10月10,11日 継続支援研究開始 第1回目面談

- 対象者・・・世代間交流会に参加して下さった12名のシニアのうち4名と
LHVで訪れたシニア4名のうちの1名 計5名から研究への同意を得ることができた
- ・研究の内容および今後の流れについて説明
 - ・アンケート調査
 - ・食事記録票の説明と配付
 - ・食事記録の写真撮影に関する確認（データ送信の可否等）

⑦10月24,25日 第2回目面談

- ・体重測定、血圧測定、抗酸化力・酸化ストレス度測定、アンケート調査等
- ・食事記録票（ゴマ摂取前3日分）の確認
- ・摂取用ゴマ（1日10g、1か月分）と野菜ジュースの提供
- ・次回面談時までにしていただくことの説明

⑧11月21,24,25,28日 第3回目面談

- ・体重測定、血圧測定、抗酸化力・酸化ストレス度測定、アンケート調査等
- ・食事記録票（ゴマ摂取中3日分）の確認
- ・第2回面談時の食事調査結果の説明
- ・次回面談時までにしていただくことの説明

⑩12月20日 第4回目面談

- ・体重測定、血圧測定、抗酸化力・酸化ストレス度測定、アンケート調査等
- ・食事記録票（ゴマ摂取後3日分）の確認
- ・第3回面談時の食事調査結果の説明

⑪1月中旬 最終結果の通知およびアンケート調査の実施（郵送）

<成果>

5名の対象者は抗酸化能を有するゴマと野菜ジュースを1か月間継続的に摂取することで、抗酸化力の向上傾向が認められた。また食事調査に基づく学生からの継続支援により、食事内容に改善が見られる対象者もあった。栄養教育実践に取り組んだ学生は、栄養教育の企画、実施、評価を行い、卒業研究としてまとめることができた。そして継続支援の内容がすぐに効果を発揮できるものと出来ないものに気付き、特に減塩などはその時々食事内容に左右されるため、食生活改善の難しさを学ぶことができた。また対象者との面談は、管理栄養士としてのコミュニケーション技術の必要性を実感させ、特に高齢者とのコミュニケーションの注意点、声の大きさ、使用する言葉、話す速度などを気付かせるのに効果があった。

活動成果の公表

2018年10月27日（土）に開催される第33回日本ゴマ科学会大会において、今回の結果を含めてゴマを利用した栄養教育実践と継続支援について報告する予定である。また関連学会誌や紀要などに投稿できるようまとめる予定である。


平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への LearningHomeStay				
フリガナ氏名	オガタ ヒサヨシ 尾方 寿好	所属・職名	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科・准教授		
活動課題	中部大学機能別分団の活動によりもたらされる大学生への教育的効果の解明				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
オガタ ヒサヨシ 尾方 寿好	代表者	スポーツ保健医療学科・准教授	運動生理学、 地域防災	博士(教育学)	質問紙の作成、回収、データ処理
キタツジ ユウジ 北辻 耕司	分担者	スポーツ保健医療学科・助手	救急救命学	修士(救急救命学)	機能別分団活動の引率
オカムラ ユキコ 岡村 雪子	分担者	スポーツ保健医療学科・講師	公衆衛生看護学	修士(看護学)	質問紙の作成
フジマル イクヨ 藤丸 郁代	分担者	スポーツ保健医療学科・准教授	公衆衛生看護学	修士(看護学)	質問紙の作成
活動経過と成果					
<p>中部大学機能別分団は、地域での防災訓練における指導や補助、避難所体験等の実務研修、出初式等の防災活動を実施した。機能別分団に所属する学生による自己評価では、活動を通して「地域貢献について考えるようになった」「防災意識が高まった」「地域住民の役に立つことができると感じるようになった」「勉学への積極性が高まった」「働くことや就職に関心を持つようになった」との回答が得られた。また、機能別分団担当の消防職員からは、「防火・防災の知識、救命技術を習得することができ、次世代の防災の担い手として成長し、地域社会から期待される存在に成長している。また、春日井市消防団をはじめ、地域防災組織の活性化に大きく貢献した。」と評価されている。以上から、消防団活動によって、大学生は地域からあてにされる存在として成長し、自身の目標の実現に向けた高い向上心が養われることが考えられた。</p>					
活動成果の公表					
特になし。					

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay(LHS)				
フリガナ氏名	ノダ アキコ 野田 明子	所属・職名	臨床検査技術教育・実習センター・教授		
活動課題	多職種連携による認知症予防のための睡眠・血圧管理に関する教育				
活動組織	(分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)				
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ノダ アキコ 野田 明子	代表者	臨床検査技術教育実習センター・教授	循環病態学・睡眠医学	医学博士	研究総括、生活習慣指導、学生指導
ホリ フミコ 堀 文子	分担者	作業療法学科・准教授	基礎看護学	修士(看護学)	広報活動
ヤザワ ヒロナリ 矢澤 浩成	分担者	医療技術実習センター・講師	運動学・理学療法評価学	修士	運動指導
ナガシマ マユミ 長島 万弓	分担者	食品栄養科学科・教授	栄養教育学	博士(生活科学)	食事指導
トダ カオル 戸田 香	分担者	理学療法学科・教授	地域リハビリテーション学	医学博士	学生指導・広報活動
活動経過と成果					
<p>超高齢化社会において認知症は増加することが予想されている。睡眠不足・不眠・睡眠呼吸障害は心血管病の危険因子である。生活習慣病および認知症の予防に際し、従来、地域住民に食事・運動療法が実施されているが、睡眠不足・不眠はそれらの効果を抑制する。血圧管理において、家庭血圧測定の意義が高いことが明らかにされているが、高齢者の高血圧管理は未だ不十分である。食事・運動指導に加え、睡眠指導・血圧管理を地域在宅訪問で促進することは認知症の予防に貢献できると考えられる。本教育研究活動では、多職種連携による健康教室・在宅訪問を実施し、学生に対して、地域住民の疾病予防・健康増進へのアプローチを学ばせることを目的とした。</p> <p>参加学生は16名であり、臨床検査の知識を深め、臨床検査技術を習得し、体力測定会および健康教室で高齢者の健康増進活動を行った。本研究は倫理委員会の承認後、対象者に同意を得て実施した。地域高齢者49名を対象とし、体力測定会では、超音波検査、血圧測定、尿検査および体力評価などを実施し、その後の相談に応じ、健康教室では、臨床検査を用い睡眠衛生・血圧指導による認知症予防効果を検討した。睡眠衛生・血圧指導により、動脈硬化、血圧または認知機能に改善が認められた。学生は、体力測定会、健康教室および睡眠衛生・血圧指導の経験を通して、多職種連携による地域健康増進活動の重要性を理解し、医療関連従事者に必要な知識・技術およびコミュニケーション能力を向上した。</p>					
活動成果の公表					
参加学生の5名が地域創成メディアーター学生発表会において報告した。また、成果の一部を2017年度生命健康科学部生命医科学科第2回卒業研究発表会において報告した。現在、関連の学会誌への投稿準備を進めている。					

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑤高齢者・学生交流・LHS				
フリガナ氏名	ヤザワ ヒロナリ 矢澤 浩成	所属・職名	生命健康科学部 理学療法学科・講師		
活動課題	健康増進サークルへの参加が学生の臨床力と研究力に与える効果				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ヤザワ ヒロナリ 矢澤 浩成	代表者	理学療法学科・講師	理学療法学	修士	サークル運営補助・効果判定・学生指導
トダ カル 戸田 香	分担者	理学療法学科・教授	理学療法学	博士	学生指導・研究補助
活動経過と成果					
<p><活動経過></p> <p>(平成26年より月2回の頻度で健康増進サークル(通称KCGサークル)を継続中)</p> <p>平成29年6月 理学療法学科3年生に対してサークルの主旨を説明し、6名が参加することとなった。参加継続中の4年生と合わせて11名が月2回のサークルに参加した。学生の発案で鳴子踊りおよびポールウォーキングを健康体操の一部に取り入れ、学生が主体となってサークル参加者である地域高齢者に運動指導を継続して行った。</p> <p>平成29年7月 高蔵寺高森台地区の夏祭りにおいてKCGサークル全員で鳴子踊りを披露した。</p> <p>平成29年11月 卒業研究として、鳴子踊りが身体的・精神的健康に及ぼす効果を発表した。</p> <p>平成29年12月 ポールウォーキングを指導し、効果検証のための協力者を募り介入を行った。</p> <p><成果></p> <p>夏祭りで披露した鳴子踊りはサークルメンバー30名と学生11名が一体となり大盛況であった。</p>					
					
<p>学生の発案から始まった鳴子踊りによってサークル参加者は楽しく運動することを体感し、さらに夏祭りへの参加という目標ができたことでサークルの一体感が生まれた。学生は指導するだけでなく自らも鳴子踊りに参加することでサークルメンバーとの世代間交流が促進された。</p> <p>また学生は、サークルへの参加によって予防理学療法を実践することができ、専門職としての技能と準医療人としての自覚を高めることができた。さらにサークル参加者には学生の卒業研究の対象者として協力していただき、学生の臨床力のみならず研究の場としても活用させていただくことができた。</p> <p>KCGサークル発足より4年が経過し、地域住民の健康および学生の臨床力・研究力教育の場として定着した。</p>					

活動成果の公表

○2017年度理学療法学科卒業論文集

山浦奈美：鳴子踊りは高齢者も楽しめる？- 体操教室参加者の心身に与える影響-

○第4回地域創成メディエーター学生発表会

山浦奈美：KCGサークルで実践！「高齢者も鳴子踊りは楽しめる？」

木股孝仁：KCGサークルで臨床能力を身に付ける

吉田圭穂：KCGサークルで苦手意識を克服！

加藤拓磨：KCGサークルでコミュニケーション能力を磨く

○4年間のKCGサークルの成果として、高齢者に対する健康増進効果、世代間交流による心理的効果、予防理学療法実践による学生への教育効果、について学会等で発表する予定である。

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑥シニア大学 Chubu University Active Again College (CAAC)				
フリガナ氏名	ホッタ ノリオ 堀田 典生	所属・職名	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科・准教授		
活動課題	健康・体力づくりを推進する地域高齢者リーダーの育成は可能か				
活動組織	(分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)				
フリガナ氏名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ホッタ ノリオ 堀田 典生	代表者	スポーツ保健医療学 科・准教授	運動生理学	博士(医学)	研究全般
ツシマ アキラ 對馬 明	分担者	理学療法学科・教授	理学療法学	博士(生体 情報)	CAAC 受講生対応
活動経過と成果					
目的	<p>健康寿命と寿命間には約10年間あり、その10年間での医療費支払いが一生の7割以上を占めている今日では、<u>健康寿命の延伸が本国の大きな課題</u>である。運動は、身体的フレイル(ロコモティブシンドロームやサルコペニアといった身体的弱化)のみならず、社会的フレイル(社会的なつながりの減弱)の予防改善に貢献し得る。しかし、運動教室などを官民が協働あるいは個別に開催したとしても、<u>すべての高齢者をカバーできない</u>。また、<u>運動指導の人的資源は足りない</u>。超高齢化社会に向けて、<u>高齢者による高齢者への運動指導の実施が求められている</u>。</p> <p>そこで本研究の目的は、<u>CAAC健康増進実習において、参加者が運動を指導する経験を積むことにより、地域の健康運動のリーダー育成ができるか検討すること</u>を目的とし、以下の点について学生に学びの機会を与えることにした。</p> <p>1) <u>本学学生には、地域リーダーの養成(運動指導の仕方を指導する)に従事させることでキャリアに結び付けさせる</u>、2) <u>高齢者による高齢者への運動指導の場を見せることにより、超高齢社会を持続させるための一つのモデルを学ばせるよう努めた</u>。</p>				
計画・方法	<p>生命健康科学部の学生を対象にした。CAACの1年次共通科目“健康増進実習”を利用し、半年から1年の期間にて高齢者と共に実習を受け、さらに<u>指導</u>や身体測定結果の管理およびそのフィードバック(<u>プレゼンテーション</u>)に関わった。受講者が、<u>運動指導ができるようになるような授業構成とした</u>。授業の最後に、<u>学生と受講高齢者双方にアンケートを実施し、この取り組みが両者(学生-受講者)にどのような効果があるのか調査した</u>。堀田(代表者)が研究全般を担当し、對馬(分担者)がCAACワーキンググループ委員長としてCAAC受講者の対応をした。</p>				

成果

スポーツ保健医療学科 7 名(3 年生 2 名、2 年生 3 名、1 年生 2 名)が本プロジェクトに参加した。対象となった CAAC 授業の受講生は、13 人であった。授業は 16 回実施され、初回と最終回が体力測定であった。

地域のリーダーとしての自覚をもつことができたかという CAAC 授業の受講生を対象にした質問では、56%が自覚をもてたと回答し、自覚を持てなかった人数をわずかに上回った。実際に運動指導を行ったかという質問に対しては、5.9%が家族や身内などに実施し、12%が家族や身内以外に実施したと回答した。家族身内と身内以外にも実施した人は 12%であった。一方で、23.5% は運動指導には至らなかったという結果になった。

CAAC の OB OG を対象に、運動指導の練習のために、本学学生に対して運動指導を試みるという会を実施した。6 名(内 5 名は運動指導を実施している)が参加をし、本機会に対して全員が好意的な反応を示した。

参加学生に対しては、1, 全く思わない、2, 思わない、3, どちらでもない、4, 思う、5, とても思う、の 5 件法にて質問した。キャリア形成に役立ったかという質問の平均値は、4.3 であり、キャリア形成に結び付くことが分かった。また、地域のリーダーを育成することを理解して指導できたかという質問の平均値は、4.0 であり、学生が、本授業の趣旨を理解して活動に取り組んでいることが伺えた。

活動成果の公表

第 8 回中部大学 ESD 研究・活動発表会にて発表 持続可能な超高齢社会に向けた健康寿命延伸のための運動法(加藤達也、堀天、長谷川弓珠) 2017 年 7 月 12 日

中部大学 第 4 回地域創成メディエーター学生発表会(プラス・エクスプレッション) 2018 年 2 月 7 日

- ・加藤達也「『 』」
- ・堀天「「スポーツの街」を創成する」

平成29年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化				
フリガナ氏名	ヨコテ ナオミ 横手 直美	所属・職名	生命健康科学部保健看護学科・准教授		
活動課題	中部大学で開催する乳児と母親に対する子育てセミナーによる看護学生の共学・共育プロジェクト				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ヨコテ 横手 ナオミ 直美	代表者	保健看護学科・准教授	母性看護学	修士(保健学)	研究総括、子育てセミナー講師
ヤマシタ 山下 メグミ 恵	分担者	保健看護学科・講師	"	修士(看護学)	子育てセミナー講師、学生統括
オカクラ 岡倉 ミサキ 実咲	分担者	保健看護学科・助手	"	学士(看護学)	子育てセミナー運営、データ収集・分析
ハンモト 橋本 タエコ 妙子	分担者	"	"	修士(保健学)	子育てセミナー運営、データ収集
活動経過と成果					
<p>1. 平成 27～29 年度の活動概要</p> <p>ベビービクスと子育てミニレッスンによる体験型子育てセミナーを、春日井市近隣に在住する乳児とその母親を対象に平日に 4 回実施した。各回のテーマを以下に示す。ベビービクスは乳児の月齢に合わせて横手が指導した。なお、平成 28 年度から 4 回目の応急手当では、スポーツ保健医療学科の北辻耕司助手(救急救命士)が講師を務め、乳児シミュレーションモデルを用いて、より本格的な演習を行った。</p> <p>第 1 回 ベビービクス+ママ&ベビーのためのアロマ 第 2 回 ベビービクス+赤ちゃんの発育発達とおもちや 第 3 回 ベビービクス+おっぱいと離乳食 第 4 回 ベビービクス+赤ちゃんのもしものときの備え</p> <p>参加した母子は、平成 27 年度 17 組、28 年度 12 組、29 年度 13 組で、合計 84 名であった。</p> <p>2. 子育てセミナー運営要領</p> <p>運営は、研究代表者・分担者と母性看護学領域のゼミ生を中心に行った。開催に先立ち、学生にスタッフマニュアルと会場の配置図を配付し、運営方法について説明した。次いで、ベビービクスの DVD を視聴しながら、赤ちゃん人形で実際にベビービクスを練習した。当日は、各回 3～4 名の学生が交替で学生スタッフとして活動した。事前準備として、会場設営、参加者の受付、乳児の体調確認(体温・体重測定)を行い、セミナー開始後は学生一人が 4～5 組の母子を受け持ち、母親に声をかけたり、母親が子育てミニレッスンに集中できるようにベビーシッター役を担った。各回の終了後はショート・ミーティングを行い、学生の感想や意見を聞いて改善に活かした。なお、参加者と学生スタッフは、レクリエーション保険に加入した。駐車場および会場内での安全確保と衛生面には、細心の注意を払い、3 年間無事故であった。</p>					

3. 国際交流と見学者対応

平成 28 年度の第 2 回は Yale University (USA) の助産学専攻学生 2 名と教員 1 名の参加見学があり、セミナー終了後に、感想や意見を交換した。両国の学生は、国は違えども母親たちが置かれている共通したストレスフルな状況や地域でのサポートが必要であると気づいていた。このほか、近隣の勤務助産師、運動指導者、幼稚園園長など計 6 名の見学者があった。

平成 27 年 7 月の ICMAPR (ICM アジア太平洋地域会議、横浜) では、本教育研究費の助成を受けた学生 3 名が発表補助として参加し、国際学会で世界の助産師および助産学生と交流する貴重な体験ができた。うち 2 名は助産師課程に進学し、専門雑誌への投稿の一部を執筆した。

4. 子育て支援の活動成果と「活動報告会」の開催

子育てセミナーの前後で母親に質問紙調査を行った。各回のプログラムが概ね好評であり、EPDS で測定した産後うつ病のリスクも軽減した。また母親同士の交流が深まり、セミナー終了後もランチ会などで繋がりは継続しており、身近なネットワーク形成の一助となった。

毎年 11 月の大学祭期間に、コモンズセンター 2 階ステージエリアにおいて、本学の学生や一般来校者に対して、「子育てセミナー活動報告会」を行った。学生は本セミナーでの学生の役割と当日の様子、学生の気づきや学びをパワーポイントで発表し、達成感や充実感を得た。また、当該年度のセミナーに参加した母子も来場いただいたことで、学生らはさらに乳児の成長発達を実感し、母性看護学臨地実習では体験できない学びを得ることができた。

本セミナーの運営を通して、学生は生後 2～8 か月頃までの乳児の発育発達の過程と母親の子育ての悩み等について事例で学び、地域における子育て支援の一端を経験することで、まさに母子と「共学・共育」ができたと考える。さらに 28 年度は 3 年生 2 名、29 年度は 4 年生 6 名が、本活動で『動く』の単位認定がなされ、地域創成メディエーターを資格授与された。

これまでの活動実績が認められ、本セミナーは平成 30 年度春日井市政 75 周年記念市民協同事業に採択された。今後さらに、学生主体のセミナーとして発展させたい。

活動成果の公表

- 大学ホームページでの公表 (毎年開催報告)
http://www3.chubu.ac.jp/faculty/yokote_naomi/kosodate_seminar/
- 専門雑誌の誌上発表
 横手直美：いま知りたい！産後ケア・育児支援としてのエクササイズの活用—子育てセミナー「ベビービクスと子育てミニレッスン」の意義と効果. 助産雑誌, 7(8): 640-645, 2016.
 横手直美, 岡倉実咲, 山下恵他：中部大学で開催する子育てセミナーによる看護学生の共育・共学プロジェクトの実践. 助産雑誌, Vol. 71(1): 58-63, 2017.
- 学会発表
 Yokote, N., Yamashita, M., Okakura, M.: Effectiveness of a new parenting support program consisting of BABYBICS and childcare education in Japanese mother and their infants. 第 35 回日本看護科学学会学術集会, 広島国際会議場, 広島市, Dec, 2015.
 Yamashita, M., Yokote, N., Okakura, M., et al.: New Approaches to Parenting Support and Brief Childcare Education for Japanese Mothers with infants: The BABYBICS Program, The International Confederation of Midwives Asia Pacific Regional Conference, July, 2015.
 Yokote, N., Yamashita, M., Okakura, M., et al.: The Psychological Effects of Parenting Support and Brief Childcare Education for Japanese Mothers with Infants: An Evaluation of the BABYBICS Program, The International Confederation of Midwives Asia Pacific Regional Conference, July, 2015.
 山下恵, 岡倉実咲, 橋本妙子, 横手直美：大学主催の子育てセミナー運営への参加が看護学生におよぼす教育効果. 第 31 回日本助産学会学術集会、徳島、2017 年 3 月.

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（平成 25 年度採択）
『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業』
平成 29 年度 成果報告書

発行日 2018（平成 30）年 3 月

編集発行 中部大学 地域連携教育研究推進部
〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200 番地
電話：0568-51-1763 FAX：0568-51-4659
<http://www3.chubu.ac.jp/coc/>

印刷 木野瀬印刷株式会社
〒486-0958 愛知県春日井市西本町三丁目 235 番地